# 野間窯跡群

1982

福岡県教育委員会

岡垣バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第1集

# 野間窯跡群

1982

福岡県教育委員会



遺跡付近俯瞰 1



遺跡付近俯瞰 2



1号窯焚口付近断面



3号窯焚口付近断面

この報告書は建設省九州地方建設局から委嘱を受けて、福岡県教育委員会が1980・1981年度に発掘調査を行った、一般国道3号線岡垣バイパス建設予定地内の埋蔵文化財についての調査記録の第1集です。

調査の内容については、本文に記すとおりですが、遠賀郡内で窯跡の調査が行われ たのははじめてであり、有意義な結果を得ることができました。

この調査が行われた1980年は長雨・冷夏の天候異変の年でありましたが、悪条件のなか調査に御協力をいただいた地元の方々、岡垣町教育委員会社会教育課、建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所他関係諸氏・諸機関に感謝申し上げます。

本書が文化財の保護と活用という点で御利用頂くことを期待して序といたします。

1982年 3 月31日

福岡県教育委員会
教育長 友野降

## 例言

- 1. 本書は建設省九州地方建設局から委嘱を受けて、福岡県教育委員会が行った、一般国道3 号線岡垣バイパス建設予定地内の埋蔵文化財の発掘調査の報告である。
- 2. 本報告書の執筆分担は次のとおりである。

- 3. 遺物の復原は九州歴史資料館で行い、岩瀬正信が指導にあたった。
- 4. 遺物の実測は平田春美の助力を得、遺構、遺物の製図には浜田信也・中間研志・豊福弥生の助力を得た。
- 5. 遺物の写真撮影は平島美代子が、航空写真は九州歴史資料館の石丸洋による。
- 6. 本書の編集は橋口が行った。

# 本文目次

			頁
Ι		章	1
	1	調査に至る経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
	2	位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	3
II	•	<b>&amp;掘調査の記録</b>	5
	1	はじめに	5
	2	遺 構	-
		. )窯跡	•
		2)灰原	
		3)その他	12
		!)小結····································	~ ~
	2	遺 物	
		. )土器·	
		2) 石器	
Ш	•	ミとめ	73
	1	野間窯跡出土の「似非土師須恵器」について	
		. ) はじめに	
		2)問題の所在	_
		s )野間窯跡群出土の「似非土師須恵器」について	
		: )おわりに	
	2	北部九州におけるいわゆる「赤焼土器」について	
		)似非土師須恵器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	-
		; )擬土師須惠器····································	
		; )似非須恵土師器····································	
		. )擬須恵土師器	
	3	野間窯跡群の歴史・地理的位置	87

## 図版目次

				•
図	版	1	上	遺跡付近俯瞰 1
			下	遺跡付近俯瞰 2
図	版	2	上	遺跡付近俯瞰 3
			下	遺跡付近俯瞰 4
図	版	3	上	遺跡遠景1 .
			下	遺跡遠景 2
図	版	4	上	窯跡群全景
			下	1 号窯全景
図	版	5	上	1号窯第2次床面
			下	1号窯第1次床面
図	版	6	上	1 号窯焚口付近断面
			下	1 号窯煙道
図	版	7	上	1 号窯煙道部の掘削工具痕
			下	同上拡大
図	版	8	上	2号窯第2次床面
			下	2 号窯第1次床面遺物出土状態
図	版	9	上右	2号窯全景1
			左	2 号窯排水溝
			下右	2 号窯全景 2
			左	2 号窯壁の掘削工具痕
図	版	10	上	- 2号窯煙道部の掘削工具痕
			下	同上
図	版	11	上	3号窯全景
			下	3 号窯煙道
図	版	12	上	灰原イ
			下	灰原イ
図	版	13	上	灰原口
			下	灰原口
図	版	14	上	灰原ハ

			下	灰原ハ
図	版	15		出土土器1
図	版	16		出土土器 2
図	版	17		出土土器3
図	版	18		出土土器 4
図	版	19		出土土器 5
図	版	20		出土土器 6

# 挿 図 目 次

第	1	図	遺跡位置図(縮尺 1 / 25,000) 4
第	2	図	野間窯跡群付近地形図(縮尺 1/2,000)6
第	3	図	遺跡全体図 (縮尺 1/300)7
第	4	図	野間1号窯(縮尺1/60)折込
第	5	図	野間1号窯土層図および横断面(縮尺1/60)折込
第	6	図	野間 2 号窯(縮尺 1 / 60)折込
第	7	図	野間 3 号窯(縮尺 1 / 60)折込
第	8	図	野間 3 号窯横断面 (縮尺 1 / 60) 9
第	9	図	灰原イ・ニ (縮尺 1 / 60)10
第	10	図	灰原口(縮尺1/60)11
第	11	図	灰原ハ(縮尺 1 / 60)13
第	12	図	最下段の柱穴群(縮尺 1 / 60)折込
第	13	図	野間 2 号窯排水溝の工具痕(縮尺 1 / 3 )15
第	. 14	図	1号窯出土土器1 (縮尺1/3)31
第	15	図	1 号窯出土土器 2 (縮尺 1 / 4)33
第	16	図	2 号窯出土土器 1 (縮尺 1 / 3)34
第	17	図	2 号窯出土土器 2 (縮尺 1 / 4) ······35
第	18	図	3 号窯出土土器(縮尺 1 / 3 )37
第	19	図	灰原イ出土土器1 (縮尺1/3)41
第	20	図	灰原イ出土土器 2 (縮尺 1 / 4)43

第	21	図	灰原イ出土土器 3 (縮尺 1 / 4 )44
第	22	図	灰原口出土土器 1 (縮尺 1 / 3 )49
第	23	図	灰原口出土土器 2 (縮尺 1 / 3 )
第	24	図	灰原口出土土器 3 (縮尺 1 / 4)55
第	25	図	灰原口出土土器 4 (縮尺 1 / 4 )56
第	26	図	灰原ハ出土土器 1 (縮尺 1 / 3 )
第	27	図	灰原ハ出土土器 2 (縮尺 1 / 3 )63
第	28	図	灰原ハ出土土器 3 (縮尺 1 / 4 )65
第	29	図	灰原二出土土器(縮尺 1 / 3 )65
第	30	図	柱穴群出土土器 1 (縮尺 1 / 3 )66
第	31	図	柱穴群出土土器 2 (縮尺 1 / 4 )67
第	32	図	注記不明および表採土器 1 (縮尺 1 / 3 )69
第	33	図	注記不明および表採土器 2 (縮尺 1 / 4 )71
第	34	図	石器 (縮尺1/2・1/3)
第	35	図	似非土師須恵器1(縮尺1/4)77
第	36	図	似非土師器 2 (縮尺 1 / 2 ・ 1 / 4 )78
第	37	図	擬土師須恵器(縮尺 1 / 4 )79
第	38	図	似非須恵土師器(縮尺 1 / 3 )80
第	39	図	擬須恵土師器(縮尺 1 / 3 )80
第	40	図	いわゆる「赤焼土器」集成1(縮尺1/3・1/6)83
第	41	図	いわゆる「赤焼土器」集成 2 (縮尺 1 / 3 )85
第	42	図	野間灰原口出土蓋付(縮尺 1 / 3 )88

,

## I. 序 章

## 1.調査に至る経過

一般国道3号線岡垣バイパスは、遠賀郡岡垣町山田の山田峠から同町と宗像市との境にある城山峠の岡垣側登り口までが建設予定地として計画された。この計画により、1977年9月建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所から福岡県教育委員会あてに、道路建設予定地内の埋蔵文化財の分布調査の依頼があった。

当教育委員会はただちに係員を現地に派遣し、分布調査を行わせ、1.発掘調査の必要のある地点、2.埋蔵文化財の存在が予想されるが試掘によってその有無を確認する必要ある地点、3.樹木の繁茂いちぢるしいため伐採後再度分布調査の必要ある地点、として計8地点を、1977年10月、九地建北九州国道工事事務所あてに回答した。

この結果をもとに、1979年11月九地建北九州国道工事事務所より、第7・8地点については 昭和55年度に工事に着工したいので、早急に調査を実施してほしい旨の依頼があった。

当教育委員会は第7・8地点を試掘の必要のある地点としてあげていたので、再度担当者を 現地に派遣し、分布調査を行い、同様の地形をなす第9地点を追加して、早急に予備調査を行い いその結果に基づいて本調査の協議を行いたい旨を、1980年3月九地建北九州工事事務所に回 答した。

以上の協議をもとに九地建北九州国道工事事務所より「文化財保護法第57条の3の規定による通知書」が文化庁に提出され、さらに具体的な協議を重ねて、第7・8・9地点の予備調査を行った。

予備調査の日程・関係者等は下記の通りである。

調査期間

1980年5月6日~5月24日

調査関係者

 総括 福岡県教育委員会教育長
 教育長
 浦山太郎

 文化課長
 藤井 功

 庶務会計
 文化課主任主事
 三瓶寧夫

 調査担当
 文化課主任技師
 橋口達也

〃 主任技師

中間研志

予備調査の結果, 第7地点からは窯数基の存在が確認され, 第8地点からは窯の付帯施設と 考えられる炭を充塡した土壙が検出され、本調査を行う必要が生じた。第9地点は3ヶ所のト レンチを設定して発掘したが,丘頂部ということもあって何らの遺構も検出されなかった。当 教育委員会は以上の結果を九地建北九州工事事務所に通知し、協議の結果土地問題がすべて解 決していた第7地点の調査を1980年度に、土地問題の解決次第で第8地点の本調査を実施する 運びとなった。

第7地点の本調査の日程・関係者については下記の通りである。

1980年7月28日~10月30日

調查関係者 総 括

福岡県教育委員会 教育長

友野 隆

文化課長 文化課主任主事 三瓶寧夫

藤井 功

庶務会計 調查担当

文化課主任技師 橋口達也

〃 主任技師

木下 修

" 主任技師 石山 勲

" 主任技師 小池史哲

〃 主任技師

中間研志

第8地点の本調査は、1981年度事業として行った。窯の存在を予測した東斜面の全面表土剝 と、反対側の西斜面に  $3 \times 15$ mのトレンチを設けて発掘したが (第2図), 斜面は第7地点と 比してかなり急であって、窯は存在しなかった。予備調査で検出した炭の充填した土壙は第7 地点にも数基あり、窯に関係するものであろうと思われるが、その他の遺構・遺物は何ら検出 されなかった。調査の日程・関係者は下記の通りである。

調査期間

1981年10月5日~10月20日

調査関係者

総 括

福岡県教育委員会 教育長

友野 隆

文化課長

藤井 功

庶務会計

文化課主任主事

三瓶寧夫

調査担当

文化課主任技師 橋口達也

なお、予備調査から、本調査を通じて長雨・冷夏のなか、地元の皆さま、岡垣町教育委員 会教育課の皆さま,九地建北九州国道工事事務所の皆さま方に多くの御協力をいただき調査が 順調に進行したことは感謝の念にたえません。

## 2. 位置と環境

野間窯跡群は遠賀郡岡垣町大字野間字石橋に所在する。窯跡群の存在は今回の調査ではじめて確認されたものであり、この近辺にはすぐ東に野間古墳が、約1km西に高倉東田古墳群をはじめとする古墳群が多く知られていた。

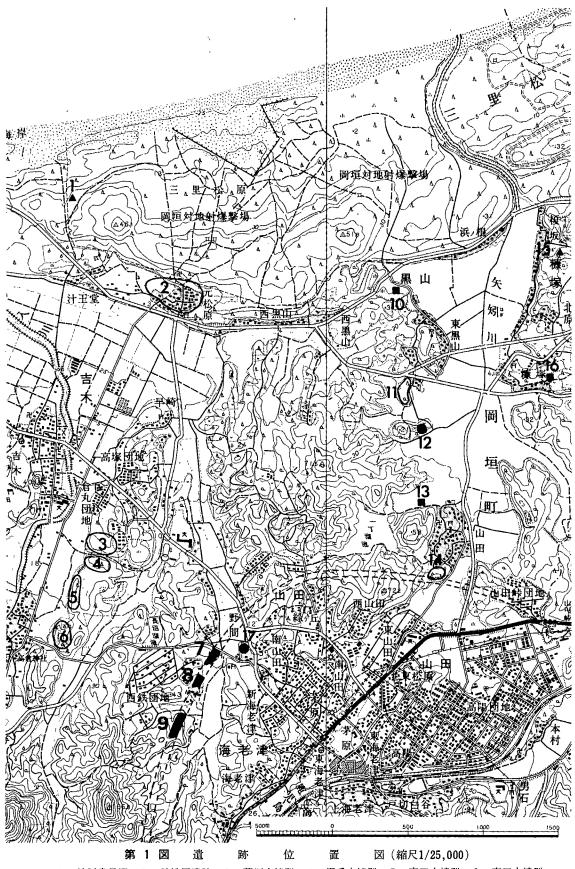
岡垣は景勝の地三里松原の砂丘が玄海灘に面し、その背後には汐入川と矢矧川の形成する沖 積地が拡がり、それを臨む低丘陵には縄文・弥生・古墳時代の多くの遺跡が知られている。

縄文時代には前・中・後期の各時期にわたる元松原遺跡,後期の榎坂貝塚が調査されている。 弥生時代の著名な遺跡としては元松原遺跡があげられる。元松原遺跡については同報告書に詳細はゆずるが(註1),まず短身の銅矛があり、この付近で前期末のいわゆる金海式甕棺も採集されている。次には中期のものと思われる鉄矛・錐の他に細形銅戈・石戈・石剣等が出土し、 又同町吉木からは銅戈鎔范が出土しており、又岡垣町出土の中細銅剣・銅矛等は著名であり、 この地域が弥生時代に元松原を中心として一つのまとまりをもっていたことがうかがえる。

古墳時代には、沖積地に臨む低丘陵に多くの古墳群が形成され、片山古墳群(註2), 東田古墳群(註3)等が調査されている。野間の窯は今回の調査ではじめて発見されたものであるが、調査の結果、この地は砂岩系の第三紀層からなっており、丘頂部に住居跡等を形成するには不適当なところであり、斜面に横穴を掘るか、又は窯を作るには適したところといえよう。今後近辺の古墳群出土の土器等との対比から生産と消費等の諸問題解明の端緒がひらけたといえる。

#### ·註

- 1. 岡垣町教育委員会「元松原遺跡」岡垣町文化財調査報告書 第4集 1981
- 2. 福岡県教育委員会「片山古墳群」福岡県文化財調査報告書 第46集 1970
- 3. 岡垣町教育委員会「東田古墳群」岡垣町文化財調査報告書 第2集 1977



- 1. 汁王堂貝塚 2. 元松原遺跡 3. 蒐坂古墳群 4. 縄手古墳群 5. 裏田古墳群 6. 東田古墳群 7. 7地点(野間窯跡群) 8. 8地点 9. 9地点 10. 黒山遺跡 11. 和田古墳群 12. 沖古墳
- 13. 大坪遺跡 14. 楠木古墳群 15. 榎坂貝塚 16. 糠塚遺跡 17. 野間古墳

## II. 発掘調査の記録

## 1. はじめに

第8・9地点については調査に至る経過の項で既にのべたので、ここでは第7地点について のみ記述する。

第7地点は国道3号線海老津から西に曲り、高倉神社へ向う県道野間須恵線に南接する標高28mの東西にはしる低丘陵の先端部にあたる。調査はまず予備調査の際に丘頂部にトレンチを設け発掘したが何らの遺構も検出されなかった。次に南側の段々畑の部分にトレンチを設け発掘した結果、炉壁・炭化物・須恵器が多量に出土する個所2ヶ所と、包含層1ヶ所を確認した。

本調査の際はこの部分の全面表土剝を行ない、又南側の水田部にも 3×10mのトレンチ 3ヶ所を設定して発掘したが、この部分からは何らの遺構・遺物も検出されなかった。(第2図)

第7地点で検出した遺構は窯3基,灰原4,炭を充塡した土壙4,工房跡かと思われる柱穴群と,灰原下が地山でないために場合によっては排水施設か何かがあるものではないかと発掘した大穴1がある(第3図)。この大穴からは弥生式土器の細片と,鏃・石ヒ等を含み,弥生時代にはすでに存在した,自然に形成された谷状のものと考えられる。

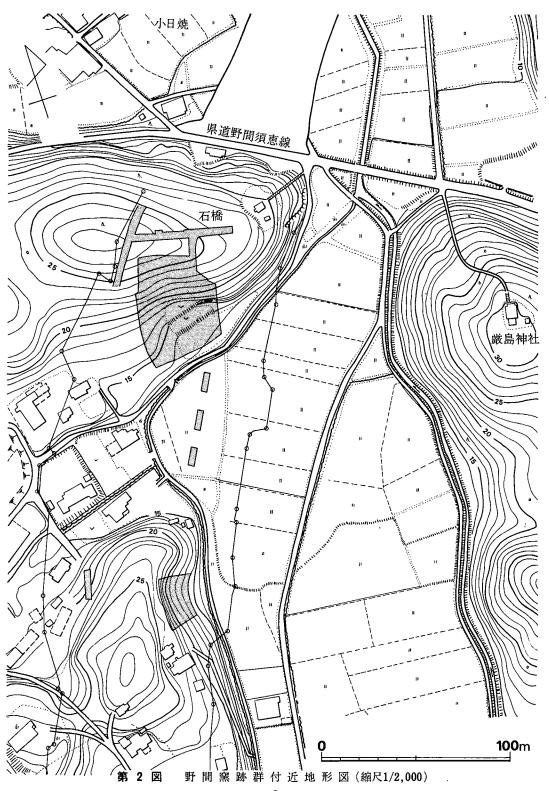
以下各遺構・遺物を順を追って記述する。

## 2. 潰 構

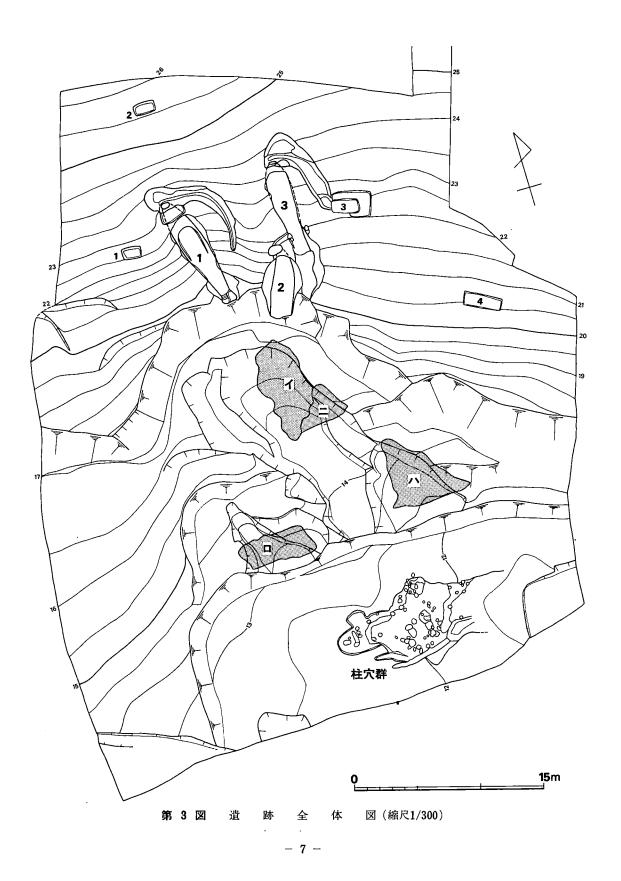
## 1)窯跡

## a. 1号窯(第4・5図)

1号窯は前庭部を後世に削られているが、他の部分は比較的に残りがよかった。窯本体は主軸をN-16~Wにとり、残存長は960cm、焚口部の幅87cm、最大幅217cm、煙道部幅58cmを測る。以上は窯築造時つまり第1次床面の数値であるが、本窯は後述するように第3次床面まである。



- 6 -



煙道部は1次~3次まで共通しており、焚口部は2次・3次の面はすでに削られている。最大幅は第2次床面で221cm、第3次床面で30cmを測る。天井は崩壊し、煙道付近で残るのみである。煙道部での高さ69cm、中央部付近での復原高130cm程のものと思われる。燃焼部の平均的傾斜は16°で、焚口部はほぼ水平、煙道部近くで26°を測る。煙道部からは窯本体の東側に弧状に排水溝が設けてある。排水溝の基底は図示するごとく、煙道部で標高21.31m、出口で20.92mと約40cmの高低差がある。溝は人間一人が通れるほどの狭いV字形を呈する。基底での幅は25~30cmを測る。

1号窯の発掘を開始するにあたって、残存した焚口に近い部分の断面を清掃して作業した土層図が第4図に図示したもので、発掘後の土層図は第5図に示した。第4図の第6層が第5図の第1層、第4図の第8~15層が第5図の第2~9層に相当する。第4図の第1~4層は天井壁の崩壊土および埋土である。

土層の観察からは大きくは第1~3次にわたって床面が形成されているが、第1次と第2次の床面においては、強くやけたしっかりした床面の直上、又間層をおいてやはり床面と考えられる須恵器を含まない焼きしめた面があり、細かくは5回にわたって床面がつくられたことがわかる。焚口付近での壁の観察では第1次においては地山を掘削しているが、天井・壁の崩壊を重ねて第2次・第3次の天井・壁の修復が行われたことがわかる。

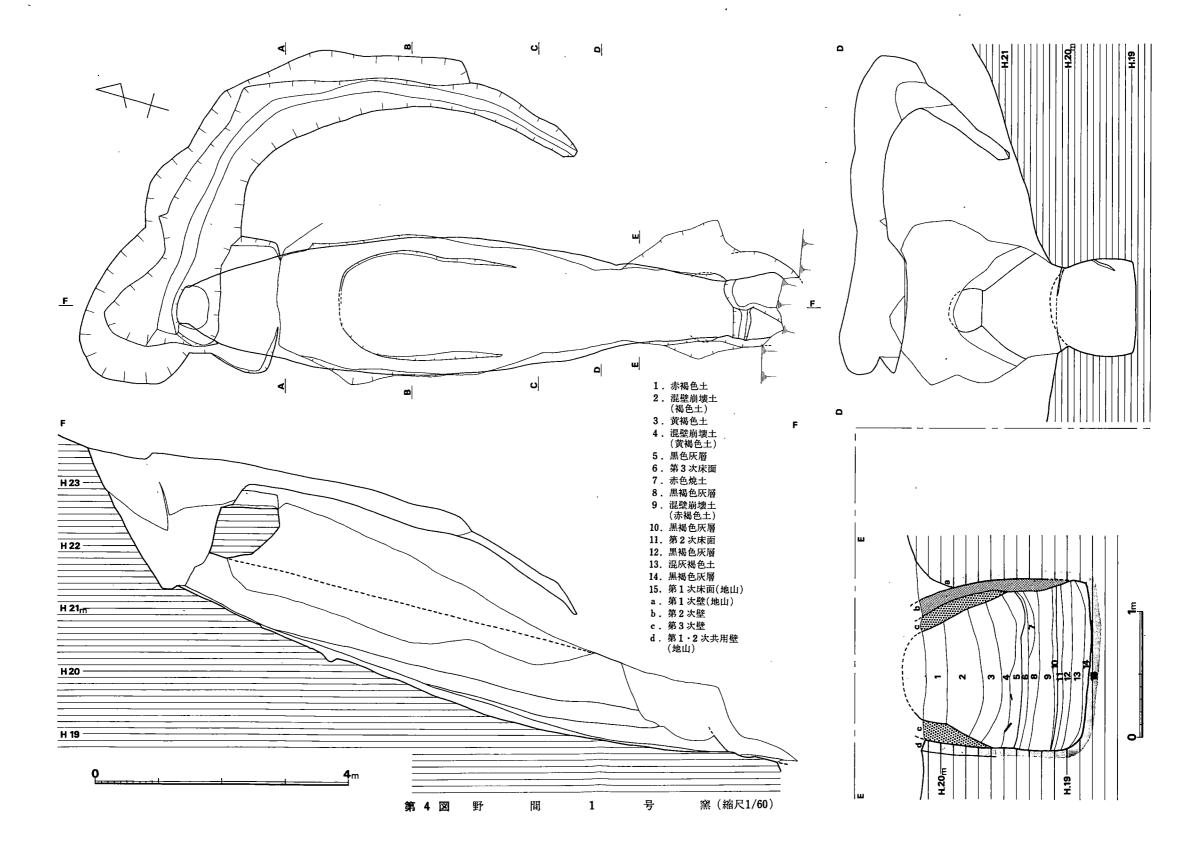
煙道部の排水溝には掘削工具痕が明療に残る。(図版7)工具痕の幅は55mm前後で、縦方向に残る。いわゆる手斧形鉄斧による痕跡である。

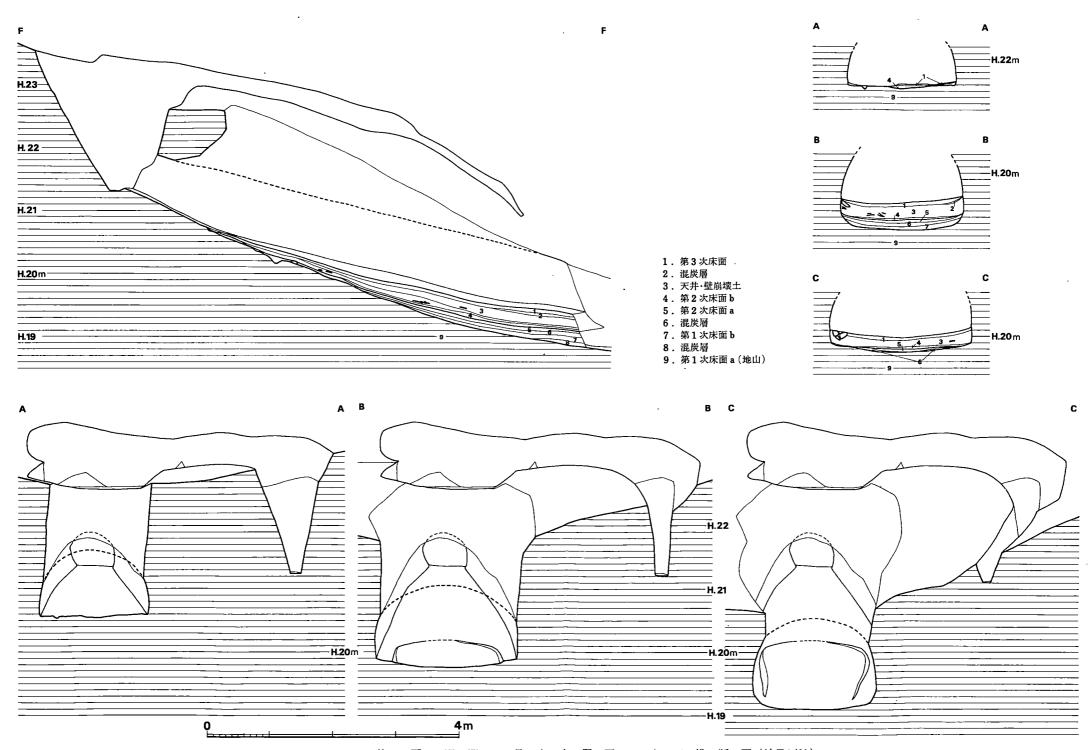
## b. 2号窯(第6図)

2号窯は焚口・前庭部が後世に削平されている。窯本体は主軸をN-13~Eにとり、残存長は558cm、煙道部幅31cm、中央部付近で175cm焚口近くで170cmでこの付近から狭くなっていく。第2次床面での中央部幅は172cmで、全体としてはわずかに第1次床面より幅広い。燃焼部の傾斜は27°程で、焚口近くになるとややゆるやかとなる。煙道は1号・3号とちがい、底径70×32cm、煙出部径120×68cmの長円形の穴をほぼ直に掘っている。床面の中央部には幅25cm深さ10cm前後のU字状の溝を掘り、扁平な石を架して排水溝としている。

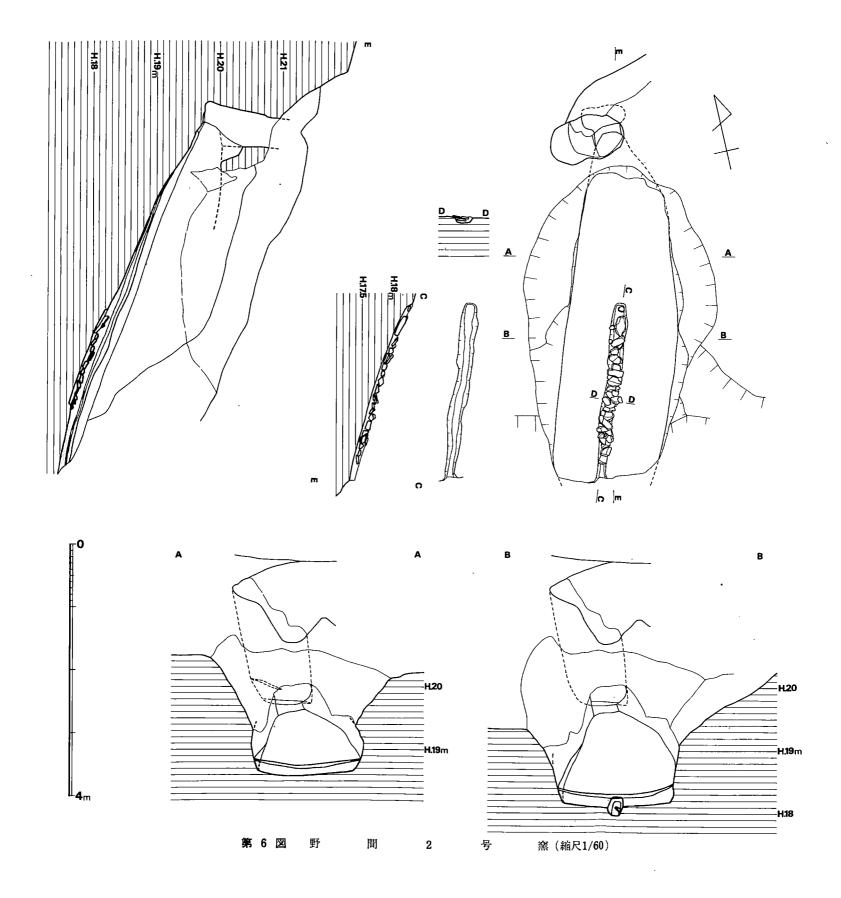
排水溝および窯の床と側壁の境にはU字鍬による掘削痕が(第13図・図版9), 煙道部には幅55mmを測るいわゆる手斧形鉄斧による掘削痕(図版10)が縦方向に残る。

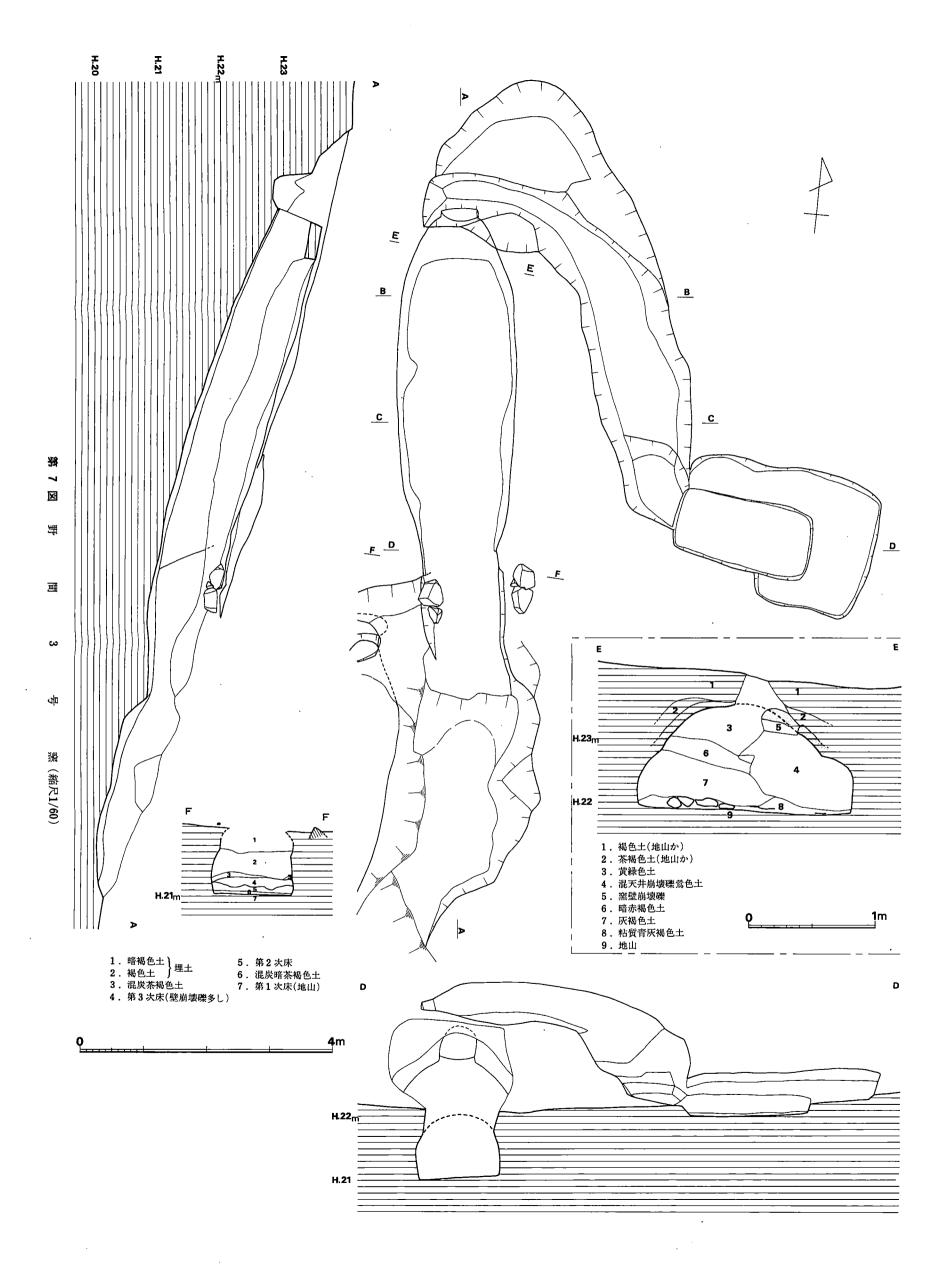
2号窯は第1・2次の床面があり、その間には茶褐色の砂礫層が堆積し、多くの須恵器が出土した。





第5図 野間1号窯土層図および横断図(縮尺1/60)





## c. 3号窯(第7·8図)

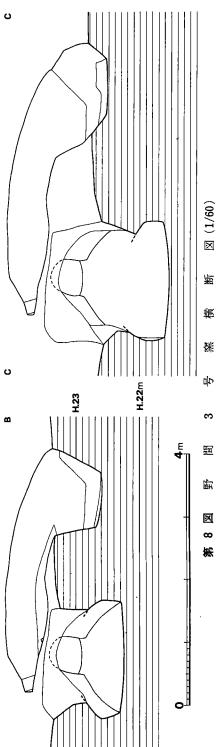
3号窯は灰原をのぞけばほぼ窯全体が残る。前庭部は西側が2号窯の天井崩壊に伴って一部くずれているが、焚口より一段低く、舟底状につくっている。主軸での長さは313cm幅は不明。焚口は幅105~120cmと狭く、上部では一部石組が残る。長さは約210cm。燃焼部は長さ580cm、焚口部の幅120cm、最大幅190cm、煙出部幅56cmを測る。天井はほとんど崩壊して煙道部付近で辛うじて残るのみである。煙道部での高さ55cm、中央部付近での高さは120cm前後と推定できる。前庭部はやや傾斜し、焚口部はほば水平、燃焼部の傾斜はほぼ20°を平均とする。煙道部から、窯本体の東側には弧状の排水溝が設けてある。排水溝の出口には炭を充塡した土壙があったが、これが排水溝と関連あるものか否かはわからない。V字溝の上端幅は150cm前後、基底面の幅は煙道近くで30cm、最大幅で105cmを測る。溝の高低差は35cmである。

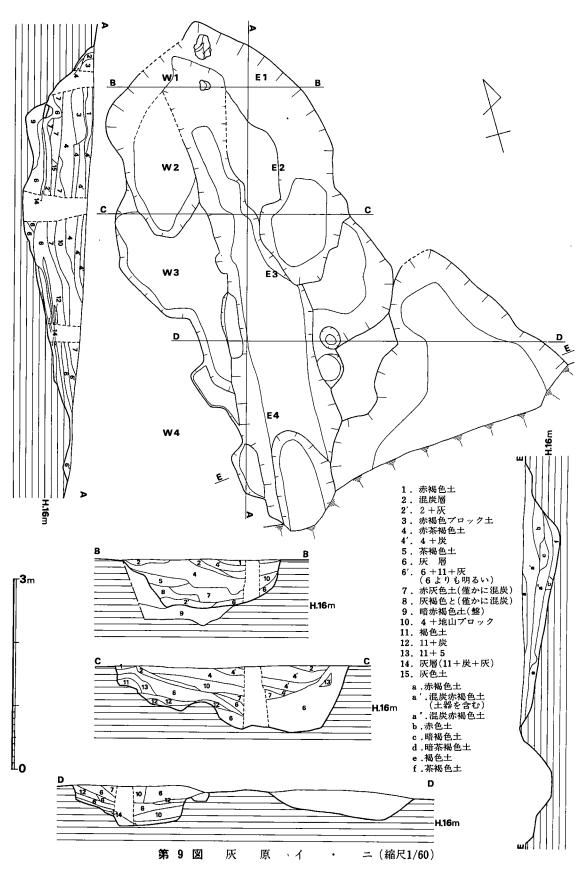
発掘開始前に焚口部の断面を清掃して観察した土層図 m は第7図Fであるが、床面は第1~3次の3面が確認された。第2次床面と第3次床面との間には間層がないので遺物の出土はなかった。窯燃焼部の焚口近くの西壁よりに土師器の完形品が置かれていたが、これは窯で焼かれたものではなかろう。

## 2)灰原

## a. 灰原イ(第9図)

ほぼ南北方向に不整形の穴を掘り灰原としている。灰原部分は後世に削平を受けているが、灰原イの現存の長さ820cm、最大幅375cm、深さは北側で深く105cmを測り、南側に向い次第に浅くなる。

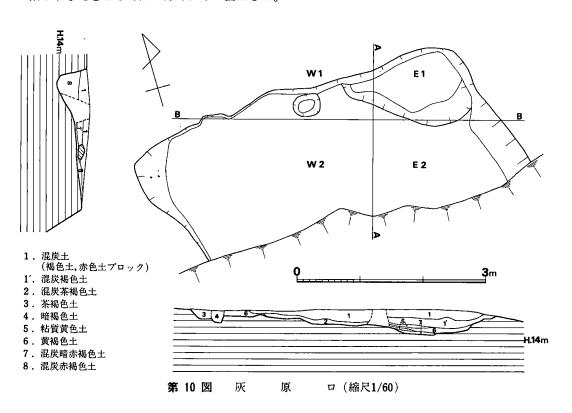




発掘は図示するごとく東1(E1)~東4(E4)区,西1(W1)~西4(W4)区の8区画にわけて発掘し,それぞれの区画において上層から次第に下層に向けて土層にしたがって遺物をとりあげていった。たとえば東4区においては上層→混炭層→赤色土層→混炭灰色土層というように層を分けてとりあげている。遺物は上層と下層とに分けて説明を加えているが,結果的には1・2・3・4・4′・5・7・8・10層を上層,2′・6・6′・9・11・13・14層を下層としている。

## d. 灰原口(第10図)

灰原口も上部および南側の大半を削られている。現存する灰原はほぼ東西に長い長方形を呈している。現存の長さ460cm,幅545cm,深さは一部50cmの部分もあるが,全体に30cm以下で浅い。図示するように東 $1\cdot 2$ ( $E1\cdot 2$ )区,西 $1\cdot 2$ ( $W1\cdot 2$ )区の4区画に分けて発掘し,イと同様各区画で上層から下層へむけて土層にしたがって遺物をとりあげている。結果的には1層が上層, $1'\sim 8$ 層を下層としている。この灰原の下には弥生式土器の細片を包含し、掘りすぎたところでは一部それらが出土した。



## c. 灰原ハ (第11図)

南北に長い不整形の穴を掘って灰原としているが、上部と南側の大半は既に削られている。 現存する長さは625cm,最大幅は500cm前後、深さは100cm弱で南側へ向けて次第に浅くなっている。図示するように東1・2(E1・2)区、西1・2(W1・2)区の4区画に分けて発掘し、遺物のとりあげはイ・ロと同様にしたが、図示するようた土層なので、結果的には上・下の区別はしなかった。

## d. 灰原二(第9図)

灰原イの東南に接して別の灰原が存在した。切り合い関係は灰原二が古い、やはり南北に長い不整形の穴を掘って灰原としており、その北端が残っている。現存の長さは295cm,最大幅は410cm,最も深いところで約40cmを測る。土層は図示するとおりであるが、a'層には比較的多くの土器を含んでいた。

## 3) その他

## a. 土 壙

1号土壙は150×95cmの長方形を呈し、最も深いところで54cmを測る。中には炭が充塡されていた。

2号土壙は170×90cmの長方形を呈し、最も深いところで47cmを測る。中には炭が充塡されていた。

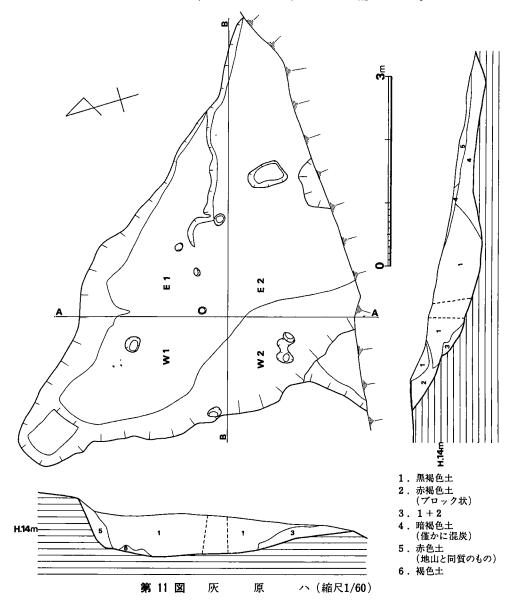
3号土壙は3号窯の排水溝の出口と重複している。外の掘り方は不整形で長辺は北で317cm, 南辺で160cm,幅は214cm,最も深いところで18cm,内の土壙は223×65cm,最も深いところで31 cmを測る。なかには炭が充塡されていた。

4 号土壙は300×105cmの長方形を呈する。最も深いところで20cm弱と残りは悪い。なかには 炭が充塡されていた。

以上の土壙には炭は充塡されているが、土器等は何ら含まれない。当初はこれらが窯の付帯 施設と考えたが、性格が不明なため現時点では何ともいえない。

## b. 柱穴群(第12図)

7地点の灰原のあるところよりさらに一段低い広い部分は、現在の水田面よりわずかに高い。この部分は試掘によって須恵器の包含を確認していたので、発掘を行った。発掘の結果は溝、多くの柱穴からなる不整形な凹部となった。この部分からは窯・灰原等から出土しているものと同種の土器が比較的多く出土した。一応柱穴群としたが、他に窯の西側、水田地区に設けたトレンチに何らの遺構もなかったので、この部分が工房跡である可能性が強い。



## c, 大 穴

灰原イ・ロ・ハともに地山を掘り込んで作られたものではなかった。したがって窯に付帯する排水施設の可能性があったのでこの部分も全面発掘した。結果は灰原口の下で出土した弥生式土器の細片と同様の土器片若干と、石鏃・石ヒ・剝片若干が出土したのみで、弥生時代にはすでに埋没した自然の谷であったことが判明した。

## 4) 小 結

1.

以上説明を加えたように第7地点においては窯3基と灰原4ヶ所,工房跡らしき部分を発掘した。しかし後世の削平によって窯と灰原がそれぞれ分断され、どの窯と灰原が伴うものか判断は難しかった。たとえば2号窯の主軸上には灰原イと口が並んでいる。イが2号窯に伴うならばあまりにも焚口に近接していて不適格で、配置の状況からすれば1号窯が灰原イ・ニと、2号窯が灰原口と、3号窯が灰原ハと連らなるものと考えられる。この窯跡でのヘラ記号は/又は×印の単純なものが多いなかで、2号窯と灰原口にシャープな////印のものがあり、又3号窯と灰原ハからは土錘が出土し、出土遺物の点からもこのことが裏付けられた。

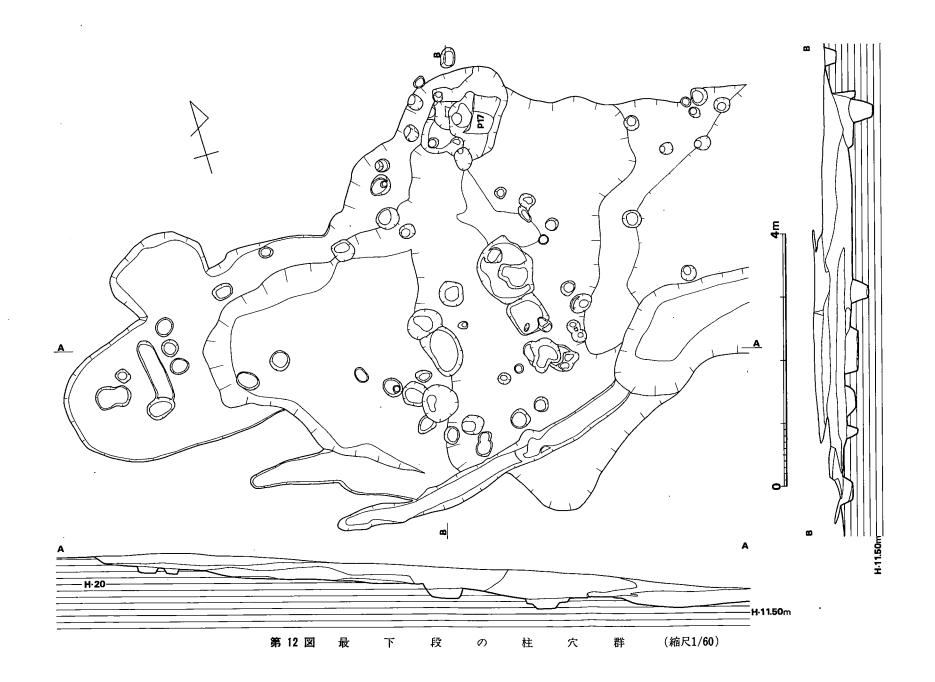
2.

2号窯と3号窯は、2号窯が新しく、又煙道・排水施設の構造が異る。1号窯と3号窯は煙道・排水溝の構造は類似するが、遺構の点からはいずれが古いかはわからない。出土遺物からみた時は3号窯が古い。したがって3号窯→1号窯→2号窯の順で窯は造られたものである。

## 3. 掘削工具痕について (第13図、図版 7・9・10)

1号窯の煙道部・排水溝、2号窯の煙道には幅55mm前後の手斧形鉄斧による縦方向の掘削痕が残り、2号窯の排水溝の掘削痕・床と壁の境のはつり痕にはU字鍬による痕跡が明瞭である。

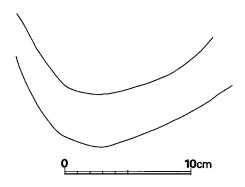
横穴・又は岩盤に掘り込んだ土壙いわゆる盤棺等に残る掘削痕からして、手斧形鉄斧による 荒掘り、U字形鍬による仕上げが行われている点をその都度報告してきた(註)。手斧形鉄斧は



名前の示すごとく木工具として一般的には考えられている。しかし手斧と同様な着柄で手斧鍬としての耕具の機能をもつものが存在することは掘削痕から明らかである。又2号窯煙道,又は土壙側壁に残る縦方向の手斧形鉄斧の掘削痕からは,狭い中でこのような縦方向の掘削痕はつき得ない。手斧形鉄斧の袋部に棒を直に着柄して現在の山芋掘棒のごとき道具を考えたほうがよい。このように手斧形鉄斧は多種多様の機能をもった道具であるといえる。

#### 註

稲築町教育委員会「稲築公園内遺跡」稲築町教育委員会調査報告 1 1975 大任町教育委員会「狐塚古墳群」II 大任町文化財調査報告書 第2集 1978 甘木市教育委員会「池の上墳墓群」甘木市文化財調査報告 第5集 1979



第13図 野間2号窯排水溝の工具痕(縮尺1/3)

## 2. 遺 物

## 1) 土 器

### a. 野間窯跡出土須恵器について

今回の調査で1~3号窯跡と灰原イ・ロ・ハ・ニ,そして工房跡と思われる柱穴群から多数の須恵器が検出された。1号窯跡は3次に亘る窯業を行なっており、2号窯跡は2次、3号窯跡は3次の窯業を行っている。灰原イ・ロはこまかくは数層にわけられるが,上・下2層に大別した。灰原ハは上部面がカットされていたので下層のみの1層とした。灰原ニは1層であり、灰原の範囲も狭く、他に比して遺物の出土量は少い。柱穴群の調査では工房跡と推定されるピット等が検出され、若干の須恵器の出土をみた。

個々の遺物については蓋杯を中心にしてその形態、手法等の特徴から分類して、窯業時期を 検討してみたい。

#### 須恵器の分類

杯蓋については、口縁端部内面の段の有無、天井部と体部の境の沈線の有無、口径の大きさ等により A・Ba・Bb・Ca・Cbに 5 分類した。杯身については、立ち上りの長さ、形態、口径の大小等により A・B・Cに 3 分類したが、杯蓋の如くには B・C間を細分しえなかったし、またそこまでは細分できなかった。杯蓋の A 類は B 類に比して口径が大きく、口縁部内面に段を有し、天井部と体部の境には鋭く沈線が入る。 B 類は、A 類ほどでないが口縁端部内面に若干の段を有し、天井部と体部の境に甘い沈線もしくは凹線の入るものBa類、口縁端部内面にはBa類と同じ若干の段が入るが、天井部と体部の境には段も入らずに丸く仕上げたものをBb類とし、C 類は口縁端部は丸くつくられ、天井部と体部の境部も丸くつくられたものであり、口径の大小により Ca・Cbに細分した。杯身は杯蓋に対応するものが A 類であり、B、C 類はそれぞれ B、C 類に対応するものと思われる。杯蓋 B 類は A 類と同じく古式の特徴を残しているが、これに対応する杯身 B 類は立ち上りが短くなり、新しい傾向にある。これは地域性によるものと思われ当該窯跡 須恵器の特色である。(第42図参照)

杯蓋の調整法はA類は天井部外面は回転へラ削りし、Ba類は回転へラ削り・手持ちへラ削り、Bb類は回転へラ削り・未調整、Ca類は回転へラ削り・手持ちへラ削り・未調整、Cb類は回転へラ削り・手持ちへラ削り、を施している。杯身の調整法はA類は底部外面回転へラ削り、B類

は回転へラ削り・手持ちへラ削り・C類は回転へラ削り・手持ちへラ削りを施している。

したがって、調整法を要約するとA類には手持ちへラ削りと未調整はみられないが、B・C類は調整法は一様でなくいろんな方法がみられる。これもⅣ期の特色であろう。

## 各遺構出土須恵器の所見

1号窯跡では蓋杯、無蓋杯、壺、甕を焼成しており、煙り出し寄りの埋土中からは窯体崩壊時の混入と思われる平瓶が出土した。蓋杯はB類、C類のものであり、他の器種も、同時期の所産によるものである。各窯業時の蓋杯の出土は、1次床面からはB・C類が、2次床面からはC類が、3次床面からはB・C類が出土している。このことより、1次から3次までの出土品については時期差は考えられず、比較的短期間に閉窯されたものと考えられる。

2号窯跡では蓋杯、坩、壺、甕を焼成している。1次床面からはB・C類が、2次床面からはB類の蓋杯が出土しており、1号窯と同様に時期差は認められない。

3号窯跡では蓋杯、提瓶、脚台付壺、甕、そして特殊品の土錘を焼成している。1次床面からはB・C類が、3次床面からはB・C類の蓋杯が出土しており、このことから時間差は認められない。

つぎに灰原であるが、調査時の所見と出土品の検討から灰原イを1号窯,灰原口を2号窯, 灰原ハを3号窯のものと考える。

灰原イからは蓋杯、高杯、提瓶、坩、壺、甕、把手付壺、そして特殊品の甑を焼成している。 下層からはB類・C類の蓋杯が6:7の割合で出土し、上層からはB類・C類が3:3の割合 で出土しておりこのことから、上・下層間に時期差は認められない。

灰原口からは蓋杯、有蓋高杯、無蓋高杯、坩、提瓶、壺、甕、そして特殊品の甑を出土している。下層からはA類・B類・C類の蓋杯が1:21:11の割合で出土し、土層からはB類・C類の蓋杯が14:1の割合で出土している。下層ではB・C類より先行するA類が出土しており上下層ともB類の割合が大である。

灰原ハからは蓋杯、無蓋高杯、坩、壺、脚台付壺、提瓶、甕、把手、そして特殊品の土錘を 出土している。蓋杯はA類・B類・C類の3類がみられ各々4:12:8の割合である。ここで は、当該窯跡では最も古い型式の蓋杯が4個体出土している。

灰原ニからは蓋杯が出土している。蓋杯はB類・C類がみられ各々は2:1の割合である。

柱穴群からは蓋杯、高杯、横瓶、壺、甕、そして鮹壺かとも思われる壺が出土している。蓋杯はA類・B類が各1個体ずつ出ており、図示しなかったがB類・C類の蓋杯が他にもある。D類の杯は柱穴群とは結びつかない混入品である。出土遺物からみると窯内、灰原出土須恵器とは同時期の所産であり、また、261の壺は1号窯出土の壺(30)と非常によく似ており、また249の器形を漁具の鮹壺と考えれば3号窯や灰原ハ出土漁具の土錘と関連が強い。以上の様な点から当該柱穴群を窯跡に伴う須恵器工房跡と考える。

注記不明の須恵器には蓋杯、高杯、平瓶、甕があり、C類の蓋杯がみられる。

表採資料には蓋杯、坩、甕があり、A類・B類・C類の蓋杯がみられる。これは当該窯跡出 土品の資料として時期的にも問題はない。

#### 須恵器の編年

蓋杯の分類を須恵器形式と対比させると杯蓋・杯身A類は第ⅢB様式に比定され、肩部の沈線と口縁端部内面の段を有するという古式の様相を残す。杯蓋Ba・Bb・Ca・Cb類はB類が古い様相をわずかに残すがともに第ⅣA様式の古式に位置づける。杯身はA類は第ⅢB様式に,B・C類は第ⅣA様式に位置づける。同じ第ⅣA様式でも、B類がC類より先行する形態であることは言えよう。

以上の所見から各窯跡の窯業年代は1号窯跡は第ⅣA様式,2号窯跡は第ⅣA様式,3号窯跡は第ⅢB様式に開窯し、第ⅣA様式に閉窯したものと考える。なお,1号窯跡と2号窯跡は同時期生産と思われる。

Ⅲ B期 杯蓋は口縁端部内面に段を有し、天井部と体部の境には鋭く沈線が入り古式の様相を呈する。口径は12.9cm~14.4cm、器高は4.2cmを測る。杯身は立ち上りが1.2cm~1.5cmと長く、内傾する。口径は10.5cm程のものと12cm~12.7cmのものとがある。器高は3.3cm~5.2cmを測る。坩は底部から体部への広範囲にヘラ削りを施している。

IVA期 杯蓋、杯身についての特徴は前述の如くである。

高杯は有蓋高杯と無蓋高杯とがみられる。有蓋高杯は口径15.1cmと大形品であり、脚部を欠損するが、脚部は208の長脚2段透し入りのものであろう。無蓋高杯は口径9cm~10.4cmで、底部と体部の境部に沈線が入るものと、沈線は入らないが、やや角張るものとがみられ、底部はともにカキ目調整している。脚部は短脚で裾の広がる形態である。脚柱中央部に沈線を配するものが多いが、沈線のないものもみられる。

坩は非常に短くてやや器壁の厚い頸がつく。頸部は直立もしくは内傾する。体部外面はカキ 目調整するものと、しないものとがみられる。

短頸壺は口径10.4cm, 胴部最大径20.6cmを測り, 下半部分を欠損するが, 脚台を有するものと思われる。

提瓶は口径部のみであり全体の器形を知り得ないが、口縁部に沈線を配する装飾的なものである。

平瓶は口径6.7cmであり口頸部を外反させ、端部を丸くつくる。胴部中ほどから口縁部近くまでカキ目調整しており、底部はヘラ削りし、平坦である。

壺は口頸部がやや短くて外反し、端部に沈線を配し、体部にカキ目を施すものと、口頸部はやや長くて直立気味のものとがある。また30の様に平坦な底部をもつものがみうけられる。

甕は長頸のものと否との2種類がみられる。長頸の甕は頸部に沈線を配し,櫛状器具使用に

よる刺突文とへラ描きの波状文を施すが、櫛描波状文は全くみられない。本窯跡の特色の1つである土師器の形態をした甕がいくつかみられる。形態は全く土師的であるが手法においては外面平行叩き、内面同心円叩きという須恵器特有の手法であり、本窯跡で焼成している。これは特殊品である。

漁具としての土錘と鮹壺と思われるものを生産している。

横瓶は1点みられるが全容は不明である。なお、腿は当該窯跡から1点の出土もない。

#### ヘラ記号について

へラ記号は1・3号窯跡出土品には見られないが、2号窯跡、灰原イ・ロ・ハ、柱穴群出土品に見られた。2号窯跡では1次床面出土の壺と甕の2個体に見られる。へラ記号は\\\・/の2種類である。灰原イでは提瓶・壺・甕の3個体に見られる。へラ記号は /・/// の2種類である。灰原口では提瓶1個、壺2個、甕4個体に見られる。へラ記号は /・/// へ2種類である。灰原ハでは甕4個体に見られる。へラ記号は /・/// へ2種類である。柱穴群からは横瓶、甕の2個体にみられる。へラ記号の種類は×の1種類である。

当該窯跡出土品に見られるへラ記号の種類は使用工具等により同一記号でも形の大・小、幅の広狭が見られるが形態上から大別すると /・//・///・\/\・\/\・\/\・ の6種類に分けられる。窯と対応する灰原をへラ記号の種類によりみると同一へラ記号の存在から2号窯と灰原口との相関関係が大である。なお、灰原ハ出土品中にも同一記号があるが、線刻のシャープさがないため、別物とした。

### b 1号塞出土須惠器

窯内 1 次床面からは蓋杯( $1 \sim 3 \cdot 12$ )無蓋高杯( $15 \sim 17$ ),夔( $20 \cdot 21 \cdot 24 \sim 26$ )が出土し, 2 次床面からは蓋杯( $4 \sim 6$ ),壺(19),甕( $27 \cdot 28$ )が, 3 次床面からは蓋杯( $7 \sim 11 \cdot 13$ ),甕(29)が,煙道寄りの埋土中からは平瓶(18),甕(22)が,窯内からは蓋杯(14),壺(30),甕(23)が出土した。

蓋杯 (1~14)

#### 杯蓋

#### Ba類(1)

口縁端部内面に若干の段を有し,天井部と体部の境に凹線が入る。口径は12cmである。 Bb類 (2・7)

口縁端部内面に若干の段を有するが,天井部と体部の境に沈線もしくは凹線を配さないもの。 口径は12cm前後。 Ca類(3~5)

口縁部は丸くつくられ,天井部と体部の境に沈線を配さないもの。口径は12cm以上である。

Cb類(6·8~11)

口縁部内面は丸くつくられており,天井部と体部の境に沈線を配さないもの。Ca類に比して小形品である。

#### 杯 身

B類 (12)

立ち上りは0.6cm~1cmほどで、直立もしくは内傾する。口径は11.5cm前後。

C類(13·14)

立ち上りは0.5cm~0.8cmと短く, 直立もしくは内傾する。口径は9.5cm~12cm。

高杯(15~17)

杯底部と体部の境はやや丸味を有するものでこの部分にカキ目を施すものもある。短脚の無 蓋高杯である。

平瓶(18)

当該窯跡群のうち唯一の出土品である。下半部はヘラ削りし、上半部は頸部までカキ目を施 している。

壺(19・30)

19は口頸部のみであるが頸基部がやや幅広となり、器壁もうすいので壺と考えた。30は短い細頸のつく壺であろう。

甕(20~29)

小形甕(20・21・23),中形甕(24),大形甕(25~27)の3種類がある。頸部外面は沈線を施し、刺突文もしくは波状文を描いている。1次床面出土土器は波状文,2次床面出土土器は刺突文と波状文が入り,3次床面は波状文のみである。時間的な差と考えられるかについては疑わしい。22は土師的な形態であり、異質である。

#### c. 2号窯出土須恵器

窯内1次床面からは蓋杯(31~33), 坩蓋(34), 壺(36·37), 甕(38~42)が出土し, 2次床面からは蓋杯(35), 壺(43), 甕(44)が出土した。

蓋杯

#### 杯蓋

Ba類 (31)

口縁端部内面に若干の段を有し、天井部と体部の境に沈線もしくは凹線を配すもの。口径は 11cmと小さい。 Bb類(35)

口縁端部内面に若干の段を有し、天井部と体部の境は丸味をもつ。口径は12cmである。

#### 杯 身

C類(32·33)

立ち上がりは0.6cmと短く、内傾もしくは直立する。口径は9.5cm~10cmである。

坩蓋(34)

天井部と体部の境はわずかに凹む。天井部外面は手持ちへラ削りを施す。B 類に属する。

壺 (36·37·43)

3個体とも器形の異なるものである。36は短く外反する口頸部を有し、43と37は大きさの異なった直立気味の口頸部を有するものである。

甕 (38~42・44)

口頸部の長い大形甕 (41・42) とそうでないものとがあり、口縁端が丸味をもつ もの (39) とそうでないものとがある。

### d. 3号窯出土須恵器

窯内1次床面からは蓋杯(45~47),提紙(48),土錘(49),甕(50)が出土し,3次床面からは蓋杯(51·52),脚台付壺(53·54),脚台部分(55,56),甕(57)が出土し、窯内から甕(58)が出土した。

蓋杯 (45~47・51・52)

## 杯蓋

Ba類 (45·51)

口縁端部内面に若干の段を有し、天井部と体部の境に凹線が入る。口径13.9cm。

Cb類 (46·47·52)

口縁端部は丸くつくられ、天井部と体部の境が丸味をもつもの。口径は10cm~11cmと小形である。

提瓶 (48)

口頸部のみであるため詳しくはわからない。

脚台付壺(53~56)

やや扁球形をした胴部をもち、外面の全面にカキ目を施す。55・56も脚台付壺の脚部になる ものと思われる。

甕 (50・57・58)

50は長頸の甕であり、口頸部の外反度が強い。57・58は土師器的な形態である。

# e. 灰原イ出土須恵器

下層と上層に 2 大別される。下層からは蓋杯 (59~71), 坩蓋 (74), 高杯 (72·73), 提 瓶 (75), 壺 (76·77·85·86), 甕 (89, 91·92)が出土し,上層からは蓋杯 (78~84),壺 (88~93), 甕 (87·90·96·97), 館 (94·95)が出土している。

蓋杯(59~71·78~84)

#### 杯蓋

Ba類 (59~62·78·79)

口縁端部内面に若干の段を有し、天井部と体部の境に沈線もしくは凹線を配する。口径については小片からの復原もあるためやや正確さに欠くものもあるが、10.6cm~13cmである。

Ca類 (63~65·80)

口縁部は丸くつくられ、天井部と体部の境に沈線を配さないもの。口径は12cm~13cm。天井部外面はヘラ削りと手持ちヘラ削りがある。

Cb類(66·81)

Ca類に比して小形のもの。

杯身(67~71・83・84)

B類 (67・68・83)

立ち上がりは0.7cm~1 cmで内傾もしくは直立する。口径は11.2cm~11.9cm。底部外面はへ ラ削りを施す。

C類(69~71·84)

立ち上りは0.5cm~0.9cmと短く,内傾もしくは直立する。口径はB類に比して小形なもので9.5cm~10.8cm。

D類(82)

蓋受けのかえりをもたないものであり、口径に比して体部は深い。口径9.8cm、器高4.5cm。 底部外面はヘラ削りを施す。

坩蓋 (74)

つまみのつく蓋であり、天井部と体部の境は丸味をもつ。

高杯(72・73)

短い脚のつく無蓋高杯である。杯部の底部と体部の境には1条の沈線を配し、以下の部分に カキ目を施す。

提瓶 (75)

口頸部のみであるため全容は不明である。

壺 (76・77・85・86・88・93)

76・77はほぼ似通った形態のものであり、85・86・88は口縁端部が丸い。93は把手付の壺である。形態は土師器的であるが、須恵器手法の同心円叩きと平行叩きを内外面に施す。

甕 (87・89~92・96・97)

87は土師器的形態を呈する。96・97は形態は土師器的であるが、須恵器の手法である同心円叩きが外面に入る。なお、外面に黒斑がみられる。91・92は同じ形態の口頸部をもつ。

館 (94·95)

胴部内面は平行叩きをカキ目調整し、内面は弧状・同心円叩き上をナデている。

# f. 灰原口出土須恵器

下層と上層に大別される。下層からは蓋杯 (98~131), 無蓋高杯 (150·152), 坩 (153), 壺 (157·158), 甕 (161~169·173·175)が出土し,上層からは蓋杯 (132~147), 有蓋高杯 (148·149), 無蓋高杯 (151),坩 (154·155),提紙 (156),壺 (159·160)甕 (170~172·174),蝕 (176·177)が出土した。

蓋杯 (98~147)

### 杯蓋

Ba類 (98·132~135)

口縁端部内面に段を有し,天井部と体部の境に沈線を配する。天井部外面はヘラ削りを施す。 口径は12cm~13cmと比較的大形である。

Bb類 (99~101, 136~138)

口縁端部内面に段を有し、天井部と体部の境に沈線を施さない。天井部外面はヘラ削りを施す。口径は11.5cm~12.0cm、器高は2.7cm~4 cm。

Ca類 (102~105, 139)

口縁端部は丸くつくられ、天井部と体部の境は丸味を有する。天井部外面はヘラ削り、手持ちヘラ削り、ナデの3種類がみられる。口径は11.6cm~13.5cm。

# 杯身

A類(108)

立ち上りは1.2cmとやや長く、基部は内傾するが中ほどから立つ。小片からの復原であるため 正確さを欠くが、口径は10.3cmと小さい。

B類 (109~124·129·141~147)

立ち上りは $0.6cm \sim 1.0cm$ と短く、内傾もしくは直立する。口径は $9.5cm \sim 11.0cm$ である。 底部外面はへラ削り、手持ちへラ削りを施す。 C類(125~128·130~131)

立ち上りは0.6cm以下で短く、丸味をもつ。口径はB類よりも小形である。

蓋(107·140)

蓋内面に身受けのかえりを有するもので、かえりは1cmで、内傾する。107は天井部外面を手持ちへラ削りする。140は調整法不明、杯とは異なるものの蓋と思われる。

有蓋高杯(148~149)

148は蓋である。149は復原径のためかやや大形品となっている。立ち上りは1.1cmであり直立する。長脚で2段透しの入るものと思われる。

無蓋高杯(150~152)

短脚の高杯であり、脚中央部に沈線を配する。

坩 (153~155)

153は外反する口頸部を有し、 通有の坩とは異なる。底部外面は手持ちへラ削りを施す。154の頸部はきわめて短く、胴部外面にカキ目を施す。155の頸部は153に似た形態であり、直口壺とよぶべきかもしれない。底部外面は手持ちへラ削りである。

壺(157~160)

口縁部に沈線を配している。いづれも口頸部のみであり全容は知り得ない。

甕(161~174)

長頸の甕(169・170)とそうでないものとがある。171~174は土師的な形態を呈する。

館(176・177)

口縁部は若干折りまげた形態のもの(176)と、斜めの平担面を有するもの(177)とがある。 176の把手がつく。外面は平行叩き上を横ナデ、内面はヘラ削りを施している。

# g. 灰原ハ出土須恵器

灰原上面はカットされているためいづれも下層出土品とする。蓋杯 (180~203),高杯 (204~206・208・212), 脚台付壺 (207), 坩 (209), 壺 (210), 提瓶 (213・214), 甕 (215~225・229~239), 土錘 (227・228) が出土した。

蓋杯(180~203)

#### 杯蓋

A類(180)

口縁端部内面は段をなし、天井部と体部の境は若干角張る。口径は14.4cmと大形品である。 Ba類(181・182)

口縁端部内面は若干の段を有し、天井部と体部の境には凹線が入る。口径は11.8cm。天井部

外面はヘラ削りを施す。

Bb類(183~185)

口縁端部内面は沈線が入り段をなす。天井部と体部の境は丸味をもつ。天井部外面はヘラ削りを施している。口径は10.8cm~11.8cm。

Ca類(186~189)

口縁端部は丸くつくられている。口径は11.6cm~12.4cmである。天井部外面はヘラ削り、手持ちヘラ削り、ナデ調整である。

Cb類(190~191)

Ca類に比して小形品である。

### 杯身

A類(192~194)

立ち上りは1.3cm~1.5cmと長く,直線的に内傾するものと,基部は内傾するが中ほどから直立するものがある。口径は12cm~12.7cm、器高は3.3cm~5.2cm。底部外面はヘラ削りを施す。

B類(195~199·202·203)

立ち上りは0.7cm~1cmで内傾もしくは直立する。口径は10.5cm~12.1cm。底部外面はヘラ削り、手持ちヘラ削りを施す。

C類(200·201)

B類より小形品であり、立ち上りは $0.5cm\sim0.7cm$ と短く、内傾する。底部内面はへラ削りを施す。

高杯(204~206·208·212)

無蓋高杯であり、底部と体部の境はやや角張る。底部にはカキ目を施す。脚は短脚(53)と 長脚2段透し入り(208)とがある。212は土師器高杯であり、脚柱外面はヘラ削りを施す。

脚台付壺(207)

胴部外面はカキ目調整する。211の脚は高杯のそれとは異っており207の脚となる可能性がある。

坩(209)

やや器壁の厚いつくりであり,底部外面はヘラ削りを施す。

壺(210)

短頸壺である。胴部外面は沈線とカキ目調整を施す。

提紙 (213・214)

口縁部に1条の沈線を配する。

甕(199~225・229~239)

215~220は口径の小さい甕であるが、このうち216~219は土師器的な形態である。これらよ

り若干大きいが236~239の甕も土師器的である。特に239は土師器かとみまがう土器であるが通有の土師器の甕にみられない外面へラ磨きが見られる。231と235は長頸の甕である。中形甕の口縁部は224・229・230のタイプがある。

把手 (226)

須恵器であるが土師器甕につく把手とよく似た形態である。

土錘 (227·228)

いづれも若干部分を折損している。3号窯跡出土品(49)よりも小形で、細身である。

## h. 灰原二出土須恵器

他の灰原に比して遺物の出土は少い。230~242はいづれも蓋杯である。

#### 杯蓋

Ca類(240)

口縁端部は丸くつくられ, 天井部と体部の境は丸味を持つ。口径11.8cm。

#### 杯身

B類(241·242)

立ち上りは1cm~1.2cmで内傾する。口径は9.4cm~10.8cmである。

## i. 柱穴群出土須恵器

蓋杯 (243~246), 高杯 (247・248), 横瓶 (250), 壺 (249・251・261), 甕 (252~が出土 した。

蓋杯

### 杯蓋

A類 (243)

口縁端部内面に段がつき、天井部と体部の境は鋭い沈線が入り、やや角張る。天井部外面は ヘラ削りを施す。口径12.9cm、器高4.2cm。

Bb類 (244)

口縁端部内面は平担面を有する。

D類(245·246)

高台のつくもの(246)と高台のつかないものとがある。

高杯(247・248)

杯部底面はカキ目調整し、刺突文を施す。脚部は中ほどに沈線が入る短脚である。

横瓶(250)

口縁部に沈線を配する。

壺(249・251・261)

249の底部は器壁が厚く、丸味をもつ。251はゆるやかに外反する口頸部を有する。端部は平 坦である。261は30と同じ形態と思われる。

甕 (252~260)

長頸の甕 (256~260) とそうでないものとがある。長頸甕の口頸部は刺突文を施すものと波 状文を施すものとがあり、波状文の方が多い。

# i. 注記不明須惠器

整理作業の途中で出土位置不明品が出たため、注記不明としてとりあげた。蓋杯(262~264) 高杯(265), 平瓶(266, 267), 甕(268)がある。

蓋杯

#### 杯蓋

Ca類(262)

口縁端部内面は丸くつくられる。天井部外面は手持ちへラ削りを施す。口径12.9cm, 器高3.2cmと口径に比して器高が低い。

Cb類 (263)

Ca類に比して小形品である。

### 杯身

C類(264)

立ち上りは0.6cmと低い。底部外面は手持ちへラ削りである。

高杯(54)

脚裾をわずかに屈曲させる。脚部中ほどに沈線を施す。

平瓶 (266・267)

現存する頸基部の形態から平瓶と判断した。267は頸部に接合痕を残す。

甕(268)

土師器的な形態の須恵器である。

# k. 表採須恵器

蓋杯 (269~272), 坩(273), 甕(274~279)である。

### 蓋杯

# 杯身

A類(269)

立ち上りは1.3cmで若干内傾する。端部は丸くつくられている。小片のためか須原口径がやや小さい。

B類 (270·271)

立ち上りは0.8cm~0.9cmで、やや内傾する。

底部外面はヘラ削りとナデ調整である。

C類 (272)

立ち上りは0.5cmと短く, 直立する。底部外面はヘラ削りを施す。

### 坩

口頸部は若干内傾し、丸い。底部外面広範囲にヘラ削りを施す。

#### 罋

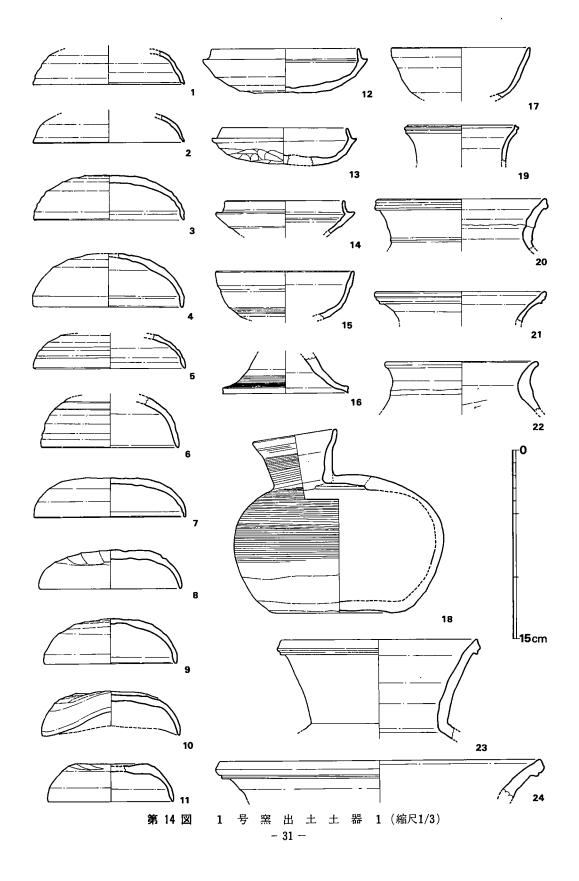
大・中・小の3種類がある。279は長頸の甕であり、頸部に刺突文が入る。

## 土器観察表

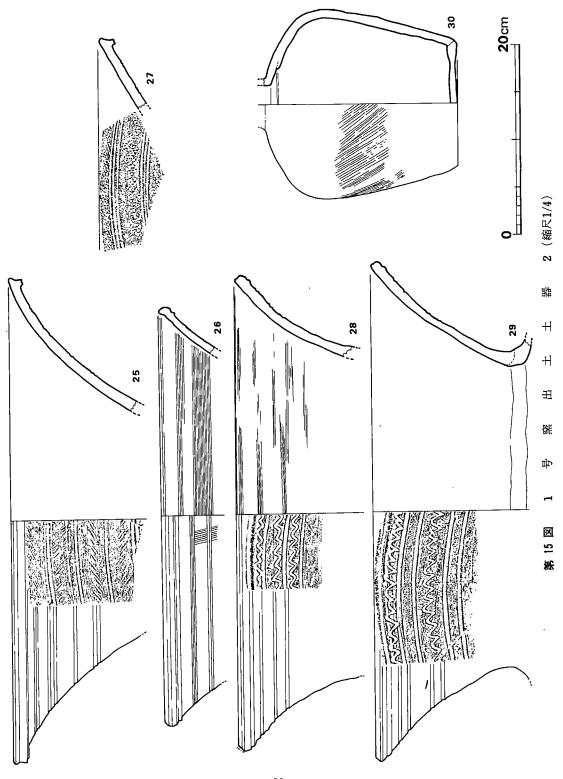
番号	出土遺構	器 種	"時期	法 量	特 徴	備	考
1	1 号 窯	須 恵 器 杯 蓋	В	口径 12.0cm	口縁端部内面はわずかに段がつく。外面 の天井部と体部の境は若干くぼむ。器表は 剝落しているため調整法は不明である。胎 土には細砂粒を多く含む。焼成は良好であ り,色調は暗灰色を呈する。		
2	1 号 窯 1 次床面	須恵器	В	口径 11.9㎝	口縁端部内面はわずかに段がつく。残存部分は内外面とも横ナデ調整である。胎土には大粒の砂粒を若干含む。焼成は良好であり、色調は暗小豆色を呈する。		
3	1 号窯	須恵器 杯 蓋	С	口径 11.9cm 器高 3.5cm	体部外側は傾り / による凹凹が有しい。人		
4	1 号 窯 2 次床面		С	口径 11.9cm 器高 4.2cm	V. る。大井部7F国は頂部行近V/み、7月17		

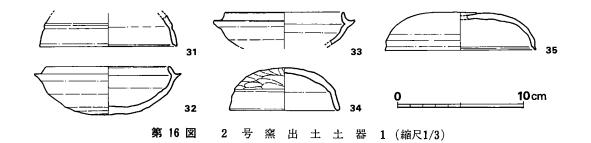
番号	出土遺構	器 種	時 期	法 量	特 徴	備	考
5	1 号 窯 2 次床面		С	口径 12.0cm	口縁部と体部の境は内外面とも若干くぼむ。口縁端部は丸くつくられている。天井部外面はヘラ削りを施し、内面はナデ調整。 口縁部は内外とも横ナデ。胎土には細砂粒が多い。焼成良好であり、色調は暗灰色。		
6	1 号 窯 2次床面		С	口径 10.8cm.	口縁部と体部の境は凹弯し、端部は丸くつくられる。器表の剝落により調整法は不明である。胎土には砂粒を多量に含む。焼成は良好であり、色調は暗小豆色を呈する。		
7	1 号 窯 3 次床面		В	口径 11.9cm 器高 3.1cm	口縁部内面は沈線が入り段を有する。天 井部はヘラ削りを施しており、平坦面をな す。内面はナデを、以外の部分は横ナデ調 整。胎土には細砂粒を含む。焼成は良好で あり、色調は暗小豆色を呈する。		
8	1 号 窯 3次床面		В	口径 11.2cm 器高 3.1cm	口縁端部は丸くつくられている。天井部と体部の境は凹弯する。天井部外面は手持へラ削りを施し、内面はナデ調整し、以外は横ナデを施す。胎土には細砂粒を含む。 焼成は良好であり、色調は暗灰色を呈す。		
9	1 号 窯 3 次床面		В	口径 10.4cm 器高 3.6cm	口縁部は直立し、端部は丸くつくられている。天井部外面はヘラ削りを施し、内面はナデ、以外の部分は横ナデ調整を施す。胎土には細砂粒を含む。焼成は良好であり、色調は暗灰色を呈する。		
10	1 号 窯 3 次床面		В	口径 10.9cm 器高 3.5cm	焼成時の焼きひずみが著しい。口縁端部は丸くつくられている。天井部外面は手持ちへラ削りし,内面はナデを施す。以外の部分は横ナデ調整を施す。胎土に砂粒を含む。焼成は良好であり,色調は暗灰色。		
11	1 号 窯 3 次床面	須恵器 然 蓋	В	口径 9.9cm 器高 3.0cm	口縁端部は丸くつくられている。天井部 外面は手持ちヘラ削りを施し,平坦である。 体部,口縁部は横ナデ調整を施す。胎土に は細砂粒を含む。焼成は良好であり,色調 は暗灰色を呈す。		
12	1 号 窯 1 次床面	須恵器杯 身	В	口径 ,11.6cm 蓋受け部径 13.0cm 立上り高 0.8cm 器高 3.5cm	立ち上りは短く、直立ぎみに立つ。底部はヘラ削りを施し、以外の部分は横ナデ調整である。胎土には細砂粒を含む。焼成は良好であり、色調は灰色を呈する。.		
13	1 号 窯 3次床面	須 憓 器杯 身	С	口径 10.0cm 蓋受け部径 11.5cm 立上り高 0.8cm 器高 2.9cm	立ち上りは短く、内傾する。底部から体部にかけての広範囲に手持ちへラ削りを施し、以外の部分は横ナデ調整を施す。胎土には細砂粒を含む。焼成は良好であり、色調は灰色を呈する。		
14	1 号 窯	須恵器 杯 身	С	口径 9.5cm 蓋受け部径 11.0cm 立上り高 0.9cm	立ち上りは短く、直立する。端部は丸く つくられている。残存部分は横ナデ調整で ある。胎土は精選されている。焼成は良好 であり、色調は暗小豆色を呈する。		

番号	出土遺構	器 種	時期	法	量	特	徴	備	考
15	1 号 窯 1 次床面		B , C	口径 10.		口縁部と体部の境は凹線 底部周辺はカキ目調整を施 の部分は横ナデ調整である 粒を多量に含む。焼成は良 は灰黒色を呈する。	しており,以外 。胎土には細砂		
16	1 号 窯 1 次床面	l ,	B , C	口径 底径 10.	.Ocm	脚裾側部は平坦面を有す のみカキ目調整を施す。胎 ずかに含む。焼成は良好で 色を呈する。	土に細砂粒をわ		
17	1 号 窯 1 次床面		B s C	口径 10.	1	器表は剝落により調整法 胎土は細砂粒を多量に含む く, 色調は明灰色を呈する	。焼成はやや甘		
18	1 号 窯 煙道寄り の埋土中	須恵器 平 瓶	B ( C	最大部径16. 器高 14.	.5cm	口縁部はわずかに外弯す部にかけての広範囲にヘラらにナデている。体部上半調整を施す。胎土に細砂粒成は良好であり, 色調は灰	削りを施し, さ 部以上にカキ目 を多く含む。焼		
19	1号窯2次床面	須恵器	B , C	口径 8.		口縁部上面と側面に沈線 添えている。横ナデ調整て 砂粒を多量に含む。焼成は 調は灰黒色を呈する。	ある。胎土に細		
20	1 号 窯	須 恵 器	B s C	口径 13.		口縁部に粘土を貼付して 部を若干くぼませる。胎土 に含む。焼成は良好であり を呈する。	に細砂粒を多量		
21	1 号 窯 1 次床面	須恵器 変	B s C	口径 13.		口縁部側面に目の細い洗口頸部内外面とも横ナデ調に細砂粒を多量に含む。焼 色調は灰黒色を呈する。	整を施す。胎土		
22	1 号 窯 煙道寄り の埋土中	須 恵 器		口径 12.		口頸部は短く外反し, 野 ている。口頸部内外面は權 内面の頸基部はへラ削りを 母, 砂粒を含む。焼成は良 は淡黄色を呈する。	けデ調整を施し ・施す。胎土に雲	土師	器的態
23	1 号窯	須 恵 器	B s C	口径 15.		口頸部は長く, ほぼ直線 口縁部は肥厚させており, がつく。内外面とも横ナデ 土には細砂粒を多量に含む あり, 色調は暗灰色を呈す	下面に三角突帯 『調整である。胎 r。焼成は良好で		
24	1 号 窯	須恵器	B S C	口径 25		口縁部付近を残すのみて 肥厚させており、側面に 1 る。横ナデ調整を施す。胎 量に含む。焼成は良好であ 色を呈する。	条の沈線を配す i土に細砂粒を多		

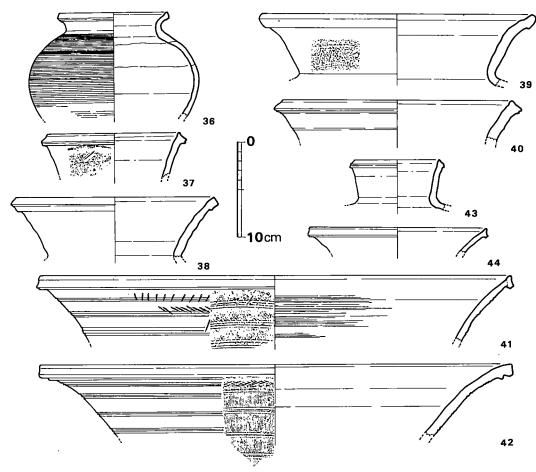


番号	出土遺構	器種	時 期	法 量	特 徵	備考
25	1 号 窯 1 次床面	須 恵 器	B s C	口径 50.8cm	長頸の甕であり、口頸部のみを残存する。 頸部中ほどから口縁部の間に4ヶ所沈線を 配して4区にわけ、この部分に刺突文を入 れる。胎土に細砂粒を多量に含む。焼成は 良好であり、色調は灰色を呈する。	
26	1 号 窯	須 恵 器	B ( C	口径 43.0cm	長頸の甕であり、口頸部の一部を残存する。口縁部内面は段を有し、下面に三角突帯が入る。2条の沈線を2ヵ所に配し、頸部内面はカキ目を施す。胎土は砂粒多し。 焼成は良好であり、色調は小豆色。	
27	1 号 窯 2 次床面	須恵器	B \$ C		長頸の甕であり、小片のため口径は不明である。口縁部は長方形状を呈し、下面を若干くぼませる。2ヵ所に沈線を配し、この間に刺突文を入れる。胎土に細砂粒を多く含む。焼成良好であり、色調は暗灰色。	
28	1 号 窯 2次床面	須 恵 器	B s C	口径 49cm	長頸の甕である。頸部外面の上方部に 3 ヵ所沈線を配し、この間にヘラ状器具による波状文が入る。内外面ともカキ目調整上をナデている。胎土に細砂粒を多く含む。	
29	1 号 窯 3 次床面	須恵器	B , C	口径 51.8cm	長頸の甕の口頸部であり、著しく外反する。頸部上半部の4ヵ所に沈線を配し、2ヵ所にへラ状器具による波状文が入る。胎土に細砂粒を多量に含む。焼成は良好であり、色調は暗灰色を呈する。	
30	1 号窯	須恵器	B s C	最大部径19.8cm 底径 12.7cm	肩部は角張らずに体部へ移行する。体部 外面はカキ目上をナデており、肩部と内面 は横ナデ調整である。胎土は細砂粒を多量 に含む。焼成は良好であり、色調は灰黒色 を呈する。	
31	2 号 窯 1 次床面	須 恵 器 杯 蓋	В	口径 10.8cm	口縁端部内面はわずかに段がつく。天井 部と体部の境は沈線が入り、段を有する。 横ナデ調整を施している。胎土には細砂粒 を多く含む。焼成は良好であり、色調は小 豆色を呈する。	
32	2 号 窯 1 次床面	須 恵 器 杯 身	С	口径 9.7cm 蓋受け部径 11.6cm 立上り高 0.6cm 器高 3.8cm	立ち上りは短く、内傾する。底部外面は ヘラ削りを施しており、この部分の内面は ナデを、以外の部分は横ナデを施す。胎土 には細砂粒を多く含んでいる。焼成は良好 であり、色調は暗灰色を呈する。	
33	2 号 窯 1 次床面	須 恵 器 杯 身	С	口径 9.4cm 蓋受け部径 11.3cm 立上り高 0.6cm	立ち上りは短く,外弯気味に立つ。底部 外面はヘラ削りを施し,以外は横ナデ調整 である。胎土には細砂粒を多く含む。焼成 は良好であり,色調は暗小豆色を呈する。	
34	2 号 窯 1次床面	須恵器 坩 蓋	В	口径 8.7cm 器高 3.4cm	天井部と体部の境はやや角張るが、口縁端部は丸味を有する。天井部外面の広範囲に手持ちへラ削りを施す。以外の部分は横ナデ調整である。胎土には細砂粒を多く含む。焼成は良好であり、色調は灰黒色。	





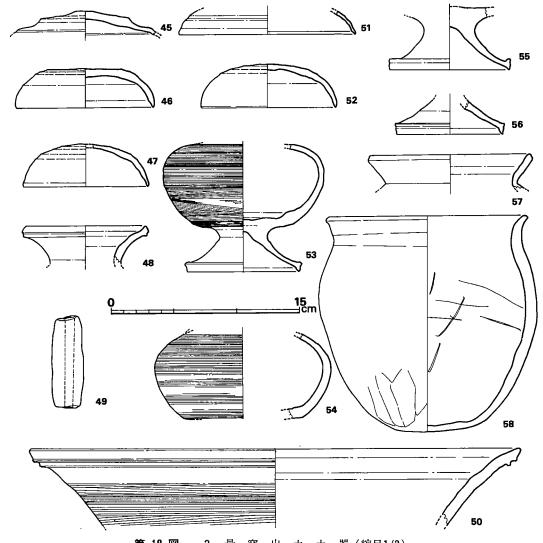
番号	出土遺構	器種	時期	法 量	特	備考
35	2 号 窯 2 次床面	須恵器   系   蓋	В	口径 11.9cm 器高· 3.0cm	口縁端部内面は段を有し、端部は外反する。天井部外面の調整法は不明であり、内面はナデ、以外は横ナデ調整を施す。胎土には細砂粒を多く含む。焼成は良好であり、色調は灰黒色を呈する。	
36	2 号 窯 1 次床面	須 恵 器	B ( C	口径 11.4cm 最大部径18.0cm	囲にガイ日調盤を施し、内囲は傾けて調整	
37	2 号 窯 1 次床面	須恵器	B C	口径 14.0cm	口縁部を肥厚させ、側面の平坦部に1条 の沈線を配する。口頸部は内外面とも横ナ デ調整を施す。頸部外面にへラ記号を有す る。胎土には細砂粒を多量に含む。焼成は 良好であり、色調は暗小豆色を呈する。	頸部外面 にヘラ記 号あり
38	2 号 窯 1 次床面	須恵器 饗	B S C	口径 21.1cm	口縁部を肥厚させており、断面形は方形 状を呈する。内外面とも横ナデ調整であり、 外面は凹凸を生じる。胎土には細砂粒を多 量に含んでいる。焼成は良好であり、色調 は灰黒色を呈する。	
39	2 号 窯	須恵器	B S C	口径 28.4cm	頸部上半部の外反度は著しい。口唇部は 肥厚させており丸味を有する。内外面とも 自然釉の付着が著しいため調整法は不明で ある。胎土には細砂粒を多量に含んでいる。 焼成は良好であり、色調は小豆色。	頸部外面 にヘラ記 号あり
40	2 号 窯 1 次床面	須 恵 器変	B s C	口径 24.0cm	口頸部の若干を残存するのみである。口 縁部下面は外方へ突き出しており、1条の 沈線が入る。自然釉の付着が著しいため調 整法は不明である。胎土には細砂粒を多く 含む。焼成良好で、色調は小豆色を呈す。	
41	2 号 窯	須恵器	B s C	口径 49.6cm	長頸の甕である。口縁部は粘土を貼付して肥厚させており、口縁部下面に沈線を配す。頸部の3ヵ所に2条の沈線が入り、これを境として3ヵ所に刺突文が入る。胎土に砂粒を含み、焼成良好。暗灰色を呈す。	



第 17 図 2 号 窯 出 土 土 器 2 (縮尺1/4)

番号	出土遺構	器 種	時 期	法	量	特	徴	備	考
42	2 号 窯 1 次床面	須恵器	B s C	口径	49.7cm	長頸の甕である。口 入る。頸部の4ヵ所に 縦方向に目の細かいカ は細砂粒を多く含む。 色調は暗灰色を呈する	キ目が入る。胎土に 焼成は良好であり,		
43	2 号窯 2次床面	須恵器	B , C	口径	8.8cm	口縁部側面に1条の 部内外面とも横ナデ講 細砂粒を多量に含む。 色調は暗灰色を呈する	焼成は良好であり,		
44	2 号 窯 2 次床面	須恵器	B (C	口径	18.5cm	頸部の外反度が著し 突き出した様な形態で ぼませる。胎土には細 いる。焼成は良好であ する。	砂粒を多量に含んで		

番号	出土遺構	器	種	時	期	法	量	特 徴	備	考
45	3 号 窯 1 次床面	須恵杯	系 器 蓋	В				口縁部を欠損している。天井部外面はへ ラ削りを施し、内面はナデ、以外は横ナデ 調整を施す。胎土には細砂粒を多量に含ん でいる。焼成は良好であり、色調は灰黒色 を呈する。		
46	3 号 窯 1 次床面		· 器	С		口径器高	10.8cm 3.1cm	口縁端部内面は、わずかにくぼませている。口縁部から体部への移行はなめらかで 丸味をもつ。天井部外面はヘラ削りを施し ており平坦である。胎土には細砂粒を多く 含む。焼成は良好であり、色調は暗灰色。		
47	3 号 窯 1 次床面	須恵杯	器蓋	С		口径器高	9.9cm 3.4cm	口縁端部内面は段をなさず,また口縁部は器壁がうすい。天井部外面はやや広範囲にへラ削りを施し,内面はナデを,以外は横ナデ調整である。胎土には細砂粒を多く含む。焼成は良好であり,色調は暗灰色。		
48	3 号 窯 1 次床面	須恵	器瓶	B S C		口径	9.5cm	口縁端部の側面に1条の沈線を配する。 口縁部は内外面とも横ナデ調整を施してい る。胎土には細砂粒を多く含んでいる。焼 成は良好であり,色調は青灰色を呈する。		
49	3 号 窯 1 次床面	須 恵土	器錘	B (C		直径 長さ 孔径	2.5cm 7.2cm 0.6cm	孔は焼成前に片側からのみ穿たれている。 全面ナデ調整である。胎土には細砂粒を若 干含む。焼成は良好であり、色調は光は灰 色を、%は小豆色を呈する。		
50	3 号 窯 1次床面	須惠		B s C		孔径	38.2cm	長頸の婆である。口縁部を若干肥厚させ下方には1条の突帯を配する。頸部外面はカキ目調整し、内面はナデを施す。胎土には細・小砂粒を多量に含む。焼成は良好であり、色調は灰色を呈する。		
51	3 号 窯 3 次床面		び 器 蓋	В		口径	13.9cm	天井部を欠損している。口縁端部内面は わずかに段をなす。横ナデ調整である。胎 土には細砂粒をわずかに含む。焼成は良好 であり、色調は灰黒色を呈する。		
52	3 号 窯 3次床面	須恵杯	器蓋	С		口径器高	10.7cm 3.4cm	口縁端部は丸くつくられ、体部への移行もなめらかで丸味をもつ。天井部外面はへ ラ削りし、以外は横ナデ調整である。胎土には細砂粒を多く含む。焼成は良好であり、色調は小豆色を呈する。		
53	3 号 窯 3 次床面	須 恵脚台位		B (C		最大径 脚裾径	12.7cm 8.8cm	口頸部を欠損する。胴部外部にカキ目調整を施し,以外の部分は横ナデ調整である。 脚裾先端部は尖らせている。胎土には細・ 小砂粒を含む。焼成は良好であり,色調は 外面灰色,内面小豆色である。		
54	3 号 窯 3次床面	須 恵 脚台伯		B \		最大径	14.0cm	脚台付壺の胴部である。胴部外面の全面 にカキ目調整を施し、下半部は若干ナデて いる。内面は横ナデ調整である。胎土には 細砂粒を多く含む。焼成は良好であり、色 調は灰色ないし小豆色を呈する。	•	



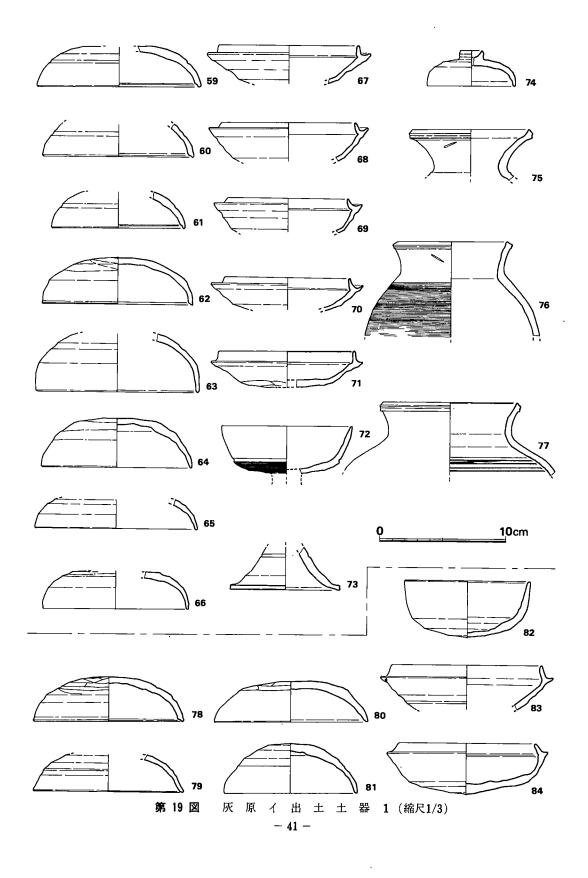
第 18 図 号 窯 出 土 土 器 (縮尺1/3)

番号	出土遺構	器 種	時期	法	量	特	徴	備	考
55	3 号 窯 3 次床面	須恵器脚 台	B C	脚裾径	9.4cm	部は上下方向に若干領機力で調整である。	分と思われる。脚裾端 突き出す。内外面とも 胎土には細砂粒を多く 良好であり,色調は灰		
56	3 号窯 3 次床面	須恵器脚 台	B C	脚裾径	8.4cm	部下面は尖らせている	可能性がある。脚裾端 る。様ナデ調整を施し 砂粒を多く含んでいる。 色調は灰色を呈する。		

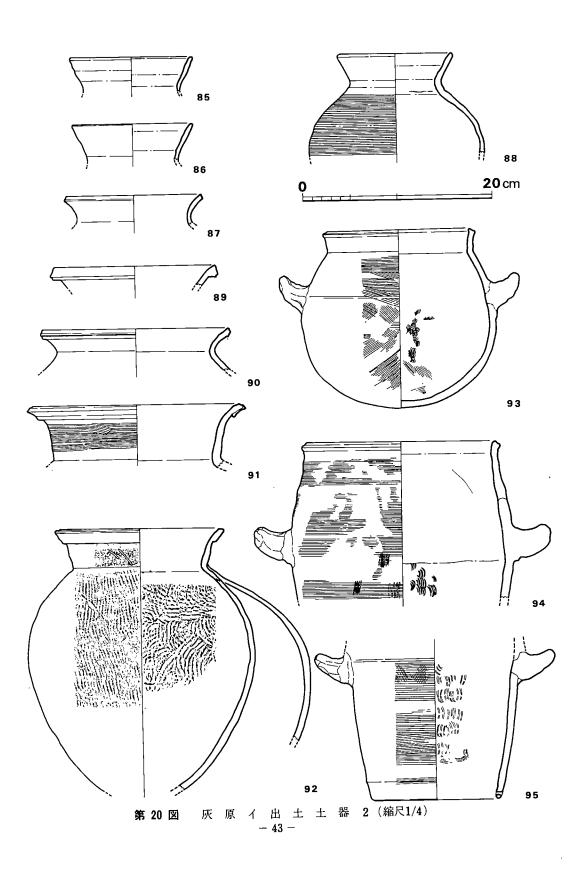
番号	出土遺構	器 種	時 期	法	量	特	徴	備	考
57	3 号 窯 3 次床面	須恵器		口径	12.5cm	口頸部を残存するのを をわずかにくぼませてい 施す。頸部外面にへラ言 には細砂粒を多く含む。 色調は淡褐灰色を呈する	いる。横ナデ調整を 己号を有する。胎土 焼成は良好であり,	器形土師	
58	3 号窯	土師器		口径 最大径 器高	15.6cm 17.2cm	口頸部は短く外弯させ 径は中位以上にある。服 持ちへラ削りを施してま を施す。胎土には細砂米 成は良好であり、色調に	同部外面下半部は手 らり、内面は刷毛目 立を多量に含む。焼	器形土師	
59	灰 原 イ 下 層	須 恵 器 杯 蓋	В	口径 器高	12.9cm 3.2cm	口緑端部内面は段を有と体部の境には沈線がプ ちへラ削りを施し、以外 る。胎土には細砂粒を含 あり、色調は灰黒色を与	くる。天井部は手持 トは横ナデ調整であ 含む。焼成は良好で		
60	灰 原 イ 下 層	須恵器   杯   蓋	В	口径	11.9cm	口縁端部内面は段をす と体部の境は若干くぼむ している。胎土には細硬 焼成は良好であり,色調に	」。横ナデ調整を施 少粒を含んでいる。		
61	灰 原 イ 下 層	須恵器 茶	В	口径	10.5cm	口縁端部内面はわずた部と体部の間は凹弯するしている。胎土には細でる。焼成は良好であり,する。	る。横ナデ調整を施 少粒を多く含んでい		
62	灰 原 イ 下 層	須恵器 杯 蓋	В	口径器高	12.0cm 3.6cm	口縁端部内面は斜めの 井部と体部の境はわずか 部外面は広範囲に手持ちいる。胎土には細砂粒を やや甘く、色調は小豆包	たに凹弯する。天井 ちへラ削りを施して と多く含む。焼成は		
63	灰 原 イ 下 層	須 恵 器	С	口径	12.8cm	口縁端部は丸くつくら への移行はなめらかです 外面はヘラ削りをし、ら ある。胎土には細砂粒を は良好であり、色調は青	L味をもつ。天井部 L外は横ナデ調整で と多量に含む。焼成		
64	灰 原 イ	須恵器 茶 蓋	С	口径器高	11.9cm	口縁端部は丸くつくら 自然柚の付着が著しいた ある。胎土には細砂粒を 焼成は良好であり,色調	こめ調整法は不明で 2多量に含んでいる。		
65	灰 原 イ 下 層	須 恵 器 杯 蓋	С	口径	12.8cm	口縁端部は丸くつくら 外面はヘラ削りを施して デ調整である。胎土には 焼成は良好であり、色調	「おり,以外は横ナー 細砂粒を多く含む。		
66	灰 原 イ 下   層	須恵器杯 蓋	С	口径器高	11.5cm 3.0cm	口緑端部は丸くつくら 外面はナデ調整のみであ さない。以外は横ナデ訓 は細砂粒を多く含む。 毎調は灰黒色を呈する。	り, ヘラ削りを施 関整を施す。胎土に		

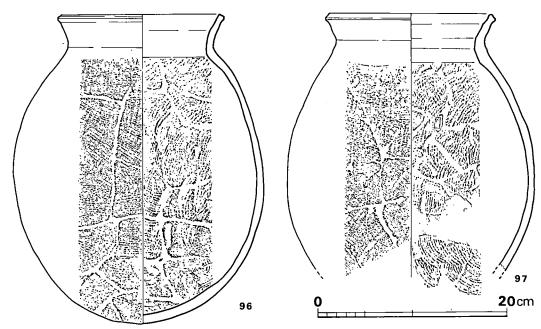
番号	出土遺構	器 種	時 期	法量		備考
67	灰 原 イ 下 層	須 恵 器杯 身	В	口径 11.0cm 蓋受け部径 13.0cm 立上り高 0.7cm	立ち上りは短く、直立する。底部外面は へラ削りを施している。胎土には細砂粒を 多量に含んでいる。焼成は良好であり、色 調は小豆色もしくは灰色を呈する。	
68	灰原イ	須 恵 器 杯 身	В	口径 10.6cm 蓋受け部径 12.6cm 立上り高 0.6cm	立ち上りは短く、内傾する。立ち上りと 体部内面との境は鋭く稜がつく。自然釉が 付着しているため調整法は不明である。胎 土には細砂粒を多く含む。焼成は良好であ り、色調は灰黒色を呈する。	
69	灰原イ ア 層	須 恵 器	С	口径 9.5cm 蓋受け部径 11.7cm 立上り高 0.5cm	方ち上りは短く、内傾する。立ち上り基部と体部内面との境は鋭く稜がつく。底部はへラ削りを施しており、体部との境は角張る。以外は横ナデ調整。胎土には細砂粒を多く含む。焼成は良好であり、暗灰色。	
70	灰原イ	須恵器 杯 身	С	口径 10.0cm 蓋受け部径 12.0cm 立上り高 0.7cm	立ち上りは短く、基部付近は内傾し、中ほどから直立する。底部外面はへラ削りを施しており、体部との境は角張る。以外は横ナデ調整である。胎土には細砂粒を若干含む。焼成良好であり、暗灰色を呈す。	
71	灰 原 イ	74 75 111	С	口径 10.8cm 蓋受け部径 12.1cm 立上り高 0.8cm 器高 3.0cm	立ち上りは短く、直立する。底部外面は 手持ちへラ削りを施しており、以外は横ナ デ調整。胎土には細砂粒を多く含んでいる。 焼成は良好であり、色調は灰黒色を呈する。	
72	灰原イ		B s C	口径 10.3cm	底部と体部の境には一条の沈線が入り, 以下の部分にはカキ目調整を施す。体部は ゆるやかに外反しており、内外面とも横ナ デ調整を施す。胎土には細砂粒を含む。焼 成は良好であり、暗灰色を呈す。	
73	灰 原 イ		B s C	脚裾径 8.6cm	杯部を欠損するが高杯と思われる。 脚部中ほどに一条の沈線が入る。 内外面とも横ナデ調整を施す。 胎土には細砂粒を多量に含む。 焼成は良好であり、 色調は暗灰色を呈する。	
74	灰 原 イ	17T -44-	B s C	口径 6.9cm 器高 2.8cm	頂部を凹弯させた扁平なつまみがつく。 全面を横ナデ調整する。胎土には細砂粒を 多く含む。焼成は良好であり、色調は暗灰 色を呈する。	
75	灰 原 イ	74 /E 187	B s C	口径 9.1cm	口縁部に1条の沈線を配している。口頸 部は横ナデ調整を施す。頸部外面にへラ記 号を有する。胎土に細砂粒を多量に含んで いる。焼成は良好であり,色調は青灰色を 呈する。	
76	灰 原 イ		B s C	口径 8.6cm	口縁部は平坦面を有し、口縁部下面に1条の沈線が入る。胴部はカキ目調整を施しており、以外の部分は横ナデ調整である。 頸部外面にヘラ記号が入る。胎土は砂粒が多い。焼成良好で、灰黒色を呈する。	

番号	出土遺構	器 種	時 期	法量	特 徴	備考
77	灰 原 イ 下 層	須恵器	B ( C	口径 10.7cm	口縁部に沈線を配している。肩部外面は カキ目調整し,以外は横ナデを施す。肩部 内面は数条の沈線を配する。胎土に細砂粒 を多量に含む。焼成は良好であり,色調は 灰黒色を呈する。	
78	灰 原 イ	須恵器	В	口径 11.9cm 器高 3.5cm	一部と体部との境は凹貫する。大升部外面は	
79	灰原イ上 層	須恵器 茶蓋	В	口径 11.8cm	口縁端部内面はわずかであるが段をなし 天井部と体部の境には完周しない凹線が 入る。天井部外面はヘラ削りを施し,以外 は横ナデ調整である。胎土には細砂粒を多 く含む。焼成は良好で,青灰色を呈す。	
80	灰原イ上 層	須恵器 茶 蓋	С	口径 12.1cm 器高 3.2cm	は子持らヘブ削りを施し、内面部はデア、	
81	灰原イ上 層	須 恵 器 杯 蓋	С	口径 10.5cm 器高 3.9cm	口縁端部は丸くつくられている。天井部 外面はヘラ削りを施しており、この部分の 内面はナデを、以外は横ナデ調整を施す。 胎土には細砂粒を多く含む。焼成は良好で あり、色調は小豆色を呈する。	
82	灰原イ上 層	須 恵 器 杯 身	D	口径 9.8cm 器高 4.5cm	体部は立ち気味にのび口縁部にいたる。 底部はヘラ削りを施しており、やや丸味を もつ。胎土には細砂粒を多く含む。焼成は 良好であり、色調は暗黒色を呈する。	
83	灰原イ上 層	須 恵 器 杯 身	В	口径 11.8cm 最大部径13.6cm 立上り高 0.9cm	立ち上りはわずかに内傾する。底部外面 はヘラ削りを施し、以外は横ナデ調整であ る。胎土には細砂粒を多く含む。焼成は良 好であり、色調は小豆色を呈する。	
84	灰原イ	須 恵 器	C	口径 10.8cm 最大部径12.7cm 立上り高 0.7cm 器高 4.1cm	立ち上りは短く、内傾する。この部分には蓋をかぶせて焼成した際の融着がみられる。底部外面は手持ちへラ削りし、以外は横ナデ調整である。胎土には細砂粒を含む焼成は良好であり、灰黒色を呈する。	
85	灰 原 イ 下 層	須 恵 器		口径 12.7cm	口縁部は丸くつくられている。横ナデ調整である。胎土には細砂粒を多く含む。 焼成は良好であり,色調は暗灰色を呈する。	土師器的 器形
86	灰 原 イ	須 恵 器		口径 12.4cm	口縁端部は丸くつくられている。横ナデ調整である。胎土には細砂粒を多く含む。 焼成は良好であり,色調は暗灰色を呈する。	土師器的器形



番号	出土遺構	器 種	時期	法量	——————————— 特		備考
87	灰原イ上 層	須恵器		口径 14.2cm	口縁端部は平坦面をな調整を施す。胎土には細いる。焼成は良好であり 呈する。	砂粒を若干含んで	
88	灰原イ上 層	須 恵 器	B s C	口径 11.7㎝	口縁部は短く外反する 面は横ナデをし、胴部外 る。自然釉の付着が著し 粒を多く含む。焼成は良 灰黒色を呈する。	面はカキ目調整す い。胎土には細砂	土師器的 器形
89	灰 原 イ	須 恵 器	B ( C	口径 16.9cm	口縁部は粘土を貼付し近くに1条の沈線を配す施す。胎土には細砂粒を焼成は良好であり, 色調は	る。横ナデ調整を 多量に含んでいる。	
90	灰 原 イ	須 恵 器	B s C	口径 19.6cm	口縁部の断面は方形状面には1条の沈線を配し付着が著しいため調整法 土には細砂粒を多く含むり,色調は灰色を呈する	ている。自然釉の は不明である。胎 。焼成は良好であ	
91	灰 原 イ 下 <b>層</b>	須恵器	B s C	口径 21.9cm	口頸部はゆるやかに外 で外反度を強める。口縁 て肥厚させる。頸部外面 以外は横ナデ調整である 多く含む。焼成良好で,	部は粘土ご貼付し はカキ目調整し, 。胎土には砂粒を	
92	灰 原 イ 下 層	須恵器		口径 16.9cm 胴部最大径 23.8~29.4 cm	焼成時の焼きひずみに る。胴部外面は平行叩き 内面は同心円叩きを施す を多く含む。焼成は良好 る。頸部外面にへラ記号	上をカキ目調整し, 。胎土には細砂粒 で,暗灰色を呈す	
93	灰 原 イ	須 恵 器 把手付壺		口径 15.0cm 器高 18.6cm	口縁部は短く直立し、 有する。胴部外面は平行 刷毛目,内面は同心同叩 が見やれる。胎土には砂 成は良好であり,茶褐色	叩き上をカキ目と き上をナデ。黒斑 粒を多く含む。焼	土師器的赤焼き
94	灰原イ上 層	須恵器	B s C	口径 19.8cm	口縁端部は平坦面を有 平行叩き上をカキ目調整 叩き上を横ナデする。胎 干含むが良好である。焼 灰色を呈する。	し, 内面は同心円 土には細砂粒を若	
95	灰原 化上層	須恵器飯	B (C	底径 13.3cm	上半部分を欠損する。 に穿った孔がある。外面 キ目調整し,内面は弧状 ている。胎土には砂粒を 良好であり茶褐色を呈す	は平行叩き上をカ 叩き上を若干ナデ 多く含む。焼成は	
96	灰原イ上 層	須恵器		口径 16.6cm 胴部最大径 26.2cm 器高 32.4cm	口頸部は内外面とも横部外面は平行叩き上を力は弧状叩きを施す。一部胎土には砂粒を多く含むり,色調は茶褐色を呈す	キ目調整し,内面 に黒斑がみられる。 。焼成は良好であ	土師器的 形態





第 21 図 灰 原 イ 出 土 土 器 3 (縮尺1/4)

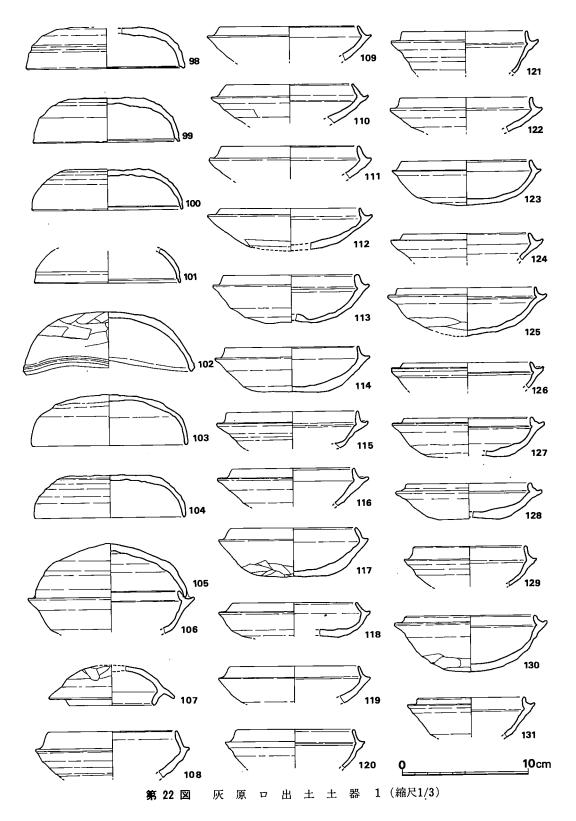
番号	出土遺構	器 種	時 期	法 量	特	備考
97	灰 原 イ	須恵器		口径 17.0cm 胴部最大径 36.0cm	口縁端部は平坦面を有する。口頸部は横 ナデ調整し、胴部外面は平行叩き上を刷毛 目調整し、内面は同心円叩きを施している。 胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好で、 茶褐色を呈する。一部に黒斑あり。	土師器的 態
98	灰原口下層	須 恵 器 杯 蓋	В	口径 12.4cm 器高 3.2cm	口縁端部内面はわずかに段がつき, 天井部と体部の境にも凹線が入る。天井部外面はへラ削りを施し, 以外は横ナデ調整である。胎土には細砂粒を含む。焼成は良好であり, 暗灰色を呈する。	
99	灰 原 口下 層	須恵器 茶 蓋		口径 11.6cm 器高 3.5cm	口縁端部内面は段がつく。天井部はヘラ削りをし、この部分の内面はナデを,以外は横ナデ調整を行う。胎土には細砂粒を含む。焼成は良好であり,色調は灰黒色を呈する。	
100	灰 原 口	須 恵 器 杯 蓋	В	口径 11.9cm 器高 3.2cm	口縁端部内面は若干段がつく。天井部周辺は自然釉付着のため調整法は不明である。 胎土は細砂粒を若干含む。焼成は良好であり,色調は暗灰色を呈する。	
101	灰 原 口下 層	須 恵 器 杯 蓋	В	口径 11.5cm	口縁端部内面は段を有する。天井部から体部への移行はなめらかで丸味をもつ。横ナデ調整である。胎土には細砂粒を若干含む。焼成は良好であり、色調は明小豆色を呈する。	

番号	出土遺構	器 種	時期	法量	特 徵	備	考
102	, 灰 原 口 下 層	須 恵 器 杯 蓋	С	口径 13.1~14.2cm 器高 4.4cm	焼けひずみが著しい。天井部外面の広範囲に手持ちへラ削りを施している。内面の頂部周辺広範囲はナデ,以外は横ナデを施す。胎土には砂粒を含む。焼成は良好であり,色調は暗灰色を呈する。		
103	灰原口下層	須恵器	С	口径 12.2cm 器高 3.5cm	口縁端部は丸くつくられている。天井部 外面は未調整である。胎土には細砂粒を含 む。焼成は良好であり,暗灰色を呈する。		
104	灰原口下層		С	口径 11.8cm 器高 3.3cm	口縁端部は丸くつくられている。天井部 外面は未調整であり、この部分の内面はナ デ、以外は横ナデを施す。外面は横ナデの 凹凸が著しい。胎土には細砂粒を含む。焼 成は良好であり、小豆色を呈する。		
105	灰 原 口 下   層	須 恵 器 杯 蓋	С	口径 12.0cm 器高 4.2cm	106と重ね焼きしている。口縁端部は丸くつくられている。天井部外面はヘラ削りを施している。胎土には細砂粒を多く含む。焼成は良好であり、色調は灰色を呈する。		
106	灰 原 口	須恵器 杯 身	С	口径 11.0cm 蓋受け部径 13.3cm 立上り高 0.7cm	立ち上りは短く、内傾する。立ち上り基部と体部内面との境は鋭く稜をなす。底部外面はへラ削りを施している。胎土には細砂粒を多く含む。焼成は良好であり、色調は灰黒色を呈する。		
107	灰 原 口	須恵器	B (C	口径 6.8cm 最大部径10.0cm かえり高 0.9cm	身受けのかえりを有する形態である。頂部を欠損するが、この部分につまみを有する可能性が強い。天井部外面は手持ちヘラ削りを施す。胎土には細砂粒を多量に含む。焼成は良好であり、青灰色を呈する。		
108	灰 原 口	須恵器 杯 身	A	口径 10.2cm 蓋受け部径 12.2cm 立上り高 1.2cm	立ち上り基部近くは内傾し,上部は直立する。現存部分は横ナデ調整である。胎土には細砂粒を含む。焼成は良好であり,色調は暗灰色を呈する。		
109	灰 原 口	須 恵 器	В	口径 10.9cm 蓋受け部径 13.0cm 立上り高 0.7cm	立ち上りは短く,内傾する。横ナデ調整を施している。胎土には細砂粒を若干含む程度で良好である。焼成は良好であり,色調は暗灰色を呈する。		
110	灰原口下層	須恵器 杯 身	В	口径 10.0cm 蓋受け部径 12.4cm 立上り高 1.0cm	立ち上りはやや長く、内傾する。底部外面の広範囲にヘラ削りを施している。胎土には細砂粒を含む。焼成は良好であり、色調は暗灰色を呈する。		
111	灰 原 口	須恵器 杯 身	В	口径 10.8cm 蓋受け部径 12.9cm 立上り高 0.9cm	立ち上りは短く、内傾する。横ナデ調整を施している。胎土には細砂粒を多く含む。 焼成は良好であり、色調は暗灰色を呈する。		

番号	出土遺構	器 種	時 期	法 量	特	徴	備	考
112	灰原口下 層	須 恵 器 杯 身	В	口径 11.1cm 蓋受け部径 13.1cm 立上り高 0.7cm 器高 3.4cm 口径 10.6cm	削りを施しており, 整である。胎土には 成は良好であり, 色調	内傾する。底部はヘラ 以外の部分は横ナデ調 細砂粒を多く含む。焼 は暗小豆色を呈する。 て,短く,内傾する。		
113	灰 原 口下 層	須 恵 器	В	五程 10.0cm 蓋受け部径 12.4cm 立上り高 0.8cm 器高 3.7cm	底部外面は広範囲に	ヘラ削りを施している。 む。焼成は良好であり,		,
114	灰 原 口下 層	須恵器 杯 身	В	口径 10.6cm 蓋受け部径 12.3cm 立上り高 0.8cm 器高 3.5cm	面はヘラ削りを施し 横ナデ調整を行う。	ほぼ直立する。底部外 ており、以外の部分は 胎土には細砂粒を多く く、色調は灰色を呈す		
115	灰 原 ロ	須恵器 杯 身	В	口径 10.3cm 蓋受け部径 12.0cm 立上り高 0.9cm	部と体部内面との境	直立する。立ち上り基 には鋭く稜が入る。胎 む。焼成は良好であり る。		
116	灰 原 口	須恵器 杯 身	В	口径 9.7cm 蓋受け部径 12.0cm 立上り高 0 8cm	部と体部内面との境 部外面はヘラ削りを	内傾する。立ち上り基 には鋭く稜が入る。底 施す。胎土には細砂粒 であり,色調は暗灰色		
117	灰 原 口	須恵器 杯 身	В	口径 9.9cm 蓋受け部径 11.9cm 立上り高 0.9cm 器高 3.8cm	ちヘラ削りを施して ナデ調整を施す。胎	内傾する。底部は手持 おり、以外の部分は横 土には細砂粒を含んで あり、色調は灰黒色を		
118	灰 原 口	須恵器 杯 身	В	口径 9.9cm 蓋受け部径 12.0cm 立上り高 0.7cm 器高 2.9cm	付着のため底部の調	内傾度は強い。自然釉 整法は不明である。胎 含む。焼成は良好であ 呈する。		
119	灰原口下層	須恵器 杯 身	В	口径 10.2cm 蓋受け部径 12.0cm 立上り高 0.8cm	ヘラ削りし, 以外の る。胎土には細砂粒	内傾する。底部外面は 部分は横ナデ調整であ を多量に含む。焼成は 暗灰色を呈する。		
120	灰原口下層	須恵器 杯 身	В	口径 9.2cm 蓋受け部径 11.0cm 立上り高 0.9cm		内傾する。横ナデ調整 砂粒を多く含む。焼成 は暗灰色を呈する。		
121	灰 原 口下 層	須恵器杯 身	В	口径 9.8mm 蓋受け部径 10.6cm 立上り高 0.8cm	を施している。胎土	直立する。横ナデ調整 には細砂粒を含む。焼 調は暗灰色を呈してい		

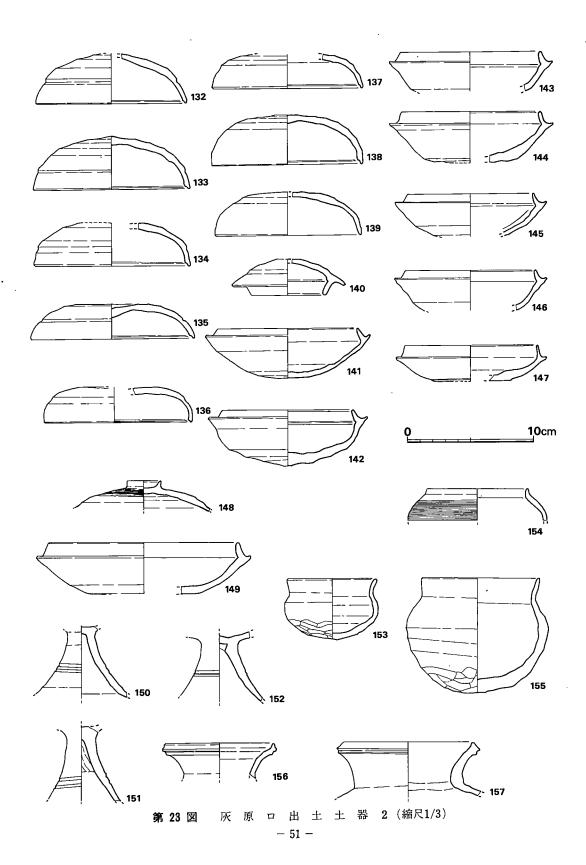
番号	出土遺構	器 種	時 期	法量	—————————————————————————————————————	徴	備	考
122	灰原口下層	須恵器 杯身	В	口径 10.3cm 蓋受け部径 12.0cm 立上り高 0.8cm	底部外面はへラ削りを 部分は横ナデ調整を行 を含んでいる。焼成に 小豆色を呈する。	ト弯ぎみに直立する。 を施しており、以外の うう。胎土には細砂粒 は良好であり、色調は 内傾する。底部外面は		
123	灰 原 口	須恵器杯 身	В	直径 10.2cm 蓋受け部径 11.7cm 立上り高 0.8cm 器高 3.5cm	へラ削りを施し、この以外の部分は横ナディ 粒を含む。焼成は良好 豆色を呈する。	の部分の内面はナデ, を施す。胎土には細砂 好であり, 色調は暗小	_	
124	灰原口下層	須恵器 杯 身	В	口径 9.9cm 蓋受け部径 12.0cm 立上り高 0.6cm	部と体部内面との境/ デ調整を施している。	対傾する。立ち上り基 は鋭く稜が入る。横ナ 胎土には細砂粒を多 であり、色調は灰黒色		
125	灰原口下層	須 恵 器 杯 身	С	口径 10.8cm 蓋受け部径 12.6cm 立上り高 0.6cm 器高 3.8cm	削りを施しており、」 整を行う。胎土には新	直立する。底部はヘラ 以外の部分は横ナデ調 細砂粒を含み,若干大 或は良好であり,色調		
126	灰原口下層	須 恵 器	С	口径 10.1cm 蓋受け部径 12.0cm 立上り高 0.5cm		対傾する。横ナデ調整 砂粒を若干含む。焼成 は暗灰色を呈する。		
127	灰 原 口	須 恵 器	С	口径 10.0cm 蓋受け部径 12.0cm 立上り高 0.5cm 器高 3.1cm	を施し,以外の部分に	内傾する。底部はナデ は横ナデを施す。胎土 む。焼成は良好であり, する。		
128	灰 原 口	須 恵 器	С	口径     9.8cm       蓋受け部径     11.5cm       立上り高 0.6cm     2.8cm	ナデ調整し、以外の	直立する。底部外面は 部分は横ナデを施す。 く含む。焼成は良好で を呈する。		
129	灰 原 口	須 恵 器杯 身	В	口径 8.8cm 蓋受け部径 10.4cm 立上り高 1.0cm	る。横ナデ調整を施	やや長く,若干内傾す している。胎土には細 成は良好であり, 色調		
130	灰原口下 層	須 恵 器	С	口径 10.2cm 蓋受け部径 12.1cm 立上り高 0.5cm 器高 4.5cm	広範囲に手持ちへラ の内面はナデ,以外	内傾する。底部外面は 削りを施し,この部分 は横ナデを施す。胎土 む。焼成は良好であり, ている。		
131	灰原口下層	須恵器 杯 身	С	口径 8.3cm 蓋受け部径 10 0cm 立上り高 0.6cm	外面はヘラ削りを施 デ調整である。胎土	外反ぎみにたつ。底部 し、以外の部分は横ナ には細砂粒を含む。焼 調は小豆色である。		

番号	出土遺構	器種	時 期	法 量	特	備考
132	灰 原 口	須恵器 茶 蓋	В	口径 11.9cm 器高 3.9cm	口縁端部内面はわずかに段がつき,体部と天井部との境には凹線が入る。天井部外面はへう削りを施しており,以外の部分は横ナデ調整である。胎土には細砂粒を多く含む。焼成は良好で,灰黒色を呈する。	
133	灰原口上層	須恵器 恭 蓋	В	口径 12.4cm 器高 4.2cm	口緑端部内面はわずかに段がつき,外面 の体部と天井部の境は若干凹弯する。天井 部外面はヘラ削りを行う。以外の部分は横 ナデとナデ調整である。胎土には細砂粒を 含む。焼成良好で,色調は灰黒色である。	
134	灰 原 口	須 恵 器 杯	В	口径 12.3cm 器高 3.4cm	口縁端部内面は段がつき、外面の天井部 と体部との境には凹線が入る。天井部の狭 い範囲をヘラ削りし、以外の部分は横ナデ 調整を行う。胎土には細砂粒を多く含む。 焼成良好で、暗灰色を呈する。	
135	灰 原 口上 層	須恵器 番	В	口径 12.9cm 器高 2.7cm	口緑端部内面はわずかに段がつき,外面の天井部と体部の境には沈線が入る。天井部外面はヘラ削りし,この部分の内面はナデ,以外は横ナデ調整する。胎土に細砂粒を含む。焼成良好で灰黒色を呈する。	
136	灰原口上層	須 恵 器 杯 蓋	В	口径 11.6cm 器高 2.9cm	口縁端部内面はわずかに段がつき,外面 の天井部と体部の境はわずかにくぼむ。ナ デと横ナデ調整を行う。胎土には細砂粒を 若干含む。焼成は良好であり,色調は暗灰 色を呈する。	
137	灰 原 口	須恵器 茶蓋	В	口径 12.0cm 器高 2.6cm	口縁端部内面は段がつく。天井部外面は へラ削りを施し、以外は横ナデ調整を行う。 胎土には細砂粒をわずかに含む。焼成は良 好であり、色調は灰色を呈する。	
138	灰 原 口上 層	須 恵 器 杯 蓋	В	口径 11.9cm 器高 3.9cm	口縁端部内面は段がつく。天井部外面のかなり広範囲にへラ削りを施し、この部分の内面はナデ、以外は横ナデ調整する。胎土には細砂粒を多く含む。焼成は良好であり、色調は小豆色を呈する。	
139	灰原口上 層	須恵器 茶 蓋	В	口径 11.5cm 器高 3.4cm	口縁端部は丸くつくられており、体部から天井部への移行はなめらかである。天井部外面はナデを施す。胎土には細砂粒を含んでいる。焼成は良好であり、色調は暗灰色を呈する。	
140	灰原口上 層	須恵器	B ' C	口径 5.7cm 身受け部径 9.0cm かえり高 1.0cm 器高 2.8cm	身受けのかえりはやや長く、内傾する。 自然釉が付着しているため調整法は不明で ある。胎土には細砂粒を多く含む。焼成は 良好であり、色調は青灰色を呈する。	
141	灰原口上 層	須 恵 器	В	口径 11.0cm 蓋受け部径 13.1cm 立上り高 0.7cm 器高 4.0cm	立ち上りは短く,内傾する。全体に薄手造りである。自然釉の付着が著しいため,調整法は不明である。胎土には細砂粒を多く含む。焼成は良好であり,色調は暗灰色を呈する。	



**- 49 -**

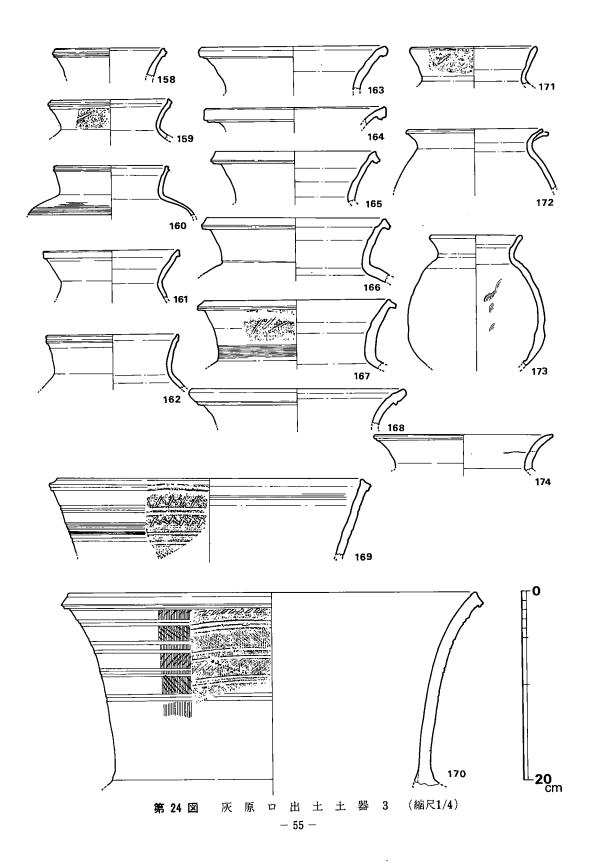
番号	出土遺構	器種	時 期	法量	特 徵	備考
142	灰原口上 層	須恵器 杯 身	В	口径 10.3cm 蓋受け部径 12.6cm 立上り高 0.6cm 器高 4.4cm	立ち上りは短く、内傾する。立ち上り部分には重ね焼きの融着が見られる。底部外面はヘラ削りを施し、この部分の内面はナデ、以外は横ナデ調整。胎土には砂粒を含む。焼成良好で灰黒色を呈する。	
143	灰原口	須恵器 杯 身	В	口径 11.0cm 蓋受け部径 12.9cm 立上り高 0.8cm	立ち上りは短く、内傾する。底部外面は へラ削りを施し、以外の部分は横ナデ調整 を行う。胎土には細砂粒を多く含む。焼成 は良好であり、色調は暗灰色を呈する。	
144	灰 原 口	須恵器 タ	В	口径 10.8cm 蓋受け部径 12.9cm 立上り高 0.9cm 器高 4.0cm	立ち上りは短く、内傾する。底部外面は ナデ調整し、立ち上り周辺部は横ナデを施 す。胎土には細砂粒を多く含む。焼成は良 好であり、色調は小豆色を呈する。	
145	灰 原 口	須恵器	В	口径 10.0cm 蓋受け部径 12.0cm 立上り高 0.7cm 器高 3.4cm	立ち上りは短く、内傾する。底部外面は ヘラ削りを施し、以外の部分は横ナデ調整 である。底部内面にヘラ記号を有する。胎 土には細砂粒を多く含む。焼成は良好であ り、色調は明小豆色を呈する。	
146	灰 原 口上 層	須恵器 杯 身	В	口径 10.2cm 蓋受け部径 12.0cm 立上り高 0.6cm	立ち上りは短く、内傾する。底部外面は へラ削りを施し、以外の部分は横ナデ調整 を施す。胎土には細砂粒を多く含む。焼成 は良好であり、色調は灰黒色を呈す。	,
147	灰 原 口	須恵器 杯 身	В	口径 10.5cm 蓋受け部径 12.0cm 立上り高 0.9cm 器高 2.8cm	立ち上りは短く、わずかに内傾する。底部外面はナデ調整のみである。以外の部分は横ナデを施す。胎土には細砂粒を多く含む。焼成は良好であり、色調は小豆色を呈する。	
148	灰 原 口上 層		B S C		有蓋高杯の蓋であり、口縁部を欠損する。 頂部には径2.7cmの扁平なつまみがつき、つ まみ頂部は凹弯する。つまみ周辺はカキ目 調整を行う。胎土には細砂粒を多く含む。 焼成は良好で、小豆色を呈する。	
149	灰 原 口上 層	須 恵 器	B S C	口径 15.1cm 蓋受け部径 17.0cm 立上り高 1.1cm	脚柱部を欠損する有蓋高杯と思われる。 立ち上りは短く、若干内傾する。底部周辺 はへラ削りを施しており、以外の部分は横 ナデ調整を行う。胎土には細砂粒を多量に 含む。焼成は良好で、灰黒色を呈する。	
150	灰 原 口	須恵器高 杯	B \$ C		脚柱部には2条の沈線が入る。内外面とも横ナデ調整を施す。胎土には細砂粒を含む。焼成は良好であり、色調は明小豆色を呈する。	
151	灰 原 口	須 恵 器 高 杯	B S C		脚柱部には2条の沈線が入る。脚柱部内 面の上方にはしぼり痕が遺存する。内外面 とも横ナデ調整を施す。胎土には細砂粒を 多量に含む。焼成は良好であり,色調は暗 灰色を呈する。	

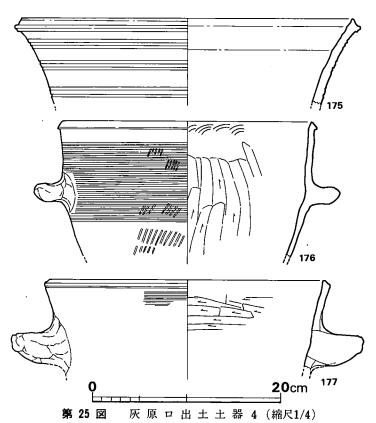


番号	出土遺構	器種	時 期	法	量	 特	<b>徴</b>	備	考
152	灰原口下層	須恵器高 杯	B , C			脚柱部には2条の沈線 も横ナデ調整を施す。胎 く含む。焼成は良好であ を呈する。	土には細砂粒を多		
153	灰 原 口	須恵器	B \$ C	口径 器高	7.0cm 4.9cm	口縁部は外弯し,端部に 底部の広範囲に手持ちへ 外の部分は横ナデ調整を 粒を含む。焼成は良好で 色を呈する。	ラ削りを施し,以 行う。胎土には砂		
154	灰原口上層	須恵器坩	B s C	口径	7.9cm	口頸部は短く, 直立す 面にはカキ目調整を施し 施す。胎土には細砂粒を 良好であり, 色調は暗灰	,内面は横ナデを 多く含む。焼成は		
155	灰 原 口	須 恵 器 坩	B ( C	口径器高	9.2cm 9.2cm	口類部は若干外反する。 ラ削りを施し、外上方部 胴部は不定方向のナデを 砂粒を多く含む。焼成は は暗灰色を呈する。	は横ナデを行う。 行う。胎土には細		
156	灰原口上層	須恵器 提 瓶	B ( C	口径	8.5cm	口縁部には2ヵ所に沈添える。横ナデ調整を行う記号を有する。胎土にむ。焼成は良好であり,する。	う。頸部外面にへ は細砂粒を多く含		
157	灰原口下層	須恵器	B \$ C	口径	10.3cm	口縁部上面は平坦であ 条の沈線を配する。口頸 ナデ調整を施す。胎土に む。焼成は良好であり, る。	部は内外面とも横 は細砂粒を多く含		
158	灰原口下 層.	須 恵 器	B \$ C	口径	11.3cm	口縁部に1条の沈線を る。口頸部は内外面とも 胎土には細砂粒を多量に であり、色調は淡小豆色 可能性もある。	横ナデ調整を施す。 含む。焼成は良好		
159	灰原口上層	須恵器壺	B ( C	口径	12.2cm	口縁端部はわずかに内で 内外面とも横ナデ調整を へラ記号を有する。胎土に含む。焼成は良好であ を呈する。	施す。頸部外面に には細砂粒を多量		
160	灰原口上層	須恵器壺	B \$ . C	口径	11.4cm	口縁部に沈線を配して 頸部内外面とも自然釉の 調整法は不明である。胴整を施す。頸部外面にへ に砂粒含み、焼成良好、	付着が著しいため 部外面はカキ目調 ラ記号あり。胎土		
161	灰原口下層	須恵器変	B C	口径	14.1cm	口頸部内外面とも自然だめ調整法は不明である。 ナデを施す。胎士に細砂が成は良好であり、色調は	。胴上部内面は横 粒を若干含む。焼		,

番号	出土遺構	器 種	時 期	法	量	特 徴	備	考
162	灰原口下層	須恵器	B f C	口径	13.6cm	口縁部外面に凹線を配し,内面は若干段を有する。器表の磨滅が著しいため調整法は不明である。胎土には細砂粒をわずかに含む。焼成は良好であり,色調は灰黄色を呈する。		
163	灰原口下層	須 恵 器	B s C	口径	19.4cm	口縁部は粘土貼付により肥厚させており, 丸味をもつ。頸部外面は平行叩き上を横ナ デし,口縁部と内面はナデ調整する。胎土 には細砂粒を含む。焼成は良好であり,色 調は暗灰色を呈する。		
164	灰原口下層	須 恵 器	B S C	口径	19.0cm	口縁部は粘土貼付により著しく肥厚させており、下面に突帯を配する。横ナデ調整を施す。胎土には細砂粒を多く含む。焼成は良好であり、色調は小豆色を呈する。		
165	灰 原 口	須 恵 器	B s C	口径	16.8cm	口縁部は粘土貼付により肥厚させ,突出する。口頸部内外面とも横ナデ調整を施す。 胎土には細砂粒をかなり含む。焼成は良好であり,色調は小豆色を呈する。		
166	灰原口下層	須恵器	B (C	口径	18.8cm	口縁部は粘土貼付により肥厚させ,突出する。口頸部内外面は横ナデを施し,胴上部外面はカキ目調整である。胎土には細砂粒を多く含む。焼成は良好であり,色調は灰色を呈する。		
167	灰原口下層	須 恵 器 変	B ( C	口径	19.5cm	口縁部は粘土貼付により肥厚させ,突出する。頸基部外面はカキ目調整し,以外の部分は横ナデ調整を施す。頸部外面にヘラ記号を有す。胎土には細砂粒を多く含む。 焼成は良好であり,色調は暗灰色。		
168	灰原口下 層	須 恵 器 変	B s C	口径	22.3cm	口縁部は平坦面を有し、下方に一条の突帯を配す。横ナデ調整を施す。胎土には細砂粒を多く含む。焼成は良好であり、色調は灰色を呈する。		
169	灰原口下 層	須 恵 器	B , C	口径	32.0cm	長頸の甕である。3ヵ所に沈線を配し、 3段に互いに交差する刺突文を配する。 頸部外面の若干をカキ目調整し、以外は横 ナデを施す。胎土には細砂粒を多く含む。 焼成は良好であり、色調は灰色を呈する。		
170	灰原口上 層	須恵器	B ( C	口径	43.0cm	長頸の婆である。頸部中位以上の4ヵ所に2条ずつの沈線を配し、その直上部4段に互い違いの方向で刺突文を配する。外面はカキ目と横ナデを、内面は横ナデを施す。胎土は砂粒多く、焼成良好、暗灰色。		
171	灰 原 口上 層	須恵器		口径	12.9cm	口頸部は直線的に外反し,端部は丸くつくられている。横ナデ調整である。頸部外面にヘラ記号を有する。胎土には細砂粒を多く含む。焼成は良好であり,色調は暗小豆色を呈する。	土卸形態	器的

番号	出土遺構	器種	時 期	法	量	特	徴	備考
172	灰原口上層	須恵器		口径	14.3cm	自然釉付着のため調整 面は横ナデを施す。B	豆度が著しい。外面は 整法は不明である。内 胎土には細砂粒を多く あり,色調は灰黒色を	土師器的 形態
173	灰 原 口	須恵器 変		口径 最大径	9.3cm 14.4cm	部外面は平行叩き上る 円叩き上を横ナデ調整	る小型の甕である。胴を横ナデ,内面は同心 を横ナデ,内面は同心 整する。胎土には細砂 好であり,色調は灰黒	土師器的 形態
174	灰原口上層	須恵器		   口径 	18.6cm	する。口頸部内外面で	もち,直下に沈線を配 とも横ナデ調整を施す。 を含む。焼成は良好で 呈する。	土師器的 形態
175	灰原口下層	須恵器	B ( C	口径	34.8cm	2条ほ沈線を配する。 横ナデ調整するが、F	類部外面の3ヵ所に各 外面は平行叩き上を 内面は自然釉のため不 を多量に含む。焼成は 灰黒色を呈する。	
176	灰原口上層	須恵器飯	B \$ C	口径	26.0cm	状叩き上を横ナデし, 持ちへラ削りを施す。	を横ナデし、内面は弧 下面部は縦方向に手 胎土は微細粒を含む であり、色調は暗灰色	
177	灰原口下層	須恵器飯	B S C	口径	29.0cm	的にカキ目を施す。P ヘラ削りを施している	を横ナデ調整し,部分 内面は縦方向に手持ちる。胎土には細砂粒を 好であり,色調は灰色	
180	灰原ハ	須 恵 器	A	口径	14.4cm	の境は凹弯する。横ナ	を有し,天井部と体部 デ調整を施している。 を多く含む。焼成は良 灰色を呈する。	
181	灰原ハ	須恵器 杯 蓋	В	口径 器高	11.9cm 3.7cm	部と体部の境に凹線な	ずかに段がつく。天井 が入る。天井部外面は みの内面はナデ、以外 胎土には細砂粒を含 り、小豆色を呈する。	
182	灰原ハ	須 恵 器	В	口径	11.8cm	部と体部の境には甘い 外面はヘラ削りを施し	ずかに段がつく。天井 い凹線が入る。天井部 し、以外は横ナデ調整 沙粒を多く含む。焼成 色を呈する。	
183	灰原ハ	須 恵 器 杯 蓋	В	口径	11.8cm	天井部は自然釉付着の	線が入り、段をなす。 のため調整法は不明で こは横ナデを施す。胎 含む。焼成良好であり、	

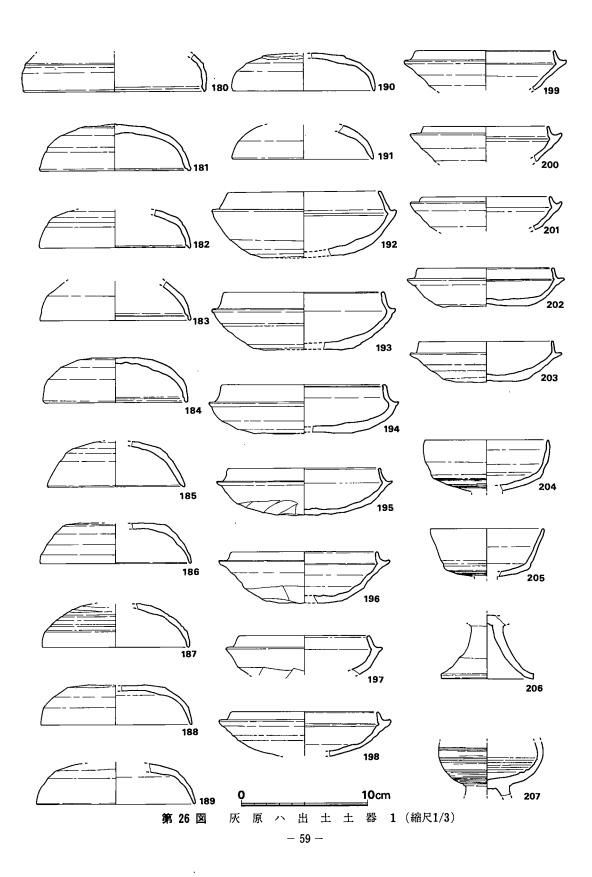




番号 出土遺構 器 種 時 期 法 量 特 徴 備考 口縁端部内面はわずかに段がつく。天井 口径 11.3cm 須 恵 器 部外面はヘラ削りを施し, 以外は横ナデ調 灰原ハ 184 В 器高 3.5cm 整である。胎土には細砂粒を多く含む。焼 杯 蓋 成はやや甘く, 色調は小豆色を呈する。 口縁端部内面はわずかに段がつく。天井 口径 10.8cm 須 恵 器 部外面の狭い範囲にヘラ削りを施す。以外 灰原ハ 185 В 器高 3.5cm は横ナデとナデ調整である。胎土には細砂 杯 蓋 粒を多く含む。焼成は良好であり、色調は 灰黒色を呈する。 口縁端部は丸くつくられる。天井部外面 口径 11.9cm はヘラ削りを施しており平坦である。口縁 須 恵 器 186 灰原ハ С 器高 3.2cm 部周辺の内外面は横ナデ調整である。胎土 杯 蓋 には細砂粒を多く含む。焼成は良好であり、 色調は暗灰色を呈する。 口縁端部は丸くつくられている。天井部 口径 11.6cm の狭い範囲に手持ちへラ削りを施す。以外 須 恵 器 灰原ハ 187 С 器高 3.5cm は横ナデ:頂部内面はナデを施す。胎土に 杯 蓋 は細砂粒を多く含む。焼成は良好であり、 色調は灰色を呈する。

番号	出土遺構	器 種	時 期	法量	特	備考
188	灰原ハ	須 恵 器 杯 蓋	С	口径 11.8cm 器高 3.1cm	口縁端部は丸くつくられている。天井部 外面はナデ調整のみである。以外は横ナデ 調整を施す。胎土には細砂粒を多量に含む。 焼成は良好であり,色調は小豆色を呈する。	
189	灰原ハ	須 恵 器 杯 蓋	С	口径 12.4cm 器高	口縁端部は丸くつくられている。天井部 外面はナデ調整のみである。頂部内面はナ デを,以外の部分は横ナデを施す。胎土に は細砂粒を含む。焼成は良好であり,色調 は小豆色を呈する。	
190	灰原ハ	須恵器   杯   蓋	С	口径 11.2cm 器高 2.9cm	口縁端部は丸くつくられている。天井部はヘラ切り離しのままであり、ナデ調整のみを施す。頂部内面はナデ、以外は横ナデ調整である。胎土には細砂粒を多く含む。 焼成は良好であり、灰黒色を呈する。	
191	灰原ハ	須恵器	С	口径 11.1cm 器高	口縁端部は丸くつくられている。自然釉付着のため調整法は不明。胎土には細砂粒を多く含む。焼成は良好であり, 色調は灰黒色を呈する。	
192	灰原ハ	須 恵 器	A	口径12.0cm蓋受け部径14.7cm立上り高 1.5cm3.2cm	立ち上りは長く、内傾する。底部外面の 広範囲にヘラ削りを施し、以外の部分は横 ナデ調整である。胎土には細砂粒を多く含 む。焼成は良好であり、色調は青灰色を呈 する。	
193	灰原ハ	須 恵 器	A	口径 12.7cm 蓋受け部径 14.6cm 立上り高 1.3cm 器高 4.6cm	立ち上りはやや長く、内傾する。底部外面は平坦であり、ヘラ削りを施している。 この部分の内面はナデを、以外の部分は横 ナデ調整である。胎土には細砂粒を多く含む。焼成は良好であり、青灰色を呈する。	
194	灰原ハ	須恵器 杯 身	A	口径 12.7cm 蓋受け部径 15.0cm 立上り高 1.3cm 器高 3.3cm		
195	灰原ハ	須 恵 器	В	口径 12.1cm 蓋受け部径 13.9cm 立上り高 1.0cm 器高 3.7cm	立ち上りは1cmで若干内傾する。底部外面の広範囲に手持ちへラ削りを施し、この部分の内面はナデ、以外は横ナデ調整である。胎土には細砂粒を含む。焼成は良好であり、小豆色を呈する。	
196	灰原ハ	須恵器 杯 身	В	口径 11.5cm 蓋受け部径 13.5cm 立上り高 0.7cm 器高 4.0cm	立ち上りは短く、わずかに内傾する。底部外面は手持ちへラ削りを施し、この部分の内面はナデ、以外は横ナデを施す。胎土には細・小砂粒を含む。焼成は良好であり、小豆色を呈する。	
197	灰原ハ	須 恵 器	В	口径 10.2cm 蓋受け部径 12.4cm 立上り高 0.9cm	立ち上りは短く、内傾する。底部外面は 手持ちヘラ削りを施し、以外の部分は横ナ デ調整である。胎土には細砂粒を多く含む。 焼成は良好であり、暗灰色を呈する。	

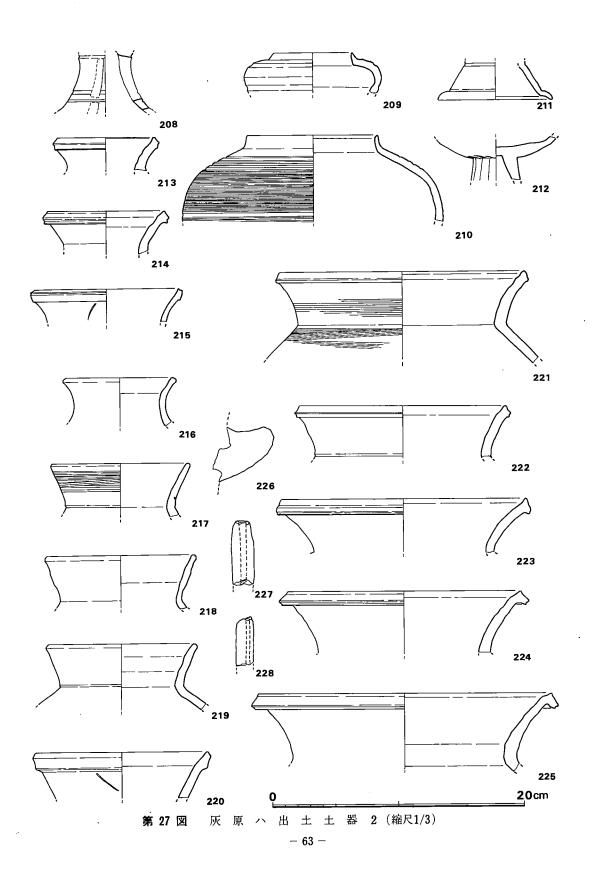
番号	出土遺構	器 種	時 期	法 量	特	徴	備	考
198	灰原ハ	須恵器 杯 身	В	口径 11.6cm 蓋受け部径 13.6cm 立上り高 0.7cm 器高	付着のため底部の調整	はば直立する。自然釉 整法は不明である。胎 含む。焼成は良好であ 呈する。		
199	灰原ハ	須恵器 杯 身	В	口径 10.9cm 蓋受け部径 12.8cm 立上り高 0.8cm 器高	部外面はヘラ削りを抗 ナデ調整である。胎	わずかに内傾する。底 施し,以外の部分は横 土には細砂粒を多く含 り,色調は暗灰色を呈		
200	灰原ハ	須恵器 杯 身	С	口径 9.8cm 蓋受け部径 12.0cm 立上り高 0.7cm 器高	ナデ調整を施してい	わずかに内傾する <sup>6</sup> 。横 る。胎土には細砂粒を 好であり,色調は灰色		,
201	灰原ハ	須 恵 器	С	口径 10.1cm 蓋受け部径 12.0cm 立上り高 0.5cm	ヘラ削りを施し,以外	内傾する。底部外面は 外の部分は横ナデ調整 砂粒を多く含む。焼成 豆色を呈する。		
202	灰原ハ	須恵器 杯 身	В	口径 10.7cm 蓋受け部径 12.4cm 立上り高 0.8cm 器高 3.0cm	部内外面はナデ調整	わずかに内傾する。底 を,以外は横ナデを施 を若干含む。焼成は良 灰色を呈する。		
203	灰原ハ	須恵器 杯 身	В	口径 10.5cm 蓋受け部径 12.0cm 立上り高 0.9cm 器高 3.2cm	はナベ調整し,以外は	直立する。底部内外面 横ナデを施している。 く含む。焼成は良好で 色を呈する。		.
204	灰原ハ	須恵器	B s C	口径 9.6cm	境はやや角張り、底部	に立つ。体部と底部の 部外面にはカキ目を施 細砂粒を多く含む。焼 調は小豆色を呈する。		
205	灰原ハ	須恵器	B { C	口径 8.8cm	する。底部外面はカ: デしている。胎土に	の境部近くに凹線を配き目を施したあと横ナは細砂粒を多量に含む。 調は灰黒色を呈する。		
206	灰原ハ	· 須 恵 器	B (C	脚裾径 7.2cm		貴ナデ調整を施してい を含む。焼成は良好で を呈する。		
207	灰原ハ	須 恵 器脚台付壺	B s C		の下方はヘラ削り上z 面は同心円叩きが若っ	を欠損する。体部外面 からカキ目を施す。内 干遺存する。胎土には 焼成は良好であり,色		



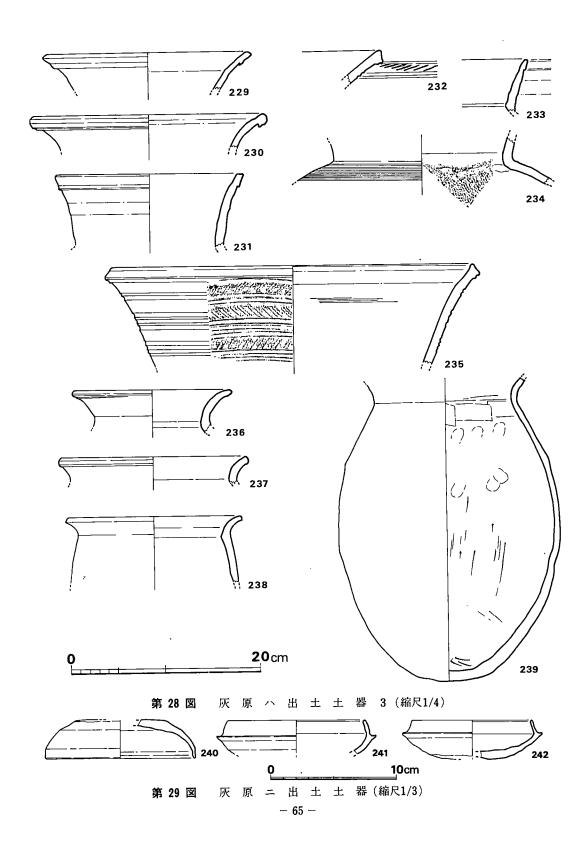
番号	出土遺構	器 種	時 期	法	量	特	徴	備	考
208	灰原ハ	須恵器高 杯	B C	-		小片であるが,上7が3ヵ所に入るものと整である。胎土には組成は良好であり,色調	⊞砂粒を多く含む。焼		
209	灰原ハ	須恵器 坩	B s C	口径 最大径	6.2cm 10.8cm	口頸部は短く,内的に凹線が入る。内外面 に凹線が入る。内外面 す。胎土には細砂粒を 好であり,暗灰色を与	と若干含む。焼成は良		
210	灰原ハ	須恵器壺	A S C	口径 最大径	10.4cm 20.6cm	口頸部は短く, わずに4条, 胴部中位に1 キ目調整を施す。肩き 調整である。胎土にに 焼成は良好であり, 田	『以上と内面は横ナデ は細砂粒を多く含む。		
211	灰原ハ	須恵器	B C	底径	8.9cm	脚裾部近くに屈曲ほも横ナデ調整である。 く含む。焼成は良好で を呈する。			-
212	灰原ハ	土 師 器				脚部外面は縦方向に り、外面の杯部下面に 土には細砂粒を多く含 り、色調は茶褐色を5	含む。焼成は良好でか		
213	灰原ハ	須恵器 提 瓶	A S -	口径	7.7cm	口縁部に1条の沈線 外面は横ナデ調整を放 を多く含む。焼成は 黒色を呈する。横瓶の	良好であり,色調は灰		
214	灰原ハ	須恵器	A s C	口径	9.2cm	口縁部に1条の沈線 外面は横ナデ調整を放 を含む。焼成は良好で である。横瓶の可能性	ごあり, 色調は暗灰色		
215	灰原ハ	須 恵 器		口径	11.4cm	口縁部に一条の沈線 着のため調整法は不明 へラ記号を有する。 脂 含む。焼成は良好であ	台土には細砂粒を多く		
216	灰原ハ	須 惠 器		口径	8.5cm	口頸部中ほどからの 然釉が付着しており、 胎土には細砂粒を多く あり、色調は暗灰色を	(含む。焼成は良好で)	土師形	器的態
217	灰原ハ	須恵器		口径	10.8cm	頸部は直線的に外原られている。頸部外面面は横ナデ調整である胎土に細砂粒を多く含り,灰黒色を呈する。	。自然釉が付着する。	土師形	器的態

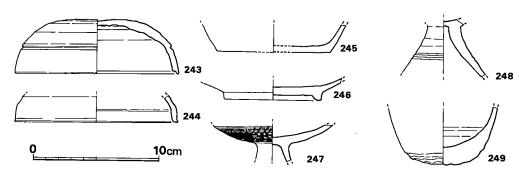
番号	出土遺構	器 種	時 期	法	量	特	備考
218	灰原小	須恵器		口径	11.6cm	口縁端部は丸くつくられている。内外面とも自然釉付着のため調整法は不明である。 胎土には細砂粒を多く含む。焼成は良好であり、色調は灰黒色を呈する。	土師器
219	灰原ハ	須 恵 器		口径	12.0cm	口縁端部は丸くつくられている。自然和付着のため調整法は不明である。胎土には細砂粒を多く含む。焼成は良好であり、色調は灰黒色を呈する。	土師器
220	灰原ハ	須恵器. 変	B f C	口径	13.6cm	口縁部に粘土を貼付して肥厚させる。自然釉が多量に付着しており調整法は不明である。胎土には細砂粒を多く含む。焼成は良好であり、色調は暗灰色を呈する。頸部外面にヘラ記号を有する。	
221	灰原ハ	須恵器	B } C	口径	19.3cm	頸部外面はカキ目を施し、さらにナデている。胴部外面は平行叩き上にカキ目調整し、内面は同心円叩きを施す。胎土には組砂粒を多く含む。焼成は良好であり、色離は灰色を呈する。	:   
222	灰 原 ハ	須 恵 器	B (C	口径	16.3cm	口縁部は粘土を貼付して若干肥厚させる 内外面とも横ナデ調整を施す。胎土には 細砂粒を多量に含む。焼成は良好であり, 色調は小豆色を呈する。	0
223	灰原ハ	須 恵 器	B s C	口径	19.3cm	口縁部は粘土を貼付しており、端部上面はややとがる。内外面とも横ナデ調整を施している。胎土には細砂粒を多量に含む。 焼成は良好であり、色調は暗灰色を呈する。	
224	灰原ハ	須 恵 器	B s C	口径	18.5cm	口縁部に粘土を貼付して肥厚させ,突出させている。内外面とも自然釉の付着が著しいため調整法は不明である。胎土には細砂粒を多く含む。焼成は良好であり,色調は灰色を呈する。	
225	灰原ハ	須 恵 器	B , C	口径	23.2cm	口縁部には粘土を貼付しており,下方へ 突出する。頸部内面は成形時の凹凸が著し い。内外面とも自然釉が付着しているため 調整法は不明である。胎土は細砂粒を含む 焼成は良好であり,灰色を呈する。	•
226	灰原ハ	須 惠 器	B s C			把手部分のみであり、胴部への接合のため、把手裏面に径1.5cm,厚さ1.0cmの突出部を有する。外面はナデ、裏面は接合を良くするため、平行沈線を入れる。胎土には微砂粒を含み、焼成良好、淡灰色。	
227	灰原ハ	須恵器土 錘	A S C	径 孔径 長さ	1.8cm 0.5cm 5.1cm	若干部分を折損する。焼成前に片側からのみ穿孔している。ナデ調整である。胎土には細砂粒を多く含む。焼成は良好であり、色調は暗灰色を呈する。	

番号	出土遺構	器 種	時 期	法	量	特 徴	備	考
228	灰 原 ハ 横底ピット	須恵器土 錘	A s C	径 孔径 長さ	1.4cm 0.3cm 3.9cm	若干部分を折損する。焼成前に片側からのみ穿孔している。ナデ調整である。胎土には細砂粒を多く含む。焼成は良好であり, 色調は灰色を呈する。		
229	灰原ハ	須恵器変	B , C	口径	21.0cm	口縁部の断面形は長方形状を呈する。口 頸部内外面とも横ナデ調整である。胎土に は細砂粒を多く含む。焼成は良好であり, 色調は青灰色を呈する。		
230	灰原ハ	須恵器	B { C	口径	24.2cm	口縁部に粘土を貼付して 肥厚させており 丸味を有する。頸部外面は平行叩き上を横 ナデ調整する。内面は自然釉付着のため不 明である。胎土には細砂粒を多く含む。焼 成は良好であり、小豆色を呈する。		
231	灰 原 ハ	須恵器	B \$ C	口径	18.8cm	口縁部に粘土を貼付する。自然釉付着のため調整方法は不明である。胎土には細砂粒を多量に含む。焼成は良好であり, 色調は暗灰色を呈する。		
232	灰原ハ	須恵器	B ( C			長頸の甕と思われる。頸部に2条の沈線が入り, 直上部に櫛状器具による刺突文が入る。内外面とも横ナデ調整である。胎土には細砂粒を多く含む。焼成は良好であり,灰色を呈する。		
233	灰原ハ	須恵器 変	B ( C			頸部内外面とも成形時の凹凸が著しい。 頸部内面は横ナデ調整であり、外面は自然 釉付着のため不明である。胎土には細砂粒 を多量に含む。焼成は良好であり、暗灰色 を呈する。		
234	灰原ハ	須恵器	B s C			胴部外面はカキ目,内面は同心円叩きを施す。胎土には細砂粒を多く含む。焼成は良好であり,色調は小豆色を呈する。		
235	灰原ハ	須恵器	B S C	口径	38.0cm	頸部の3ヵ所に沈線を配し、沈線間に櫛 状器具による刺突文を互い違いに入れる。 内外面とも横ナデ調整を施す。胎土には細 砂粒を多量に含む。焼成は良好であり、色 調は灰黒色を呈する。		
236	灰原ハ	須恵器		口径	16.6cm	口頸部の外反度は著しい。内外面とも横 ナデ調整を施す。胎土には細・小砂粒を多 く含み、雲母を混入する。焼成は良好であ り、茶色を呈する。	土師	器的
237	灰原ハ	須恵器		口径	19.5cm	口頸部の外反度は著しい。器面の剝落が 著しいため調整法は不明である。胎土には 細砂粒を含むが良好である。焼成は良好で あり,色調は黄茶色を呈する。	土師	器的



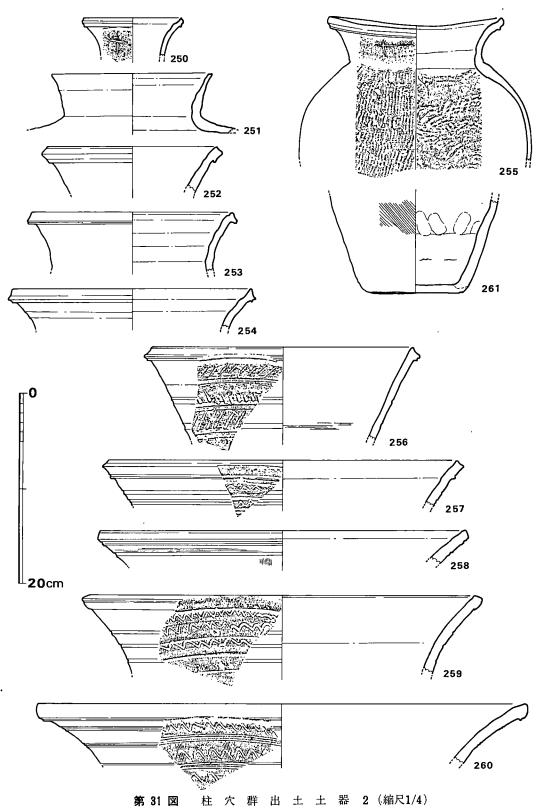
番号	出土遺構	器 種	時 期	法 量	特	徴	 備	考
238	灰原ハ	須恵器		口径 18.3cm	口頸部は短く,外質胴部の境は角張る。頸胴部外面は横ナデ,内土には細砂粒と雲母をあり,黄茶色を呈する	内面はナデを施す。胎 と含む。焼成は良好で	土師報形	器的態
239	灰原ハ	須恵器		最大径 23.3cm	口縁部を欠損する。 部外面は全面にへラ優 がみられる。内面は「 ラ削りを施し、頸部ド 胎土に砂粒を含み,焼	下半部分に縦方向のへ 内外は横ナデを施す。	土師智	器的態
240	灰原二	須 恵 器 杯 蓋	C	口径 11.8cm 器高 3.0cm	口縁端部は丸くつくはナデ調整し,この音 外は横ナデを施す。 胎 含む。焼成は良好でま 呈す。	台土には細砂粒を多く		
241	灰 原 ニ	須恵器 杯 身	В	口径 10.8cm 蓋受け部径 12.6cm 立上り高 1.2cm	横ナデ調整である。胎	内傾する。内外面とも 台土には細砂粒を多 ごあり,灰色を呈する。		
242	灰原二	須 恵 器杯 身	В	口径 9.4cm 蓋受け部径 11.1cm 立上り高 1.0cm 器高 3.1cm	立ち上りは1cmで内ナデ調整し、この部分は横ナデを施す。胎出む。焼成は良好でありする。	には細砂粒を多く含		
243	柱穴群	須 恵 器 杯 蓋	A	口径 12.9cm 器高 4.2cm	ロ縁端部内面は段かの境に沈線が入る。天 を施し,以外の部分は 胎土に細砂粒を多く含り,色調は暗小豆色を	は横ナデ調整である。 こむ。焼成は良好であ		
244	柱穴群	須恵器 杯 蓋	В	口径 12.8cm	口縁端部は平坦面をはへラ削りし、以外は胎土には細砂粒を多くあり、灰黒色を呈する	含む。焼成は良好で		
245	柱穴群	須恵器 杯 身	D	底径 9.0cm	底部は平坦であり, 部内外面は横ナデ調整 粒を若干含むも良好て あり,色調は灰色を呈	ある。焼成は良好で		
246	柱穴群	須恵器 杯 身	D	底径 7.7cm	丈の低い高台を貼付 杯部には沈線を施して 粒を多く含む。焼成は 明小豆色を呈する。			
247	柱穴群	須 恵 器高 杯	B (		杯部下面はカキ目調 る刺突文が入る。 脚部 はナデ調整である。 胎 含む。 焼成は良好であ 呈する。	i土には細砂粒を多く		





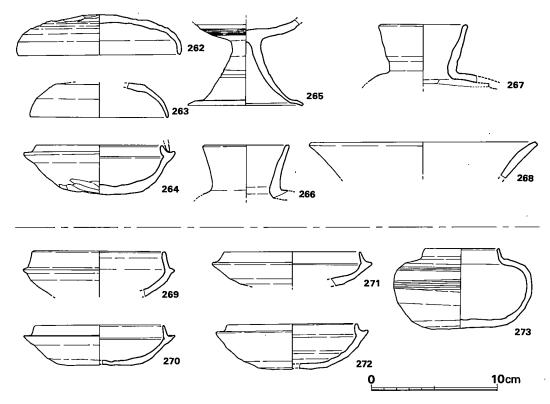
第 30 図 桂 穴 群 出 土 土 器 1 (縮尺1/3)

番号	出土遺構	器 種	時期	法量	特 徴	備考
248	柱穴群	須恵器	B (C		脚柱部に2条の平行沈線が入る。内外面 とも横ナデ調整である。胎土には細砂粒を 多く含む。焼成は良好であり、色調は灰黒 色を呈する。	
249	柱穴群	須恵器			下半部分のみであり全容は不明である。 底部は若干丸味を有しており、ナデ調整を 施す。体部外面は横ナデ調整である。胎土 には細砂粒を含む。焼成は良好であり、色 調は暗灰色を呈する。	
250	柱穴群	須恵器横 瓶	B ( C	口径 10.2cm	口縁部下面に突帯を配する。口頸部内外面は横ナデ調整を施す。頸部外面にヘラ記号を有する。胎土には細砂粒を含む。焼成は良好であり、色調は灰黒色を呈する。	
251	柱穴群	須恵器	B , C	口径 15.9cm	頸部は短く、外反する。口縁端部は平坦面を有する。肩部外面は平行叩きを施し、以外の部分は自然釉付着のため調整法は不明である。胎土には細・小砂粒を多量に含む。焼成は良好であり、青灰色を呈する。	
252	柱穴群	須恵器	B s C	口径 18.0cm	口縁部に粘土を貼付して肥厚させており, 断面は方形を呈する。自然釉付着のため調 整法は不明である。胎土には細砂粒を多量 に含む。焼成は良好であり, 色調は暗灰色 を呈する。	
253	柱穴群	須恵器	B ( C	口径 21.0cm	口縁部に粘土を貼付して肥厚させており, やや下方へ突出する。口頸部内外面とも横 ナデ調整を施す。胎土には細砂粒を若干含 む。焼成は良好であり,色調は灰色を呈す る。	
254	柱穴群	須恵器	B \$ C	口径 25.0cm	口縁部に粘土を貼付して肥厚させる。頸 部外面はカキ目調整し、内面は横ナデ調整 を施す。胎土には細砂粒を多く含む。焼成 は良好であり、色調は小豆色を呈する。	



- 67 -

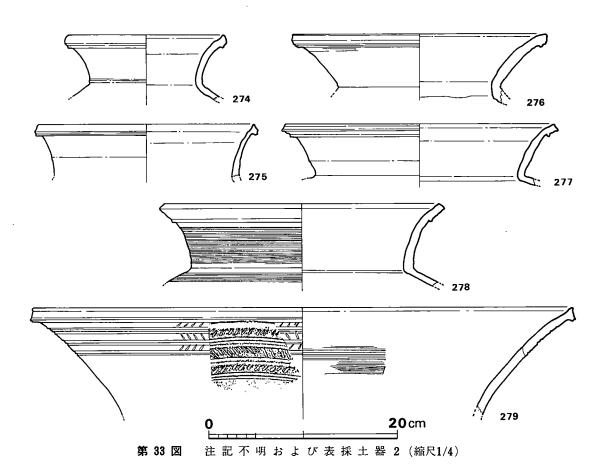
番号	出土遺構	器 種	時 期	法	量	特 数	備	· ;	考
255	柱穴群	須 恵 器	B f C	口径	18.0cm	焼けひずみを生じている。頸部外面は 行叩き上を横ナデ、胴部外面は平行叩き をカキ目調整し、内面は同心円叩き上を ナデしている。頸部外面にへラ記号を有 る。胎土は砂粒を含み,焼成良好,暗灰色	上 黄		
256	柱穴群	須恵器	B ( C	口径	27.4cm	長頸の甕である。口縁部は若干粘土を付し、沈線を配する。頸部2ヵ所に沈線配し、3段に刺突文を施す。内外面ともナデ調整である。胎土には細砂粒を含む焼成は良好であり、暗灰色を呈する。	を 黄		
257	柱穴群	須 恵 器	B s C	口径	36.7cm	口縁部を若干肥厚させ,断面は方形をする。頸部には沈線を施し,波状文を施す胎土には細砂粒を含む。焼成は良好であり 色調は暗灰色を呈する。	•		
258	柱穴群	須 恵 器	B , C	口径	38.3cm	口縁端部は平坦であり、頸部に沈線をす。外面はカキ目、内面は横ナデである胎土には細砂粒を多量に含む。焼成は良であり、色調は暗灰色を呈する。	s		
259	柱穴群	須恵器	B s C	口径	40.0cm	口縁部の断面は方形を呈する。頸部の ヵ所に沈線を施し、頸上部には3段に波 文を配する。内面はカキ目調整し、内面 横ナデ調整である。胎土には細砂粒を含む 焼成は良好であり、暗灰色を呈する。	<b>伏</b>		
260	柱穴群	須 恵 器	B s C	口径	51.4cm	口縁部は若干丸味を有する。頸部3ヵに沈線を施し、各沈線直上部には波状文入る。外面は横ナデとカキ目、内面は横 デを施す。胎土には細砂粒を多く含む。 成は良好であり、灰黒色を呈する。	がナ		
261	柱穴群	須恵器	B s C	底径	10.0cm	30と同じで短い頸のつく壺と思われる。 外面の一部はカキ目を施し、ナデる。内 は底面近くに粘土の接合痕がみられ、横 デとナデを施す。胎土には細砂粒を含む。 焼成は良好であり、暗灰色を呈する。	面 ナ		
262	注記不明	須 恵 器	С	口径 器高	12.9cm 3.2cm	口縁端部は丸くつくられている。天井 外面は手持ちヘラ削りを施す。この部分 内面はナデ、以外は横ナデを施す。胎土 は細砂粒を多く含む。焼成は良好であり、 暗灰色を呈する。	のに		
263	注記不明	須恵器杯 身	С	口径器高	10.9cm 3.8cm	口縁部は丸くつくられている。天井部 面はナデ,以外は横ナデ調整を施す。胎 には細砂粒を多量に含む。焼成は良好で り,暗灰色を呈する。	±		
264	注記不明	須 恵 器	С	蓋受け部	12.0cm 0.6cm	立ち上りは短く、内傾する。この部分の外面は蓋の重ね焼きが一部みられる。底が外面は手持ちへラ削りし、以外は横ナデ整である。胎土には細砂粒を含む。焼成り良好であり、暗灰色を呈する。	部間		



第32図 注記不明および表採土器1 (縮尺1/3)

番号	出土遺構	器 種	時期	法	量	特	徴	備	考
265	注記不明	須恵器高 杯	B (C	脚裾径	9.1cm	は屈曲させて裾を広はカキ目調整する。	の沈線を施す。脚裾部 げる。杯部外面の底部 以外は横ナデ調整を施 を若干含む。焼成は良 する。		
266	注記不明	須恵器平 瓶	B , C	口径	6.7cm		デ調整を施す。胎土に 。焼成は良好であり, る。		
267	注記不明	須恵器平 瓶	B , C	口径	6.7cm	内面は同心円叩きの	ナデ調整である。胴部 上を横ナデ調整する。 量に含む。色調は灰黒		
268	注記不明	須 恵 器		口径	17.6cm	著しいため調整法は	著しい。器面の剝落が 不明である。胎土には 。焼成は良好であり, る。	土師形	i器的 態

番号	出土遺構	器 種	時 期	法 量	特	徴	備	考
269	表 採	須恵器 杯 身	A	口径 10.6cm 蓋受け部径 12.0cm 立上り高 1.3cm	立ち上りはやや長く 中ほどから直立する。 整を施す。胎土には紐 焼成良好であり、青灰	砂粒を多量に含む。		
270	表 採	須 恵 器 杯 身	В	口径 10.2cm 蓋受け部径 12.0cm 立上り高 0.9cm 3.2cm	立ち上りは短く, わ 部内外面ともナデ調整 施す。胎土には細砂粒 成は良好であり, 色調	をわずかに含む。焼		
271	表 採	須恵器 杯 身	В	口径 10.7cm 蓋受け部径 12.6cm 立上り高 0.8cm	立ち上りは短く,内へラ削りを施し,以外である。胎土には細砂好であり,色調は暗灰	粒を含む。焼成は良		
272	表採	須恵器 杯 身	С	口径 10.2cm 蓋受け部径 12.0cm 立上り高 0.6cm 器高 3.5cm	立ち上りは短く,ほ面はヘラ削りし,この以外の部分は横ナデ調 細砂粒を含む。焼成は灰黒色を呈する。	整を施す。胎土には		
273	表 採	須恵器	A	口径 5.8cm 最大径 10.9cm 器高 6.3cm	頸部は若干内傾する はヘラ削りを施し,上 る。底部内面はナデ, 胎土は微細粒を含む。 小豆色を呈する。	以外は横ナデを施す。		
274	表 採	須恵器	B , C	口径 16.3cm	口縁部は粘土を貼付 頸部の外反度は著しい 調整を施す。胎土には 焼成は良好であり,色記	細砂粒を多く含む。	•	
275	表 採	須 恵 器 変	B s C	口径 22.9cm	口縁部は粘土を貼付を配する。自然釉付着である。胎土には細砂好であり, 灰黒色を呈	粒を含む。焼成は良		
276	表 採	須 恵 器 変	B ( C	口径 27.0cm	頸部の外反度は著し 線を配する。頸部外面 デ,内面は横ナデを施 砂粒を含む。焼成は良 色を呈する。	す。胎土には細・小		
277	表 採	須恵器	B s C	口径 28.2cm	口縁部は粘土を貼付 は方形を呈する。内外 ため調整法は不明であ 多量に含む。焼成は良 色を呈する。	る。胎土に細砂粒を	-	-
278	表 採	須恵器	B s C	口径 29.0cm	口縁部は粘土を貼付 は長方形を呈する。頸 目を施し、胴部内面は る。以外は横ナデ調整 く含む。焼成は良好で	同心円叩き上をナデ 。胎土に細砂粒を多		

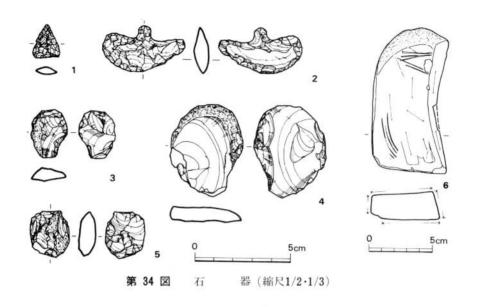


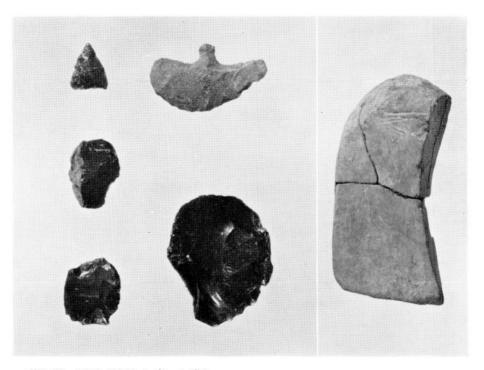
番号	出土遺構	器 種	時 期	法	量	特	徴	備	考
279	表 採	須 恵 器 変	B s C	口径	57.4cm	沈線を3ヵ所施し, 段入れる。外面は横	頸部上半部に各2条の 沈線直上に刺突文を3 ナデ,内面は横ナデと す。胎土は細砂粒を含 り,灰色を呈する。		

## 2. 石器(第34図)

打製石鏃,石匙・砥石等が出土している。1は,灰原イ付近の大穴から出土した長さ1.7cm・厚さ4.1mm・重量0.7gの平基になる石鏃で,暗灰色を呈す黒曜石を素材とし全面に調整剝離が及ぶ。2は、3号窯の表層から出土した安山岩製横型石匙で、刃部の一方には粗い剝離がめだち細かな調整剝離は一方に片寄る。重量6.6gを測る。3・4は、使用痕のある黒曜石剝片で、前者は灰原口西2区の灰原底面下出土の不定形剝片で背側に自然面が残る。後者は灰原イ付近大穴出土の翼状になる剝片の先端側にあたる部分の自然面を取り除いて刃部としたもの。5は、最下段柱穴群から出土した長さ2.4cm・幅2.1cm・厚さ0.9cmの大きさの黒曜石の残核で、一面は自然面である。剝離は主に上下両端から施されている。6は、灰原口西2区の下層から出土した青灰色粘板岩製砥石で、図示した面とその左右両面はよく使用されており、特に図右側の面は大きく弯曲している。

これらの石器のうち、砥石のみ窯跡群等の時期に使用された可能性があると思われるが、他の例は、弥生時代までに限定しうる種類のもので、横型石匙は繩文時代早期~前期頃の所産である可能性もある。3~5の黒曜石にはいずれも自然面(皮)が残されており、5の例からみて母岩は拳大もしくはそれよりも小さな円礫であったと推定される。





第34図 石器 (縮尺 1/2・1/3)

## III. まとめ

## 1. 野間窯跡群出土の「似非土師須恵器」について

## 1)はじめに

形としては須恵器に近いものから土師器に近いものまで多様で、手法的には須恵器、焼成は硬質で、色は黄・茶・赤褐色を呈する土器が古墳の副葬品として知られ、いわゆる「赤焼土器」として注目されてきた。固苦しい用語を用いることとなったが、野間窯跡群ではいままでいわゆる「赤焼土器」としたものの他に、これと同種の器形のもので、明らかに窯内で焼いた硬質灰陶が存在し、この「赤焼土器」という用語が不適当なものとなってきた。

いまこの種の土器の研究史を紹介し、問題点を整理して本論にはいりたい。

#### 2) 問題の所在

#### a. 「赤焼土器」についての研究史

いわゆる「赤焼土器」の問題がとりあげられたのはきわめて近年のことで、1971年に高島忠平・西弘海氏が福岡県嘉穂郡桂川町寿命王塚古墳出土の杯・直口壺に言及したのがはじめてであった。両氏はこれらは『須恵器と同様ロクロ成形によっており、器形も同様である。胎土は精良で、須恵器にくらべてほとんど砂を含んでいない。また直口壺の底部はナデて仕上げているが、杯の底部外面は、中央部を一方向にケズリ、その周辺を左回りに5~6回に分けてケズる。この底部ケズりは一般の須恵器の杯類の底部ケズリと手法を異にしており、単に、須恵器の焼き損じとはいいきれない。すすめていうなら、この「赤焼き」の一群の存在は、この種の土器の比較的多く分布する九州において、一般の須恵器工人とは異った系統の工人集団の存在がうかがわれる興味ある事実である』という風に問題提起した(註1)。高島氏はさらに一歩進めて、『この「赤焼き」土器は一般の須恵器と同様にロクロ成形によっているが、胎土・底部の調整手法に相違がある。従って、この種の土器が比較的多く分布する九州において、一般の須

恵器工人とは異った系統の工人集団の存在,朝鮮半島からの製陶技術移入の多元性を推測しうる興味ある事実であるのかもしれない。』と技術移入の多元性について言及した(註2)。

石山勲氏は福岡県粕屋郡須恵町乙植木2号墳・4号墳出土のこの種の土器をとりあげ「範囲を広げて須恵器に似て非なるもので土師器とも異なる土器と大雑把に規定すると、その内部では須恵器に比して低火度焼成である点で共通しながらも、焼成度・成形・調整手法上等ではかなりの差異が見受けられる。焼成度では、A一黄灰色を呈し軟質、Bー赤褐色を呈して硬質、の二者があり、手法上でも、1 - 須恵器のそれと大略同様であるが細部に小異がある、2 - 成形・調整用器具は同一とみられるが手法上でかなりの隔りが認められる。に二分される。上記だけでも4種があり、これら全てを同列に扱うことの可否はなお検討の余地があるが、単なる焼き損じとは割り切れない識別すべき一群の土器が存在することは事実である。」『これらの土器の製作者達の成形・調整の熟練度が須恵器工人に比して格段に劣ることは、この種の土器に須恵器特有のシャープさに欠けるものが多いことでも明らかであるが、彼らの致命的な欠陥はむしろ焼成技術面での拙劣さにあると思われる。従って、この種の土器を「製陶技術移入の多元性」に基く生産物と意義づけるよりも、むしろ須恵器生産におけるギルド的閉鎖性がもたらした副産物と評価すべきではあるまいか。現時点では、この種の土器を集中的に生産・使用する地域は特定されておらず、これは上記の推測を傍証すると思われる。』としている(註3)。

児玉真一氏は福岡県宗像郡津屋崎町奴山33号墳出土のこの種の杯蓋・身・高杯・提瓶をとり あげ、「これらは提瓶が淡茶色を呈して軟質な焼成であるのに対して、他は茶褐色~赤褐色を 基調とし比較的硬質である。整形や調整は須恵器と同様にロクロによってなされている。しか し,一部の土器(杯蓋-25)にはその内面にヘラ先によるラセン状暗文が施されており.これ は須恵器に見られない要素である。だが杯身・蓋内面のへラ記号や高杯のカキ目は須恵器に― 般的にみられるものである。また,胎土は須恵器と比べてきめが細かく砂粒を余り含まないも のである。」「形態は須恵器に準ずるが、杯類は同時に出土した須恵器の杯類に比べてひとま わり小形であり、提瓶は腹部側が半球状につくられて丸味をもつのに対して背部側は全く丸味 を持たず,須恵器の提瓶と比較して側面観は偏平で整形も雑で器肉が厚くシャープさに欠ける。 高杯は同じ33号 墳出土の須恵器と比べて大形で杯部が深く体部が外反して口縁部が大きく開く 点は異るが,34号墳出土の高杯とはよく似ており,基本的には須恵器と異なるところはない。」 とし『本墳出土の「赤焼き」は器形的には須恵器をベースにつくられ,小異はあっても,整 形・調整手法,ヘラ記号の刻印等は須恵器と同様である。後述するように「赤焼き」は須恵器 をベースにつくられた土器であり,土師器にしかない器形で須恵器の整形や調整手法の一部が とり入れられ,硬質に焼かれたとしてもそれは土師器とすべきであろう。』とし次のように定 義づける『よって、「赤焼き」土器は、

1. 同時期の須恵器の器形をベースに、ロクロを使って須恵器と同じ整形技法・調整手法を

用いてつくられる。一部に調整法において土師器の要素を含まないわけではない。

2. 胎土はおおむね精良できめ細かく,須恵器と比して、低火度焼成を行い、赤褐色・黄褐色等を呈することが多い。』

次にその性格にまで及び「基本的には葬送儀礼や古墳構築の過程において執り行われる"まつり"に際して使用される目的を持った土器であろうと考える。」とし、さらにこの種の土器、のへう記号が同じ古墳より出土した須恵器のへう記号と異なる点をとりあげ、高島・西氏の問題提起と対応させ、『へう記号の違いが工人あるいは工人組織の違いをそのまま反映するとすればこのへう記号の問題は興味深い事実ではある。しかし、そのような工人集団の存在を想定するにしても、「赤焼き」土器の出土量は須恵器や土師器と比較して極めて少量であり、その工人集団は小規模なものであったろうと考えられる。また先述のように須恵器と酷似していることから須恵器の工人集団と組織的に重なり合う部分があった可能性も考えられる。」(註4)としている。

川述昭人氏は福岡県田川市弓削田所在の狐ヶ追横穴群から出土したこの種の提瓶 2, 高杯 9 把手付鉢 1, 直口壺 1 をとりあげ, とくに提瓶の一つにみられる黒斑に注目し, 次のようにまとめた。『「赤焼き」土器を, 色調は茶褐色ないし黄褐色系を呈し, 焼成は硬質もしくは軟質であって,

- ① 成形,調整法は須恵器と同一だが,器壁が厚くシャープさに欠けるもの。
- ② 成形,調整法は須恵器と同一だが,細部の特徴が土師器的で,しかも全くの土師器とも異なるもの。
- ③ 最も異なる点は、土器に黒斑がみられるものがある事から、登り窯を用いる須恵器焼成法とは別個の焼成法、例えば野焼き等の焼成方法をとるもの。と考える。

以上のことから、器形の細部において須恵器とは若干異なる点から土師器の工人身団が、須恵器の技法をとり入れた土器を登り窯を用いずに焼成したものを「赤焼き」土器と考える。』としている(註5)。

これらの他に、この問題に言及したものが若干あるが、この4者の見解が代表的であり、現在までの問題点がつくされていると考える。見解は大きく2つに分かれ、1つは高島・西氏と児玉氏による、この種の土器が須恵器であるという認識と、一般的須恵器工人集団とは異なった工人集団の存在と、技術移入の多元性という考え方であり、1つは石山、川述氏らによる、この種の土器が土師器の工人集団が須恵器の技法をとり入れて、登り窯を用いずに焼成したものという考え方に要約される。

さて以上の問題提起をふまえて,野間窯跡群出土のこの種の土器を中心に,他の遺跡出土の 土器をも考慮しつつ,次に問題点を整理してみたい。

#### b. 問題の所在

いわゆる「赤焼土器」については今まで古墳の副葬品等が多く、器種も杯蓋・杯身・高杯・ 提瓶等にかぎられて問題にされてきた。福岡県糸島郡二丈町深江、塚田遺跡からはこの種の甕・ 頂等の日常容器がかなり出土し(註6)、野間窯跡群からも、この種の甕・甑等の器種が多く出 土した。野間窯跡群からはこれまでいわれてきた、いわゆる「赤焼土器」も存在するが、当然 のこととして同様の器形の硬質灰陶も存在する。したがっていわゆる「赤焼土器」という用語 が不適当なものとなってきた。「赤焼土器」のなかには当窯跡の資料によって明らかに須恵器 が存在することは確実であり、又土師器の存在も否定することはできない。したがって前述の 研究史もふまえて、固苦しい用語を用いて恐縮ではあるが、次のように概念規定を試みた。

#### 1. 似非土師須恵器(第35・36図)

形態は土師器といってもよく、手法的にも一部土師器的手法をもつが、胎土・成形・調整等からみて須恵器工人の手によって作られ、登り窯またはその周辺、たとえば焚口、煙出し部などで焼成したもの。したがって軟質赤焼のものもあるが、多くは硬質赤焼のもので時には黒斑も生じる。窯内で焼成したものには、硬質灰陶とともに、須恵器の生焼け同様の赤焼硬質のものもあると思われる。

#### 2. 擬土師須恵器(第37図)

形態は土師器に似せてつくるが、土師器とも通常の須恵器とも異なる形態をもつものが多く、胎土および成形・調整手法は須恵器的で、須恵器工人によって作られ、登り窯またはその周辺で焼成されたもの。したがって硬質赤焼、硬質灰陶の両者がある。

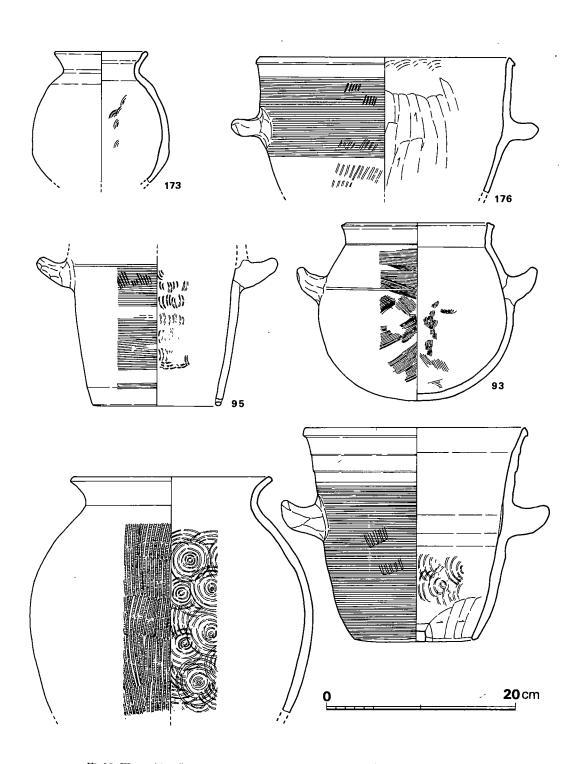
#### 3. 似非須恵土師器(第38図)

形態は須恵器で、したがって成形・調整手法も須恵器と変らないが、細部において通常の 須恵器に比して稚拙な点が認められ、胎土・焼成法は土師器と同様で、土師器工人の手にな るもの。

#### 4. 擬須惠土師器(第39図)

形態は須恵器に似せようとし、須恵器的手法ももつが、胎土および成形手法等からみて、 土師器工人によって作られ、土師器と同じ焼成法をもつもの。

野間窯跡群出土のこの種の土器および塚田遺跡出土のこの種の土器の一部が1にあたり、塚田遺跡出土のこの種の土器の大部分が2にあたると考えられる。3には福岡市西区高崎2号墳の有蓋脚付壺・椀(註7)福岡県筑紫野市野黒坂遺跡出土の杯蓋・身等(註8)があげられる。野黒坂出土の杯身には黒斑が認められる。4としたものは等39図に示した野黒坂遺跡出土の杯蓋・身などはっきり土師器と認識できるものが多いが、これらの他に高崎2号墳出土の高杯、提瓶



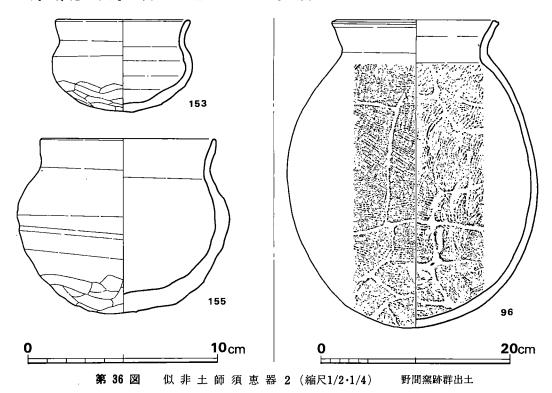
**第 35 図** 似 非 土 師 須 恵 器 1 (縮尺1/4) 無番号は塚田遺跡出土

等の類がいわゆる「赤焼土器」の部類にいれられていたものと考える。

以上の分類にしたがって各遺跡出土のこの種の土器をみなおす必要があるが、とりあえず野間窯跡群出土のこの種の土器についてみるならば、窯とその周辺で焼いたことは確実である。 したがってこれらを須恵器と認定し、形態的には土師器に似ているので、その大部分を「似非土師須恵器」としたい。

## 3) 野間窯跡群出土の「似非土師須恵器」について

前節でみたように「似非土師須恵器」には、窯の周辺たとえば焚口または煙道付近で焼いたものと考えられる軟質赤焼・硬質赤焼のものと窯内で焼いた硬質灰陶が含まれる。前者には、93・95・96等があげられる。96は甕で、形態は土師器に酷似するが、器面は平行線タタキのあとハケ目仕上げ、内面には青海波が残る。又器面には黒斑も認められる。やや軟質の赤焼である。93は把手付壺で、器面は平行線タタキの後カキ目調整、内面は青海波で硬質灰陶。95は甑で、器面は平行線タタキの後カキ目を施こし、内面は青海波をナデ消している。底部に2ヶ所一対の穿孔がある。器面には黒斑が認められる。硬質赤焼である。後者には94・176・177の甑、



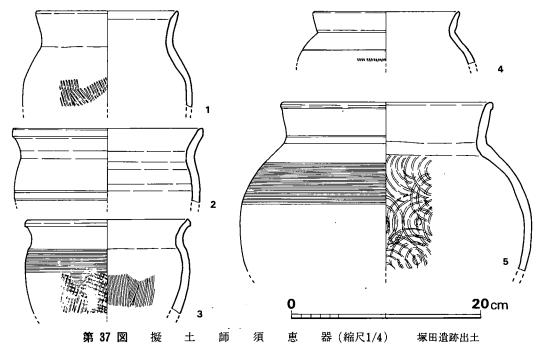
**- 78 -**

173の襲,153·155の小壺がある。94の器面は縦方向平行線タタキの後カキ目調整,内面は青海波の後ヨコナデを施こし,硬質灰陶。177は器面はカキ目調整,内面はヘラ削りで,硬質灰陶。176の器面は平行線タタキの後カキ目調整,内面はヘラ削り様のナデ調整で,硬質灰陶。173の器形は土師器に共通するものであるが,器面は黒色,内面は灰黒色で全体に自然釉がかかっており,硬質のもので,窯内で焼いたことが明らかである。153・155ともに器形は土師器に共通するものであり,ともに硬質灰陶である。

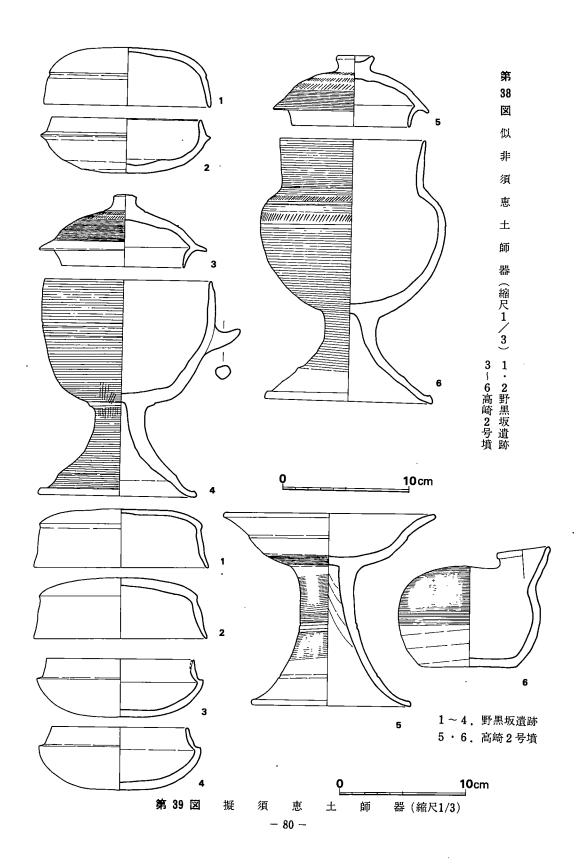
以上のように野間窯跡群においては、いままでいわゆる「赤焼土器」と呼ばれていたものと それと同様のもので窯内で焼かれ、硬質灰陶のものが存在する。しかしながらこの種の土器が かなり目につくとはいえ、全体の量からいうならばわずかなものであって、須恵器工人が片手 間程度に土師器的器形のものを須恵器の技法を用いて作り、登り窯またはその周辺で焼いたも のといえる。

## 4) おわりに

現在までいわれてきたいわゆる「赤焼土器」が須恵器の窯でも焼かれていたことが明らかとなり、硬質灰陶もあって、いわゆる「赤焼土器」と呼称するには不適当となってきた。他遺跡 出土のこの種の土器をも考慮しながら、



-79 -



- 1. 似非土師須恵器
- 2. 擬土師須恵器
- 3. 似非須恵土師器
- 4. 擬須恵土師器

に分類した。したがって今後の詳細な検討を要するが、これまでいわれてきたいわゆる「赤焼土器」には須恵器、土師器の両者があることは否定できない。しかしながら須恵器であっても研究史の項でみてきた一般の須恵器工人集団とは別系統の工人集団の存在を想定する必要はなく、一般の須恵器工人集団が片手間程度に土師器をまね、又は土師器に似せて作り、焼いたものと理解するのが実態に近いものであろう。

以上をまとめるにあたり、文化課の井上裕弘、浜田信也、川述昭人、中間研志、児玉真一氏等の諸兄と有益な討論が行われたこと、又各遺跡出土遺物の実測図に関しては文化課技師諸兄の配慮を得たことを、記して感謝します。

#### 註

- 1. 高島忠平・西弘海「寿命王塚古墳」奈良国立文化財研究所年報 1971
- 2. 高島忠平「5 王塚古墳 土器」児島隆人・藤田等編『嘉穂地方史』先史編 1973
- 3. 石山勲『Ⅲ 結語 6「赤焼き」の土器について』福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道 関係埋蔵文化財調査報告』 X 1977所収
- 4. 児玉真一『「赤焼き」土器について』津屋崎町教育委員会『奴山古墳群』津屋崎町文化財 調査報告書 第3集 1981所収
- 5. 川述昭人『Ⅳおわりに a 「赤焼き」土器について』田川市教育委員会『狐ヶ迫横穴群』 田川市文化財調査報告書 第1集 1981所収
- 6. 福岡県教育委員会「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」 第7集 1982
- 7. 福岡県教育委員会「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」 第1集 1970
- 8. 福岡県教育委員会「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告」 第1集 1970

# 2. 北部九州におけるいわゆる「赤焼土器」について

前節では、いわゆる「赤焼土器」についての研究史を紹介し、問題点をとりあげて整理し、さらに、当窯跡出土資料を加えて概念規定を試みた。ここでは北部九州における出土品のうち、今まで、いわゆる「赤焼土器」と言われてきたもの、またその範疇と考えられるものをとりあげて、前述の分類にそって検討してみる。

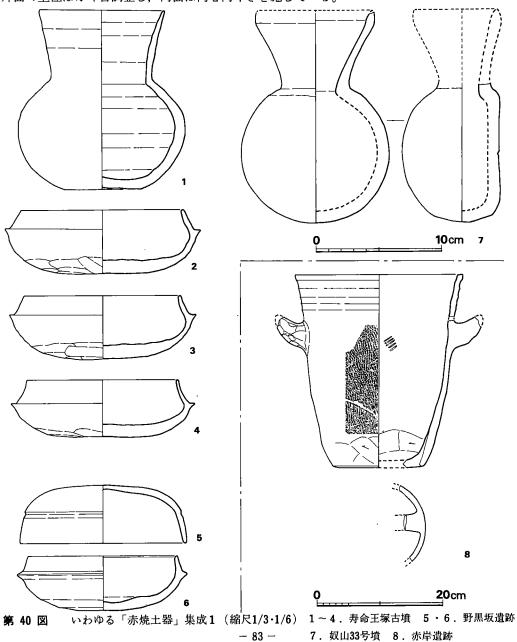
## 1)似非土師須恵器

当該窯跡出土品にかなりみられる。例えば第35図93,第21図96,塚田2号墳周溝出土の甕, 飯等がこれに該当する。これらの土器は形態は土師器そのもので,土師器と言ってよいが,調 整法は須恵器の技法を用いている。93は把手付壺で、胴部外面は平行叩き上をカキ目調整し、 内面は同心円叩き上をナデ調整する。胎土には砂粒を多く含む。焼成は硬質であり,茶褐色を 呈する。96は甕で、胴部外面は平行叩き上を刷毛目調整し、内面は弧状叩きを施す。一部に黒 斑がみられる。胎土には砂粒を多く含む。焼成硬質であり,色調は茶褐色を呈する。いづれも 窯およびその周辺の焼成品である。塚田2号墳周溝出土甕は胴部外面に平行叩きを施し、内面 は同心円叩きを施す。胎土は良好である。焼成は硬質であり、色調は茶褐色を呈する。甑は胴 部外面を平行叩きし,カキ目を施す。内面は同心円叩きを施しており,底部近くはヘラ削りを 施す。胎土には砂粒を多量に含む。焼成はやや軟質で,色調は茶褐色を呈する。第40図 8 の甑 は二丈町赤岸1号住居跡出土品であり、胴部外面は平行叩き、内面は若干弧状叩きが遺存する。 底部近くは内外面とも手持ちヘラ削りを施す。胎土には砂粒が多く,焼成は硬質であり色調は 明茶褐色を呈する。 甑は当該窯跡からも 4 個体出土しており,いずれもこれに該当するが,塚 田2号墳出土品と異なり、焼成は灰陶であり須恵器そのものである。小田富士雄氏は天観寺山 窯跡群出土須恵器甑について『同形態の甑は一般に土師器製のものが多く,須恵器製のものは 珍らしいので土師器のそれを写したことは疑いなかろう』と論述している。

## 2) 擬土師須恵器

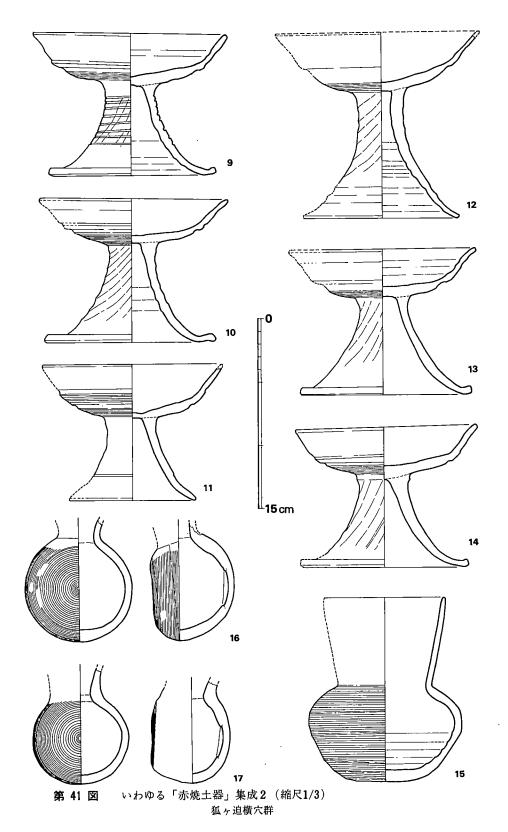
第37図の甕がこれに該当すると思われる。1・2は塚田3号墳周溝出土品で6世紀中葉に比

定される資料である。1は胴部外面中位には格子目叩きがみられ,以外の内外面は横ナデ調整を施している。焼成は硬質であり,茶褐色を呈する。2は胴部中位に2条の沈線を配しており内外面とも強い横ナデで稜を残している。焼成は硬質であり,色調は赤褐色を呈する。3は塚田遺跡V字溝出土品であり,胴部外部の下半部に格子目状の叩きを残す。胴上部はカキ目調整である。胴部内面は粗い刷毛目を施している。4・5は塚田遺跡黒色土層出土品であり,5の胴部外面の上位はカキ目調整し,内面は同心円叩きを施している。



#### 3)似非須恵土師器

福岡市高崎2号墳出土の有蓋把手脚付椀(第38図3・4),有蓋脚付壺(第38図5・6), 桂川町寿命王塚古墳出土の直口壺 (第40図1), 杯身 (第40図2~4), 筑紫野市野黒坂34号住 居跡出土杯蓋(第40図5), 3 号住居跡出土杯身(第40図6),田川市狐ヶ迫横穴群出土の提 瓶(第41図16・17),直口壺(第41図15)がこれに該当しよう。第38図3・4の椀は体部中ほ どに2条の沈線を配し、脚裾部から口縁端部にいたるまでカキ目調整し、内面は横ナデを施す。 蓋3は頂部にボタン状のつまみがつき,つまみ周辺の頂部には刺突文を施す。以下の部分はカ キ目調整し,口縁部と内面は横ナデ調整である。脚裾部近くの外面は若干段を有し,通常の須 恵器とも異なる。胎土は精選されていて良好であり,土師器通有のものと酷似する。焼成はや や軟質であり,色調は明茶褐色を呈する。5・6は壺であり,胴部上面には2ヶ所に1条ずつ の沈線を配し,直上部分に刺突文を配する。脚部の中ほどよりやや下位に4と同様の段がつき, この段を境として上面の口縁端部まで目の粗いカキ目を施しており,このカキ目手法は同古墳 出土須恵器のカキ目が細いのに対し、異なっている。内面体部上位は横ナデ,下位はナデ,脚部 は横ナデ調整である。蓋は頂部を凹弯させたボタン状のつまみがつき,つまみ周辺部には3列 に刺突文を施す。以外の部分は横ナデ調整である。胎土は土師器通有の精良なものである。焼 成はやや軟質であり、色調は明茶褐色を呈する。41図16は狐ヶ迫横穴群出土品であり、黒斑が みられる事から野焼き等の焼成法を考えたものである。16・17の提瓶は体部外面はカキ目調整 し、口頸部は横ナデを施すという須恵器の調整法であるが、器壁が厚く、須恵器通有のシャー プさに欠ける。焼成は硬質であり,色調は茶色ないし,茶褐色を呈する。胎土は精良である。 40図1~4は寿命王塚古墳出土の直口壺, 杯身であり, この資料が, いわゆる「赤焼き」土器 の問題提起を行ったものである。2~4の杯身は同時期の須恵器杯身が立ち上り端部内面に段 をなす特徴は模倣しきっておらず,また立ち上りと基部にかけての形態はシャープさに欠ける 点で須恵器と異なる。底部外面は須恵器では回転へラ削りが 通有であるのに対し, 3 個体とも 手持ちへラ削りを施している。以外の部分は横ナデを施している。胎土は精良であり,須恵器 の胎土に比してほとんど砂を含まない。40図5・6は野黒坂遺跡出土の蓋杯である。6の杯身 は須恵器杯身に似せてつくるが、細部、特に立ち上り部において須恵器と異なり稚拙である。 底部外面は回転へラ削りという須恵器の調整法である。内面はヘラ磨きを施す。胎土は精良で ある。焼成は硬質であり,色調は茶褐色を呈する。外面に黒斑がみられる。40図 7 は奴山33号 墳出土の提瓶である。当該報告書では蓋杯も「赤焼き」土器に含めていたが,これらは須恵器 の焼成不良品と思えるため、ここではとりあげなかった。提瓶は須恵器の提瓶と比して成形は 雑で,器壁が厚くシャープさに欠ける。焼成は軟質であり,色調は淡茶色を呈する。



**- 85** -

#### 4) 擬須恵土師器

田川市狐ヶ迫出土高杯(第41図 9~14), 高崎 2 号墳出土高杯(第39図 5), 平瓶(第39図 6)がこれに該当する。高杯 9~14は高崎 2 号墳出土の高杯 5 と同じく脚部の形態は土師器的である。焼成は硬質であり、色調は明褐色ないし褐色を呈する。39図の高杯の脚部は、中央部と下部に沈線を配してカキ目を施す。脚柱内面は須恵器高杯、聴等にみられるしばり痕がみられる。しかし、杯部中ほどに段を有して外反する様は土師器的である。杯部底面はカキ目調整する。焼成は硬質であり、色調は黄褐色を呈する。39図 6 の平瓶は須恵器とは異なる形態のものである。体部下半はヘラ削りし、上半部はカキ目調整を施す。焼成は硬質であり、黄褐色を呈する。

なお、野黒坂遺跡出土の蓋杯(第39図1~4)は、はっきり土師器と認識できるものが多いがこの部類にも含められよう。

以上分類にしたがって、北部九州出土のいわゆる「赤焼き」土器とよばれるものを検討してきたが、1の似非土師須恵器と2の擬土師須恵器は須恵器工人によって、登り窯またはその周辺で焼成されたものと考えられる。土師器の形態をまねた土器、もしくは、土師器に似せてつくるが、結果的には土師器とも通常の須恵器とも異なる形態をもつ土器を窯内で還元焰焼成すれば硬質灰陶須恵器となり、還元焰焼成が不十分、もしくは意識的に酸化焰焼成すれば、硬質赤焼き(時には軟質赤焼)須恵器となる。なお焚口近くで焼成した大形品については時には黒斑を生じることもある。野間窯跡でも須恵器工人が土錘、餌などの特殊品を登り窯で焼成している事実は、土師器の形態をまねて、須恵器工人が登り窯により土師的形態もしくはどちらともつかない形態の須恵器を生産することも肯首できよう。しかるに、土師器形態の須恵器を当該窯跡で焼成している事例は一般の須恵器工人集団が片手間程度に生産したと理解できよう。逆に、3の似非須恵土師器と4の擬須恵土師器は、形態のベースに須恵器があるが、須恵器そのものではなく、むしろ土師器というべきものであり、焼成は硬質、もしくは軟質である。調整は須恵器の形態を取り入れたのと同様の意味で、手法をまねており、カキ目、回転へラ削りを併用するが、このことは土師器集団にも回転台的な道具を用いれば十分可能と思われる。したがって、3・4分類の土器は土師器集団にも回転台的な道具を用いれば十分可能と思われる。したがって、3・4分類の土器は土師器の工人集団の手になる須恵器的な形態の土師器であるといえる。

以上のごとき資料は整理の過程で隨所で目についた。たとえば山門郡瀬高町名木野古墳群出 土品, 鞍手郡宮田町高平古墳群出土品の中に, 3・4に相当するものが存在したが, 今回は割 愛した。

## 3. 野間窯跡群の歴史・地理的位置

野間窯跡群須恵器の調査により遠賀郡内のⅢ B期、Ⅳ A期の須恵器の形態を知ることができたが、他地域の須恵器形式よりも杯蓋において古式の様相がみられ、本窯跡群の特徴としてとらえておく。

遠賀郡周辺でこれまでに窯跡の調査が行なわれたのは、 鞍手町所在の古門窯跡群(註1),宗像市所在の日焼原窯跡群 (昭和57年1月に調査を実施し、目下整理中であり、直線距離にして6.3㎞の至近の距離にある。)の2ヵ所である。古門窯跡群はIII B期の所産であるが、筑前、八女地方の須恵器杯蓋に比して古式の様相は残らない。即ち、口縁端内面は段がなく、天井部と体部の境にも沈線を配さない。また器形も口径に比して器高が低い。日焼原窯跡群は調査が終了したばかりであるため詳しくは触れられないが、調査時の所見ではIII A 期が若干とIII B 期が大半をしめる須恵器を出土している。

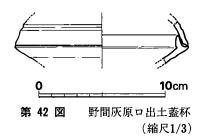
福岡県内での須恵器窯跡の分布については大別すれば豊前地方では小倉南区朽網の天観寺山窯跡群(註2)(第IV様式),トギバ窯跡群(註3)(第III・VIII様式),吉富村の山田西窯跡群(註4)(第III B様式)・山田東窯跡群(註5)(第III B様式・VI様式)があり筑前の西部では大野城市の牛頸窯跡群,春日市・太宰府町の窯跡群があり第III A様式から第VI様式の須恵器を生産している。東部では前述した鞍手町の古門窯跡群、宗像市の日焼原窯跡群・宗像市須恵の窯跡群(第VI様式が多い)がある。福岡市の新貝窯跡群では県内最古の第 I 様式の須恵器を生産している。筑後では八女市の塚ノ谷窯跡群(註6)・中尾谷窯跡群(註7)・菅の谷窯跡群(註8)・立山山窯跡群(註9)などの八女窯跡群(第III A様式から第 V様式)がある。

当該窯跡周辺で調査を実施した須恵器窯跡のうち、古門窯跡群については前述した如くであり本遺跡と同時期の蓋杯については古式の特徴の存否で異なる。

天観寺山窯跡群では第Ⅳ様式須恵器の過渡的変遷について詳述がなされており、結論的には A・B二小期区分法を確認している。当該窯跡の閉窯期の須恵器はⅣA期であり、これを天観寺山窯跡と対比すると、杯身においてはおおむね差異はないが、杯蓋においてはⅣ期まで古式の様相を残すものが半々の割り合いで見られる。

当該遺跡出土須恵器の特色について若干述べる。まず杯蓋については、口縁端部内面に沈線を配して段をなし、天井部と体部の境に沈線が入るという古式の様相がNA期にまで残ることについては前述した如くである(第42図)。

ついで、出土須恵器のうちには前述した土師器の形態をまねた須恵器を焼成していることで ある。



さらには、低、土錘、鮹壺?等の漁具を生産していることである。当該窯跡群からは低 4 個、土錘 3 個、鮹壺? 1 個が出土している。上述した特殊品は県内の窯跡調査からは出土例が少く、天観寺山窯跡群、山田東窯跡群にみられる程度であり、本来須恵器生産の副産物的なものと思われる。個々の遺物についてみていくと、まず飯は天観寺山III 区 2 号 (第 IV A 様式)に 1 個、III 区 3 号 (第

IV A 様式)に1個,山田東3号窯跡(第Ⅲ B 様式)に1個,大野城市の野添窯跡付近採集須恵器に1個みられる。土錘は当該窯跡出土品は断面円形でやや中央部のふくらんだ小円柱形で中央部に焼成前に貫通する円孔を穿っている。これに対し,小迫窯跡(註10)出土品は断面は円形の小円柱であり両端近くに各1個ずつの小孔をあけている。天観寺山窯跡出土品も,小迫窯跡出土品と同じ形態のものであり,Ⅲ区1号(第IV A 様式)から1個,Ⅲ区2号(第IV A 様式)から5個,I区2号(第IV A 様式)から6個出土している。跡間区1号(第IV A 様式)から6個出土している。

以上の如く漁具の生産は須恵器生産の主流とは思えず、需要者側の強い要望によるものと考えられ、当該窯跡や天観寺山窯跡等の如き沿岸部に近い位置に所在する須恵器窯から出土することは今後資料の増加をみることは予想できるが、牛頸窯跡等の如き平野部に所在するものからの出土例の期待はうすいと思われる。今の所・県内所見では、窯跡出土の土錘の時期はIVA期、甑は同じくIVA期に出現する。

生産された須恵器は当然需要者側へ供給されるものであり、その供給地については当該遺跡の周辺部に求めるのが妥当と思われる。したがってここでは当該窯跡の近接地で発掘調査の実施された片山古墳群・高倉東田古墳群について検討してみることにする。なお、当該地とは城山山麓で接する宗像市近辺では最近の宅地化等に伴う発掘調査により多数の古墳が調査されており、また近年、宗像市において6世紀中ばから後半代の須恵器窯跡の調査が実施されている。調査結果および今後の調査研究に期待がよせられるが、ここでは当該窯跡との需給関係について、へラ記号を一つの手段として検討してみる。片山古墳群は昭和44年に8基、昭和52年に8基と合計16基の調査を実施した。このうち当該窯跡と同時期の6世紀後半から末に比定される古墳の数は6基であったが、出土品が少ないということもあり、へラ記号を有するものは出土していないので比較材料とはならない。高倉東田古墳群の調査は昭和35年から36年に9基、昭和50年に7基、51年に4基と合計20基の古墳の調査を実施した。このうち最高所に所在する東田11号墳は墳丘中から須恵器、土師器あわせて290個体が出土した。時期的には当該窯跡とほぼ同時期であるため、へラ記号の検討から需給関係を検討してみる。東田11号墳出土品のうち杯身4個体に3種類のへラ記号が、杯蓋5個体に4種類、提紙6個体に6種類、小形甕2個体

に 2 種類のヘラ記号がみられる。したがって、総数17個体の須恵器に12種類のヘラ記号がみられ る。当該窯跡と同一のヘラ記号は /・∥の2種類だけであった。しかるにこの2種類のヘラ記 号はその線刻形態の単純さから、比較的多数の遺跡にも普遍的にみられるため、このヘラ記号 を持って,当該窯跡からの供給品とは決めがたい。当該窯跡出土192・243の蓋杯は東田11号墳 出土の77・100・107・143等と比較的似かよった形態を呈するが,胎土の点では東田11号墳出土 品の方が胎土に大粒の砂粒を多量に含むという特徴を有するため,同一窯跡で焼成されたものと は考え難い。宗像市では昭和49年に城ヶ谷古墳群で30基の調査を行った。ここでは6世紀後半 頃に属する出土須恵器のうち蓋杯2個体に1種類のへラ記号があり,磣に1種類,提瓶に1種 類,平瓶に1種類,甕7個体に6種類のヘラ記号がみられる。全体的にみるとヘラ記号は9種 類に大別される。このうち当該窯跡と共通するヘラ記号は,/・∥・∥・×印のヘラ記号であ るが,これも前述の東田古墳群出土品のヘラ記号と同様にかなり普遍的にみられる記号のため 同一窯跡のものとは決め難い。つぎに久戸古墳群であるが、これは昭和54年に7基の古墳と19 基の横穴の調査が行なわれた。へラ記号のみられる須恵器は蓋杯2個体に1種類,坩に1種類, 高杯に1種類,平瓶2個体に2種類で合計6種類みられる。このうち7世紀前半に比定される 高杯と平瓶には当該遺跡と同じ个印のへラ記号がみられる。この記号は前述の /・※等よりも 若干複雑となるため,年代的に接近している点や供給が可能な近接した位置にあるという地理 的要因等から,同一工人の手になったと考えることもできそうである。つぎに昭和52年と53年 で総数23基の調査を実施した相原古墳群がある。ここではいろんな器種にへラ記号がみられる。 杯身3個体に3種類,杯蓋4個体に4種類,坩に1種類,平瓶6個体に5種類,提瓶に1種類, 髙杯2個体に2種類,長頸壺に1種類で合計13種類のヘラ記号がみられる。このうち当該窯跡 と共通するへラ記号 /・//・///・×・WΛ の 5 種類である。 / 等はその記号の単純さから同一 窯跡と決め難いため資料から省くが、7世紀前葉の杯蓋にある\// 印のへラ記号はその記号の 複雑さ等から同窯跡の同一工人の手になる可能性が大である。

以上の如く周辺調査の出土品に同一へラ記号の存在の有無について検討したところ,久戸古 墳群の被葬者の供献土器 2 個体に 1 種類,相原古墳群の被葬者の供献土器 1 個体にへラ記号の 類似がみられ,このことから当該窯跡との関連性が考えられる。

#### 註

- 1. 上野精志 『古門窯跡』 福岡県文化財調査報告書第50集 福岡県教育委員会 1977
- 2. 小田富士雄他 『天観寺山窯跡群』 北九州市埋蔵文化財調査会 1977
- 3. 註2に同じ
- 4. 註3に同じ
- 5. 森田勉他 『垂水廃寺発掘調査報告書』 新吉富村教育委員会 1976

6. 小田富士雄他 『塚ノ谷窯跡群』 八女古窯跡群調査報告 I 1969
7. 小田富士雄他 『中尾谷窯跡群』 八女古窯跡群調査報告 II 1970
8. 小田富士雄他 『菅の谷窯跡群』 八女古窯跡群調査報告 III 1971
9. 小田富士雄他 『立山山窯跡群』 八女古窯跡群調査報告 IV 1972

10. 註2に同じ

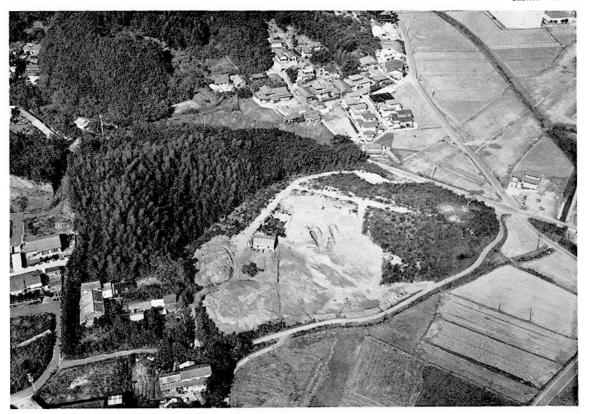
## 図 版 PLATES



遗跡付近俯瞰 1



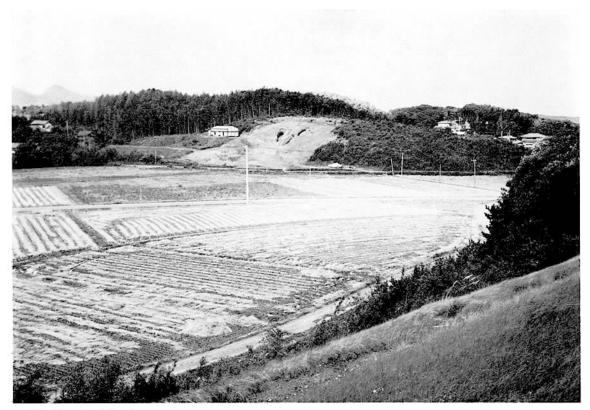
遺跡付近俯瞰 2



遺跡付近俯瞰 3



遺跡付近俯瞰 4



遺跡遠景1



遺 跡 遠 景 2



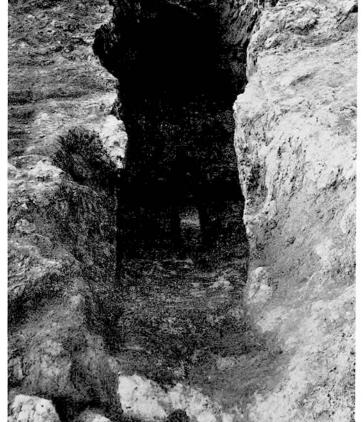
窯 跡 群 全 景



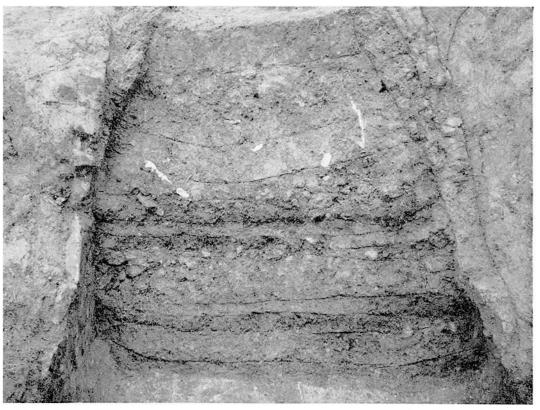
1 号 窯 全 景



1号窯第2次床面



1号窯第1次床面



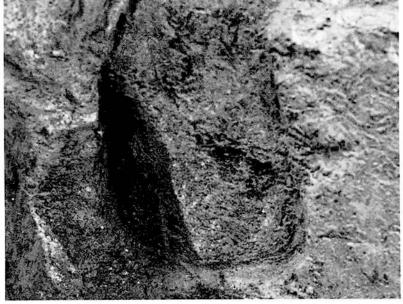
1号窯焚口付近断面



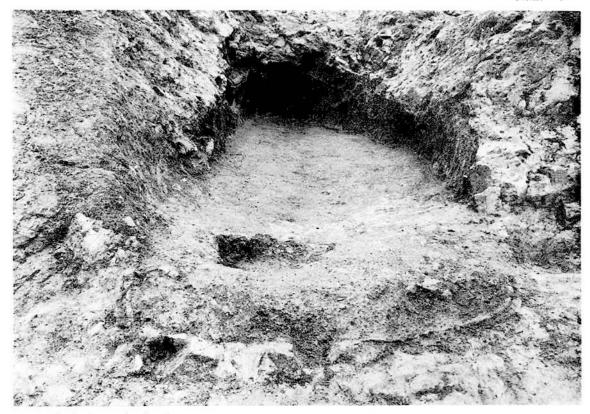
1 号 窯 煙 道



1号窯煙道部の掘削工具痕



同 Ŀ 拡 大



2号窯第2次床面



2号窯第1次床面遺物出土状態



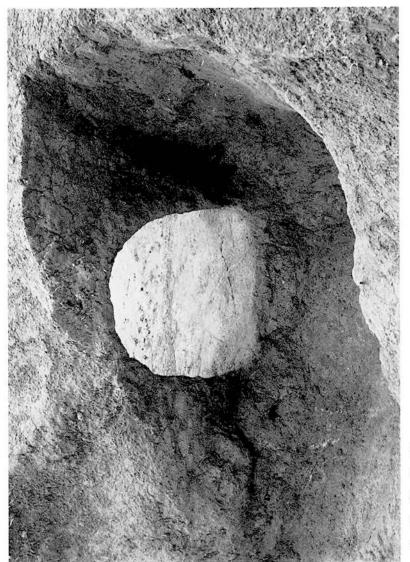
2号窯壁の掘削工具痕

2 号 窯 全 景 2

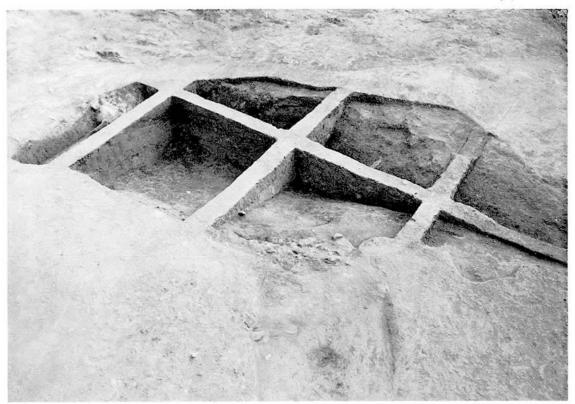


同 Ŀ 拡





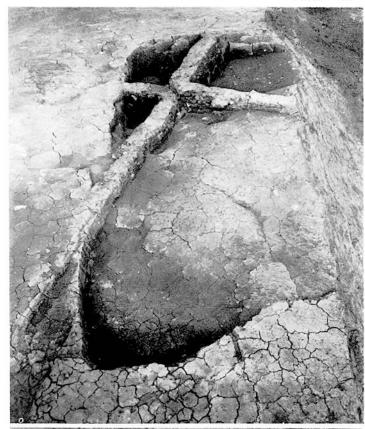
3 号 窯 煙 道



灰 原 イ



灰 原 イ



灰

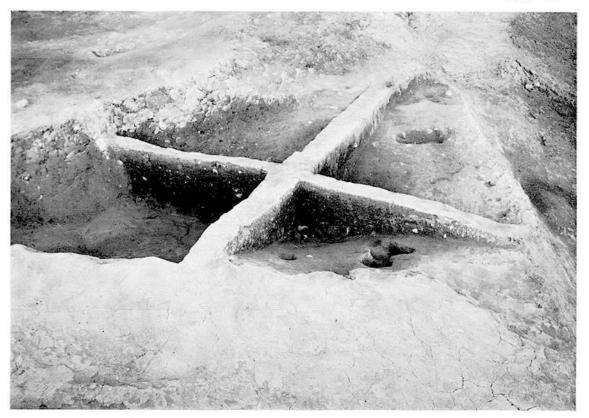
灰

原

П

原

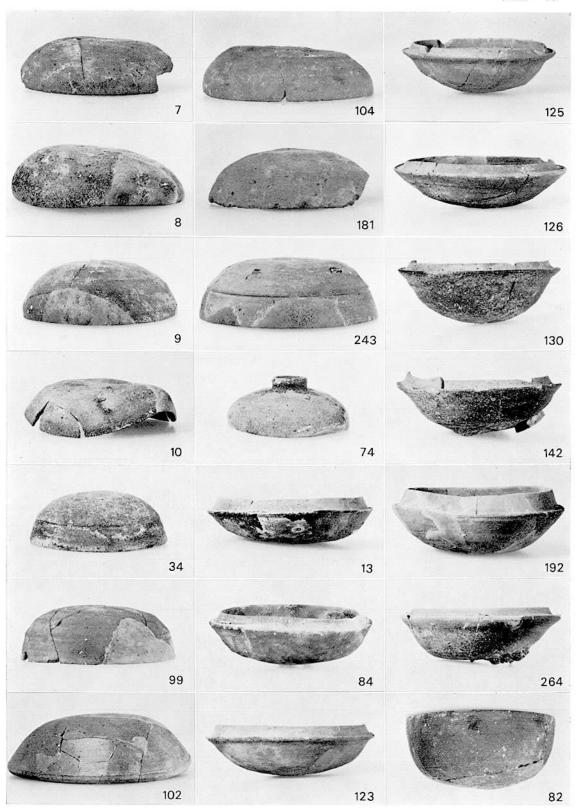
П



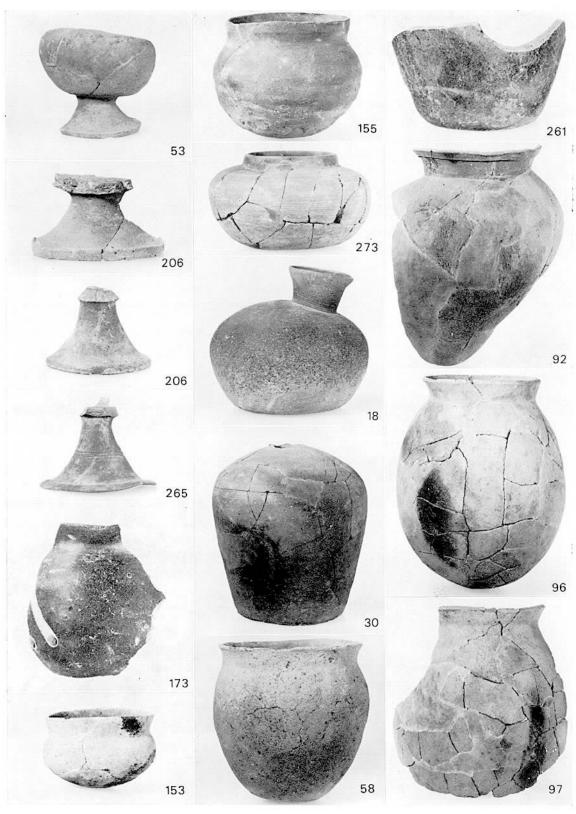
灰 原 ハ



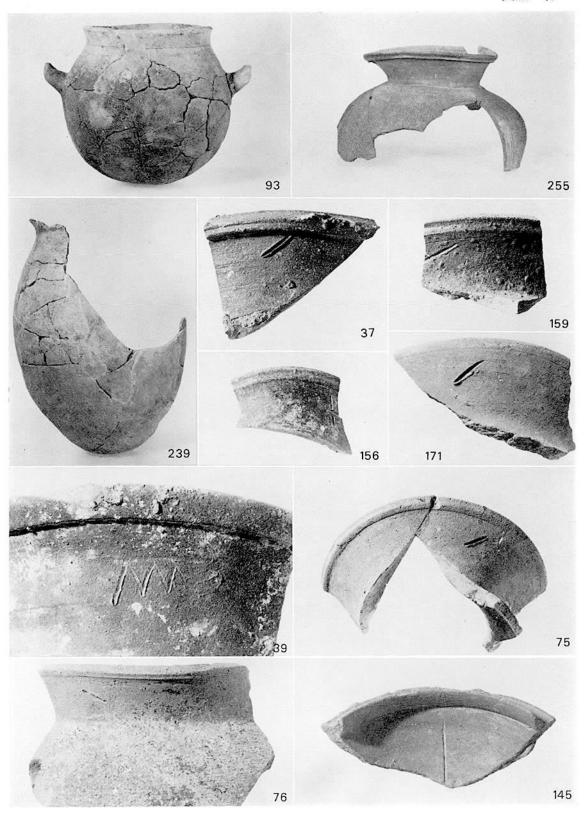
灰 原 ハ



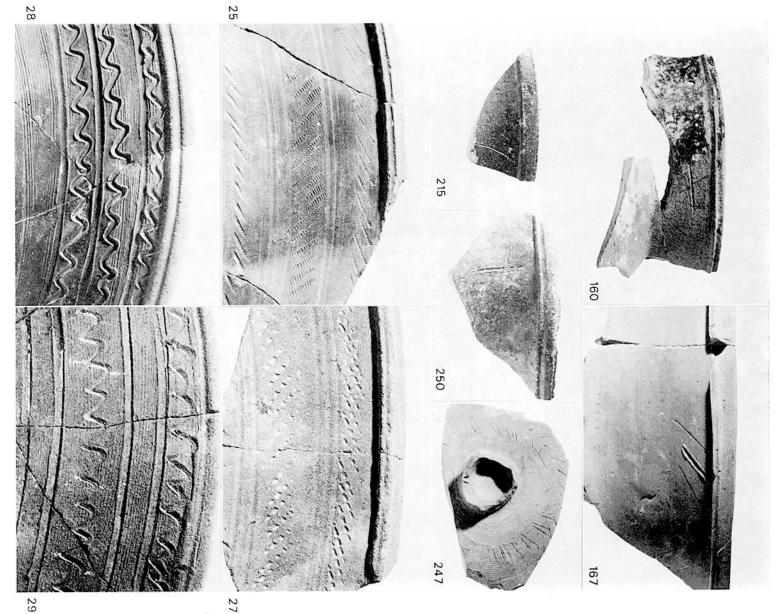
出土土器 1



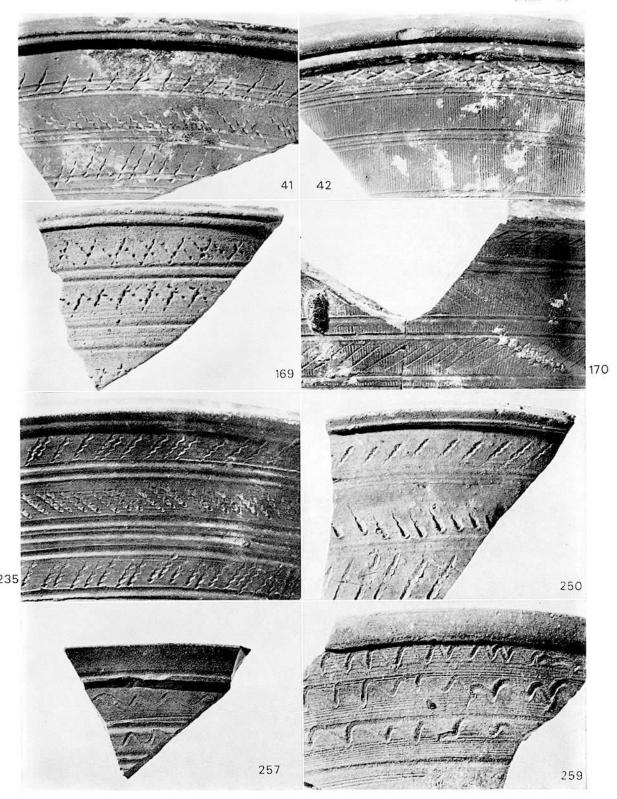
出 土 土 器 2



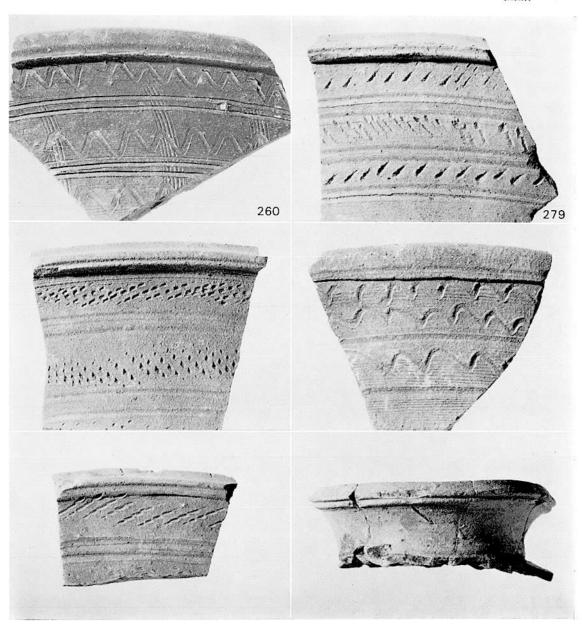
出土土器3



出土土器



出 土 土 器 5



出土土器 6

岡垣バイパス関係埋蔵文化財調査報告

第 1 集

野間窯跡群

1982年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

印刷 ㈱西日本新聞印刷

福岡市博多区吉塚8-2-15